

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

- 平成26年度 -

2015. 3

東大阪市教育委員会

## はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懷に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課と郷土博物館を設置、開館しました。考古資料を展示する登録博物館としては大阪市に次ぎ、府下の衛星都市としては初めてであり、府下市町村の博物館施設の先駆けとなりました。平成14年11月には市立埋蔵文化財センターがオープンし児童や生徒、多くの市民に広く利用され、文化財の活用と普及に努めてまいりました。

本書では、平26年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、若江遺跡、山畑古墳群、鬼塚遺跡、弥刀遺跡、五合田遺跡、皿池遺跡の調査・整理概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。

これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成27年3月

東大阪市教育委員会

# 目 次

## はしがき

### 目次・例言

第1章 平成26年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 若江遺跡第87次発掘調査（遺物編）	5
第3章 若江遺跡第89次発掘調査	37
第4章 若江遺跡第90・91次発掘調査	53
第5章 山畠古墳群第33次発掘調査	65
第6章 鬼塚遺跡第30次発掘調査	79
第7章 弥刀遺跡第10次発掘調査	89
第8章 五合田遺跡第6・7次発掘調査	97
第9章 皿池遺跡第12次発掘調査	111

# 例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額9,149,000円）で実施した、個人及び零細事業主施工による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。
- 本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
- 現地の土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準上色帖」に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 現地で出土した遺物の整理については、株式会社文化財サービス大阪支店に委託のうえ、実施した。
- 本書の編集は、仲林篤史・奈良拓弥が行った。
- 考古学用語については、佐原真・田中琢2002『日本考古学事典』三省堂の表記に従った。
- 調査では、遺構名称に略号を使用したものがある。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他遺構		

- 現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

## 第1章 平成26年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成26年度の文化財保護法第93条及び第94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は、平成27年2月28日現在で届出369件、通知34件で合計406件である。届出（通知）にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる（0件の工事名は省く）。

個人住宅	55件	分譲住宅	162	共同住宅	19件	兼用住宅	1件	店舗	6件
その他住宅	6件	その他建物	32件	道路	3件	河川	1件	学校	2件
宅地造成	16件	公園造成	1件	ガス	17件	電気	25件	水道	11件
下水道	39件	通信	3件	その他の開発	1件				

406件の届出（通知）の指導内容は、発掘調査53件、工事立会58件、慎重工事292件であった。

平成22年度では届出（通知）が445件、平成23年度が470件、平成24年度が408件、平成25年度が407件であったことから、平成20年度以降の増加を続けていた工事件数が減少に転じたことがうかがわれる。

東大阪市教育委員会では、次ページ一覧表のとおり、個人又は零細事業主による個人住宅又は共同住宅等の建築に伴う確認調査及び発掘調査を平成26年度国庫補助事業として実施した。

その内訳は、個人住宅建設に伴う確認調査が10件（うち発掘調査2件）、個人事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査が4件（うち発掘調査0件）、零細事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査が6件（うち発掘調査3件）で、合計20件である（平成27年2月28日現在）。昨年度が38件であったため、件数は減少している。平成26年度の国庫補助事業では、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が最も多く、続いて零細事業主による共同住宅等の建築に伴う確認調査の件数、個人事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査の件数という順序であった。

確認調査が必要となる工事の例としては、基礎工事に地盤改良工事又は柱状改良工事等を伴うものが挙げられる。それらの工事によって埋蔵文化財への影響が考えられることから、国庫補助事業として事前の確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要なデータを得ているところである。

最後に、本報告書では報告ができず、次年度の報告となる調査事例を簡単に報告しておく。

まず、No.1の善根寺遺跡第4次発掘調査では、確認調査により土師器等の遺物包含層と溝・柱穴を検出したため、発掘調査を実施した。調査では中世の溝のほか、古代の柱穴を検出した。善根寺第1次調査の西に隣接する位置での調査である。第1次調査では官衙としての機能を想定していたが、さらに東側にも建物群が続くことがわかった。

No.14の西ノ辻遺跡第51次発掘調査では、確認調査により弥生土器・須恵器の遺物包含層を検出したため発掘調査を実施した。

No.17の河内寺跡第23次調査では、確認調査により中世の土師器・瓦器を含む遺物包含層及びピットを検出したため、引き続き発掘調査を実施した。発掘調査では、室町時代の遺構（溝・ピット・柱穴）を検出した。

No.21の市尻遺跡第2次発掘調査では、確認調査において土師器・須恵器・製塙土器の遺物包含層を検出したため発掘調査を実施した。

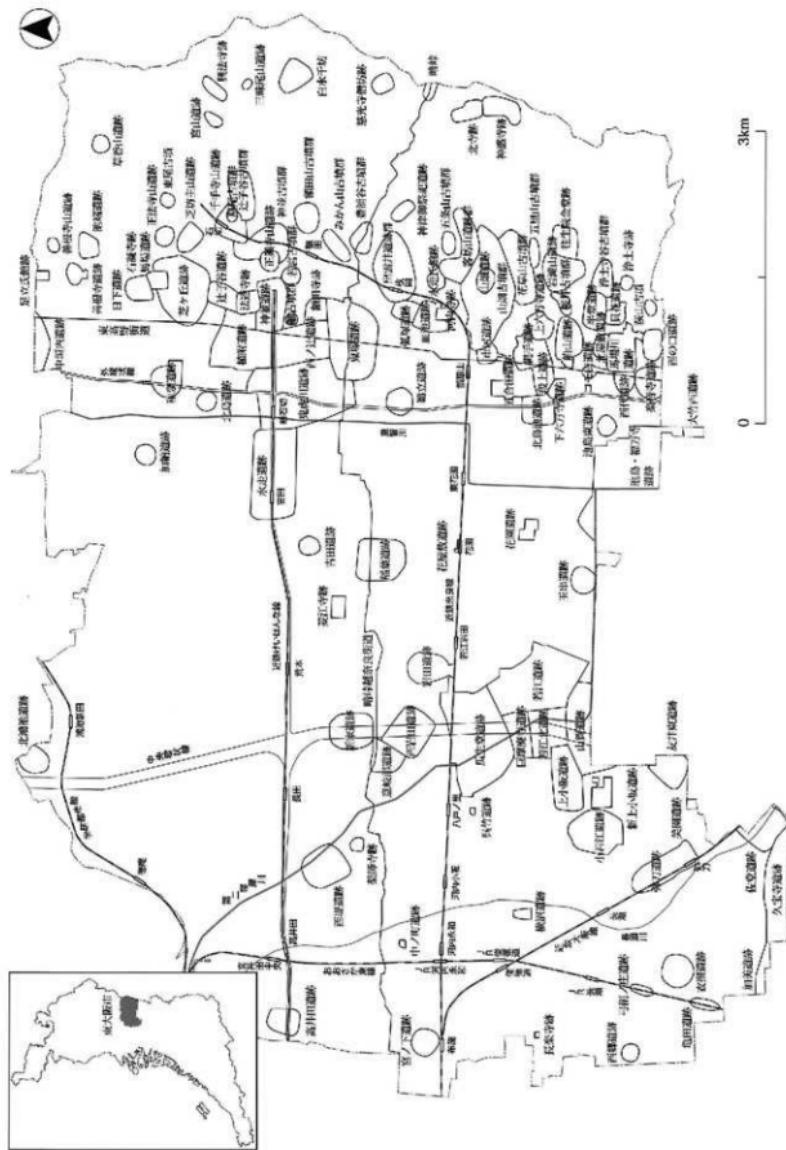
## 平成25年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況（補遺）

調査事業名 (用途)	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
33 五合田遺跡第6次調査 (個人住宅建設)	東大阪市御幸町638番78	奈良	平成26年3月6日～ 3月10日	15mf	本書第8章。
34 五合田遺跡第7次調査 (個人住宅建設)	東大阪市御幸町638番79	奈良	平成26年3月11日～ 3月14日	135mf	本書第8章。
35 貝塚遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市横小路二丁目517番9	伸林	平成26年3月14日	32mf	GL-15mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
36 前幕遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市福島二丁目178番	奈良	平成26年3月18日	2mf	GL-20mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
37 乗寺遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市御厨二丁目59番3、60番1	奈良	平成26年3月24日	12mf	GL-30mまで確認。近世の陶磁器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
38 瓜生堂遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市下小阪五丁目72番1	奈良	平成26年3月28日	4.5mf	GL-27mまで確認。土器器・須恵器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。

## 平成26年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

調査事業名 (用途)	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1 青松寺遺跡第4次発掘調査 (宗教事業による介護老人福祉施設建設)	東大阪市若松寺町一丁目640番、649番、650番、651番	奈良	平成26年5月22日～ 5月23日・平成27年 5月23日～3月31日	255mf	GL-15mまで確認。瓦、柱穴および河川を検出。詳細は次年度報告予定。
2 若江道路確認調査 (零細事業主による分譲住宅建設)	東大阪市若江本町四丁目71番8、12	奈良	平成26年5月12日 平成26年5月29日	3.75mf	GL-15mまで確認。土師器、瓦器および鏡石を検出。埋蔵文化財に影響を与えない設計に変更し工事を実施。
3 風池遺跡第12次発掘調査 (個人住宅建設)	東大阪市河内町670番11	伸林	平成26年6月10日	4mf	本書第9章。
4 若江遺跡第91次発掘調査 (宗教事業による工場建設)	東大阪市若江南町二丁目79番5	伸林	平成26年7月3日 平成26年7月7日～ 7月18日	19mf	本書第4章。
5 芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市北石切町219番51	奈良	平成26年7月4日	4mf	GL-0.9mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
6 岩田遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市岩田町西4丁目534番15	奈良	平成26年7月15日	4mf	GL-20mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
7 小若江遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市小若江三丁目310番12	奈良	平成26年8月5日	4mf	GL-22mまで確認。近世の陶磁器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
8 西ノ辻道路確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市南蔵町347番10	奈良	平成26年8月22日	4mf	GL-2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
9 鬼塚遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市新町391番2の一部	奈良	平成26年10月2日	4mf	GL-2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
10 小若江遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市小若江三丁目332番9	奈良	平成26年11月5日	4mf	GL-15mまで確認。瓦器・土器器が出土。立会調査を実施。

	調査事業名 (用意)	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
11	丸庭川遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市弥生町1500番3、 1501番1、2の各一部	奈良	平成26年11月11日	8m <sup>2</sup>	GL-2.6mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
12	佐奈遺跡・久宝寺遺跡確認 調査 (零細事業主による共同住宅建設)	東大阪市大蓮東四丁目18番1	奈良	平成26年11月19日	12m <sup>2</sup>	GL-2.3mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
13	馬場川遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市桜小路町三丁目 453番7の一部	奈良	平成26年12月5日	4m <sup>2</sup>	GL-2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
14	西ノ辻遺跡第51次発掘調査 (個人住宅建設)	東大阪市東山町1256番	奈良	平成26年12月18日 平成27年1月7日～ 1月8日	4m <sup>2</sup>	GL-2.3mまで確認。弥生土器・須恵器 が9件。詳細は次年度報告予定。
15	黒池遺跡確認調査 (零細事業主による分譲住宅建設)	東大阪市河内町457番3	伸林	平成26年12月22日	6m <sup>2</sup>	GL-0.45mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
16	花畠山古墳群確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市上四条町1277番 1、3	奈良	平成26年12月24日	3m <sup>2</sup>	GL-0.2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
17	河内寺跡第23次発掘調査 (零細事業主による分譲住宅建設)	東大阪市河内町674番17 の一部	伸林	平成26年12月22日 平成27年1月7日～ 1月9日	20.5m <sup>2</sup>	GL-0.4mまで確認。ビット・柱穴・土坑・ 溝を検出。詳細は次年度報告。
18	猪原遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市西石切町一丁目 394番2、12、13	伸林	平成27年2月2日	4m <sup>2</sup>	GL-1mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
19	衣摺遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市衣摺三丁目1166 番1の一部	奈良	平成27年2月13日	4m <sup>2</sup>	GL-2.1mまで確認。瓦器・土器が出土。 二次堆積によるものと確認。工事実施。
20	貝花道跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市横小路町二丁目 675番、676番の各一部	奈良	平成27年2月19日	4m <sup>2</sup>	GL-2.5mまで確認。埋蔵文化財出土せず。 工事実施。
21	市尻遺跡第2次調査 (零細事業主による宅地造成)	東大阪市四条町582番、 583番、590番	伸林	平成27年3月10日～ 3月13日	51m <sup>2</sup>	GL-2.2mまで確認。遺物包含層、ビック トを検出。詳細は次年度報告。



東大阪市内の遺跡分布図

## 第2章 若江遺跡第87次発掘調査(遺物編)

### 1)はじめに

本報告は、平成24年度に実施した若江遺跡第87次発掘調査の遺物報告編である。遺跡の概要是本書第3章及び第4章、遺構の概要については、「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成25年度－」(2014年東大阪市教育委員会)を参照されたい。

若江遺跡第87次発掘調査は、個人が施工する共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査面積は90m<sup>2</sup>で、平成24年12月21日から平成25年1月26日にかけて実施した。調査によって、弥生時代後期～近世にかけての遺構及び遺物を検出した。

以下は各遺構の概要である。

#### ①第1面検出遺構

検出した遺構のうち本報告の遺物を伴うものは、溝2条(SD01及びSD08)である。同一遺構面での検出は、後世の削平及び盛土によるものである。SD01は近世以降の溝で、SD08は17世紀代に埋設した溝である。

#### ②第2面検出遺構

第2面は16世紀～17世紀に初めにかけての若江城に伴う遺構面である。検出した遺構は、溝(SD10)及び土坑(SK11)である。SD10は若江城に伴う南北に伸びる堀跡で、埋土より大量の遺物が出土した。SK11は性格不明の土坑である。

#### ③第3面検出遺構

第3面は鎌倉時代の遺構面である。検出された遺構は、溝2条(SD12及びSD16)、落込み(SK13)、井戸(SK14)及びピット(SP15)である。SD12からは12世紀代～13世紀代中頃の瓦器碗が多く出土している。

#### ④第4面検出遺構

第4面は古墳時代～奈良時代にかけての遺構面である。2条の溝及び5つのピットを検出した。第4面からの出土遺物は少なく、遺物は本報告に含まれていない。

#### ⑤第5面検出遺構

第5面は弥生時代後期の遺構面で、水田跡である。弥生時代後期の鉢・甕・高杯等が出土している。以上が遺構の概要である。本報告は、遺物を種別・器種ごとにまとめ、さらに出土遺構ごとに記載している。

### 2)土師器

#### (1) 皿

本調査において最も多く出土した遺物は、土師器皿である。若江遺跡出土の土師器皿の分類は、「若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺物編」(東大阪市文化財協会1983)において行われているものの、当該報告から30年以上が経過し、出土事例も増加していることから、年代については、出土した遺構や他の遺物を参考に記した。

### ① SD01出土

1は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀後半～16世紀初め。

### ② SD08出土

2は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部はやや肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀後半～16世紀初め。

3は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀後半～16世紀初め。4は、底部は平底を呈し、体部は外反する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面は指オサエ調整する。15世紀後半～16世紀初め。

5、6は、底部は平底を呈し、体部は内湾する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。12世紀後半か。6は、底面に糸切り痕が残る。

### ③ SD10出土

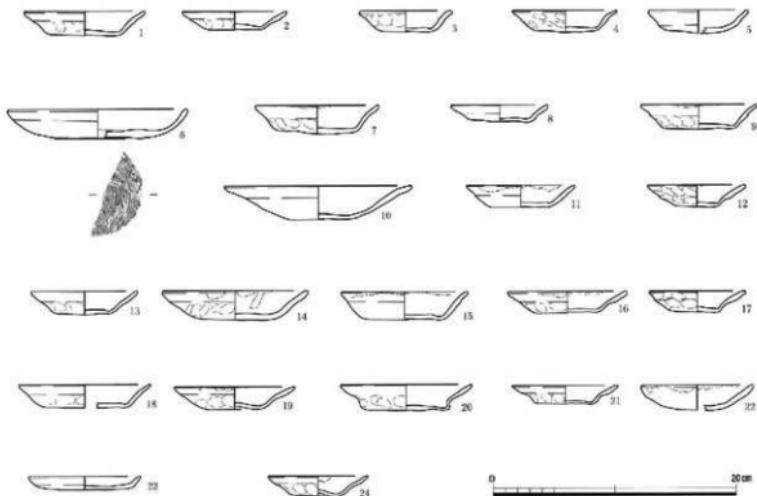
7、8は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。7は15世紀代。8は15世紀後半。

9、10は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はヨコナデ調整する。9は、体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。灯明皿として使用された。15世紀後半～16世紀初め。10は、体部内外面ともにナデ調整する。16世紀中頃～17世紀初め。

11～14は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。11・13・14は、口縁部外面はヨコナデ調整し、12は、口縁部外面は指オサエ調整する。11・12・14は灯明皿として使用された。11は15世紀後半、12は15世紀後半～16世紀初め、13は15世紀後半、14は16世紀代の所産である。15は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。16世紀中頃～後半。16は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。それぞれ灯明皿として使用された。

17・18は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面は指オサエ調整する。それぞれ15世紀後半。

19は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は尖る。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。灯明皿として



第1図 出土遺物実測図（土師器Ⅲ）

使用された。15世紀後半～16世紀初め。

20・21は、底部は平底を呈し、体部は上方に立ち上がる。口縁部は肥厚し外反する。20は、口縁端部は丸く終わり、21は、口縁端部は尖る。それぞれ体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。それぞれ15世紀前半の所産。

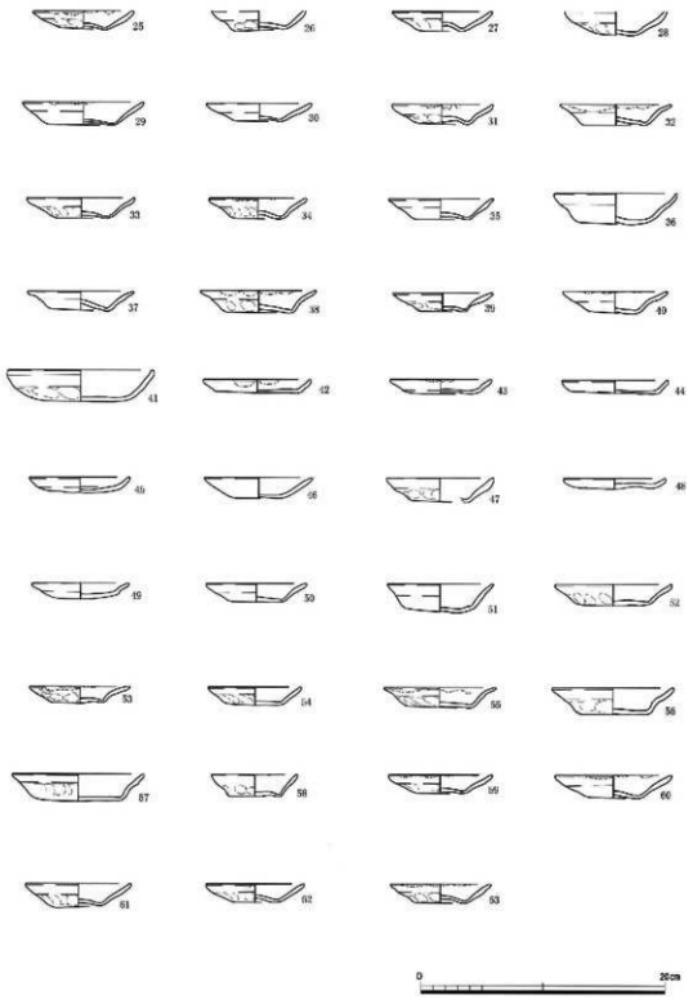
22は、底部は平底を呈し、体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。16世紀後半。23は、底部は平底を呈する。内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は尖る。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。12世紀～13世紀代。

24～27は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。24・25は灯明皿として使用された。すべて15世紀後半～16世紀中頃の所産。

28は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。16世紀前半。

29・30は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。29は灯明皿として使用された。16世紀中頃～後半。

31は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は尖る。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。15世紀前半。32は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用



第2図 出土遺物実測図（土器器皿）

された。16世紀後半。33は、底部は上げ底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。15世紀後半。

34・35は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。

34は、体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。35は、体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面は34・35ともヨコナデ調整する。35は灯明皿として使用された。それぞれ15世紀後半。

36は、底部は上げ底を呈し、体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。37は、底部は上げ底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は尖る。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。16世紀中頃。38は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。16世紀初め。39は、底部は上げ底を呈し、体部は上方に立ち上がる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。40は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は尖る。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。16世紀前半。

#### ④ SD12出土

41は、底部は平底を呈し、体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。13世紀後半。

#### ⑤ SK11出土

42は、底部は平底を呈し、体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。12世紀～13世紀代。

#### ⑥ SK13出土

43～45は、底部は平底を呈し、体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。43は灯明皿として使用された。それぞれ12世紀～13世紀代。

#### ⑦ SPI5出土

46は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は尖る。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。12世紀代か。

#### ⑧ 第2面構成土出土

47は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は肥厚し外上方に伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半～中頃。48は、底部は平底呈する。口縁部は内弯し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。13世紀代。

#### ⑨ 北側先行トレンチ出土

49は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。

体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀後半。50は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。16世紀初め～中頃。

#### ⑩南側先行トレンチ出土

51は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。16世紀後半。52は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。53は、底部は平底を呈し、体部は外反して立ち上がる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部外面は指オサエ調整する。灯明皿として使用された。15世紀前半。54は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。55は、底部は平底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。15世紀代。

56～58は、底部は平底を呈し、体部は上方に立ち上がる。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。15世紀前半。58は灯明皿として使用された。全て15世紀前半。

59・60は、底部は上げ底を呈し、体部は外反して立ち上がる。59は、口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。60は、口縁部はやや肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面ともにナデ調整する。それぞれ口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。15世紀後半～16世紀初め。

61・62は、底部は上げ底を呈し、体部は外上方に伸びる。61は、口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。62は、口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く終わる。それぞれ体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。62は灯明皿として使われた。それでは15世紀前半。

63は、底部は丸底を呈し、体部は外上方に伸びる。口縁部は肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。灯明皿として使用された。15世紀前半。

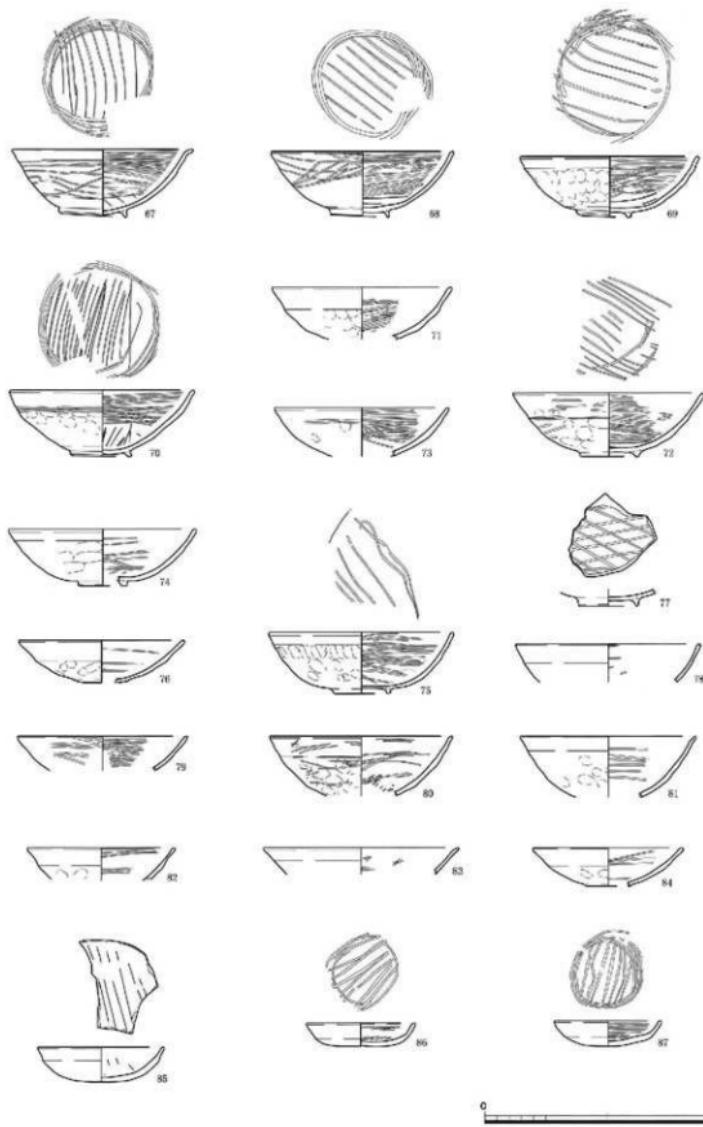
### (2) 羽釜

土器器羽釜3点を図化した。それぞれSD10出土である。

64は鈎が上方に伸び端部を丸く收める。口縁部は内弯し、口縁端部は外側に巻き込む。内外面ともナデ調整する。65・66は鈎が水平に伸び端部を丸く收める。口縁部は内弯し、口縁端部は面を持つ。体部外面から鈎部下面にかけて煤が付着する。体部外面、口縁部内面の調整は不明。口縁部外面はナデ調整する。すべて15世紀～16世紀代。

### 3) 瓦器・瓦質土器

#### (1) 梶



第3図 出土遺物実測図（瓦器椀・皿）

## ① SD12出土

67・68は、底部に断面台形の高台を有し体部は内弯する。外面はユビオサエ後ヘラミガキ調整し、内面はヘラミガキ調整する。67は口縁端部が外反し、丸く終わる。68は口縁部が外上方に立ち上がり、ナデ調整する。口縁端部は丸く終わる。67・68ともに見込みは平行線状の暗文を施す。それぞれ12世紀中葉。

69は底部に断面台形の高台を有し、体部は内弯する。外面は指オサエ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部は外上方に立ち上がり、ナデ調整する。口縁端部は丸く終わる。見込みは平行線状の暗文を施す。12世紀後半～13世紀初め。70は底部に断面台形の高台を有する。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面を指オサエ調整し、内面をヘラミガキ調整する。見込みに平行線状の暗文を施す。12世紀代。71は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はヘラミガキ調整する。12世紀後半～13世紀初め。72は底部に断面台形の高台を有し、体部は内弯気味に立ち上がる。外面は指オサエ後ヘラミガキ調整し、内面はヘラミガキ調整する。口縁部は外上方に立ち上がり、指オサエ後ナデ調整する。口縁端部は丸く終わる。見込みは平行線状の暗文を施す。12世紀後半。73は体部が内弯し、口縁部が外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部外面を指オサエ調整し、内面をヘラミガキ調整する。見込みに平行線状の暗文を施す。12世紀後半～13世紀初め。74は底部に断面三角形の高台を有し、体部は内弯し、外面にユビオサエ調整後、粗なヘラミガキ調整する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。13世紀前半。

## ② その他の遺構又は遺物包含層出土

75は67と形状や調整法は同じであるが、暗文が粗く施される。第3面構成土より出土。それぞれ、12世紀後半～13世紀初め。76は退化した高台を有する。体部は外上方に立ち上がる。外面は指オサエ調整し、内面は粗なヘラミガキ調整する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。見込みに暗文は認められない。第2面構成土より出土。77は底部に断面三角形の高台を有し、見込みに格子状の暗文を施す。第2面構成土より出土。12世紀後半～13世紀初め。

78～80は体部が内弯し、口縁部が外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。80は体部外面を指オサエ調整し、内面をヘラミガキ調整する。78は第2面構成土より出土。79はSK11出土。80は第2面構成土より出土。それぞれ12世紀後半～13世紀初め。

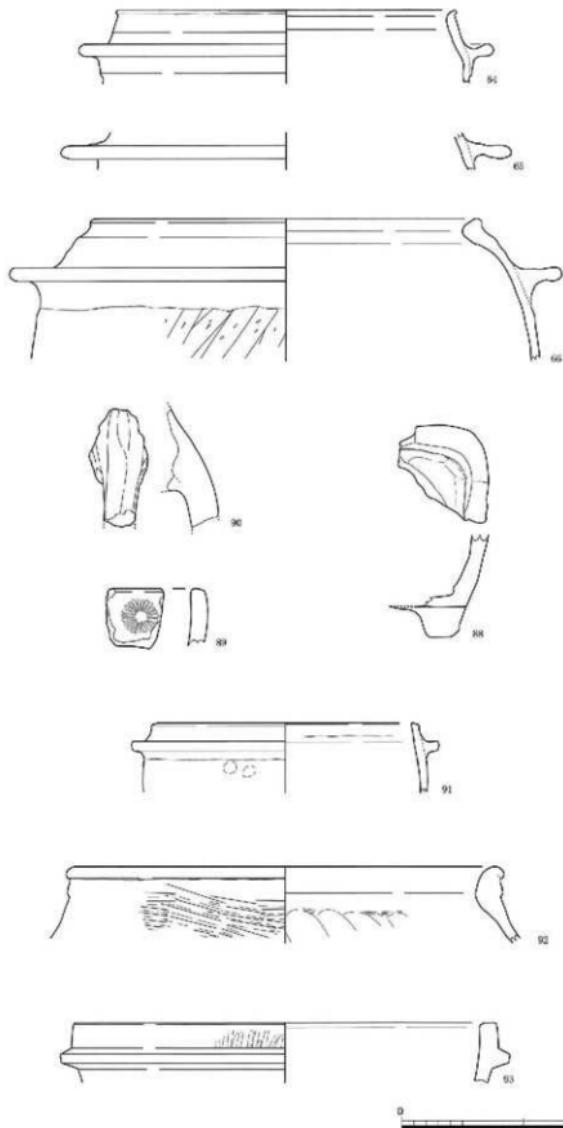
81・82は体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は指オサエ調整し、内面はヘラミガキ調整する。81は第2面構成土より出土。82はSK11出土。それぞれ12世紀後半～13世紀初め。

83・84は底部に退化した高台を有する。83は、口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。84は、体部は内弯し、口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。83は第2面構成土より出土。84はトレンチ南側溝出土。いずれも、13世紀後半。85は平底である。底部から口縁部へは内弯し、口縁端部は丸く終わる。口縁部はナデ調整する。第1面構成土より出土。13世紀末～14世紀初め。

## (2) Ⅲ

瓦器皿が2点同化できた。それぞれSD12より出土した。

86は平底である。底部から口縁部へは外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。87は丸底である。底部から口縁部へは内弯し、口縁端部は丸く終わる。いずれも、内外面はナデ調整し、見込みは



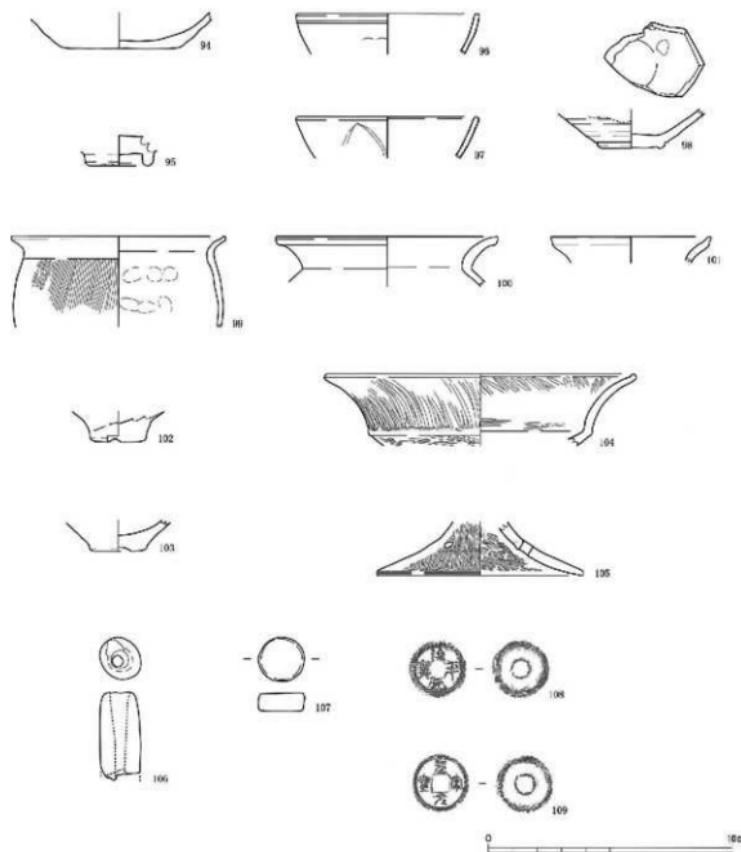
第4図 出土遺物実測図（土師器・瓦質土器・石製品）

平行線状の暗文を施す。それぞれ、12世紀中頃。

### (3) 火鉢

88・89は奈良火鉢である。88は脚部から体部にかけて残存する。平面は方形を呈する。内面は強いナデ調整する。外面は風化のため調整不明。トレンチ南側溝出土。15世紀後半。89は体部外面に花文のスタンプを押捺する。第2面構成土より出土。14世紀半ば～15世紀。

### (4) 足鍋・羽釜・甕



第5図 遺物実測図（須恵器・陶磁器・赤生土器・土製品・錢貨）

瓦質土器足鍋・羽釜・甕はすべてSD10出土である。

90は足鍋の脚部である。接合部分のみ残存する。14世紀代。91は羽釜である。体部は球形を呈する。鉢は水平に伸び、端部は面を持つ。口縁部は内湾し口縁端部は面を持つ。体部外面は指オサエ、内面はナデ調整する。口縁部外面はナデ調整する。時期不明。92は甕である。口縁部は外側に巻き込み、内面はナデ調整する。体部外面は口縁下まで粗いタタキを施す。内面には当て具痕が残る。14世紀終わりか。

#### 4) 石製品

93は石箇である。口縁部下にやや下方に伸びた断面台形の鉢が巡る。SD10出土。13世紀前半。

#### 5) 須恵器

94は鉢である。平底を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面はナデ調整する。第3面構成土より出土。12世紀中葉～13世紀初頭。

#### 6) 陶磁器

95～97は青磁の碗である。98は唐津焼碗である。見込みに胎土目を有する。16世紀末～17世紀初め。すべてSD10より出土した。

#### 7) 弥生土器

99～105は弥生土器である。すべて弥生時代後期の所産である。

99～101は甕である。99は体部外面にハケメ調整する。内面はナデ調整する。口縁部は外反し、口縁端部にやや面を持つ。第2面構成土より出土。100は口縁部が外反し、口縁端部に面を持つ。第2面構成土より出土。101は口縁部が外反し、口縁端部は上方に伸び、丸く終わる。内外面ともナデ調整する。第5面構成土より出土。102・103は底部である。平底を呈する。調整は不明。第3面構成土より出土。104・105は高杯である。104は口縁部が外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面にヘラミガキ調整する。105は脚部である。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。スカシが1ヶ所残存する。それぞれ第3面構成土より出土。

#### 8) 土製品

106は土鍤である。107は瓦質の円盤である。それぞれSD10より出土。時期不明。

#### 9) 銭貨

108は治平元寶（北宋、1064年）、109は聖宋元寶（北宋、1101年）である。それぞれSP15出土。

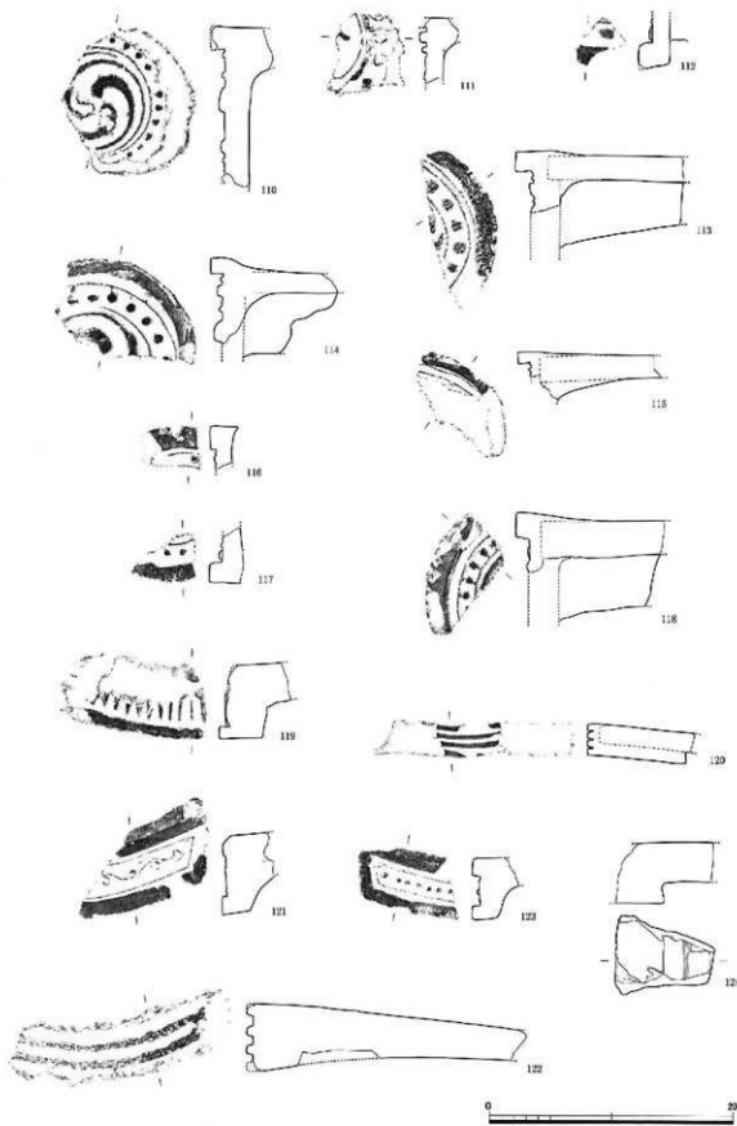
#### 10) 瓦

##### (1) 軒丸瓦

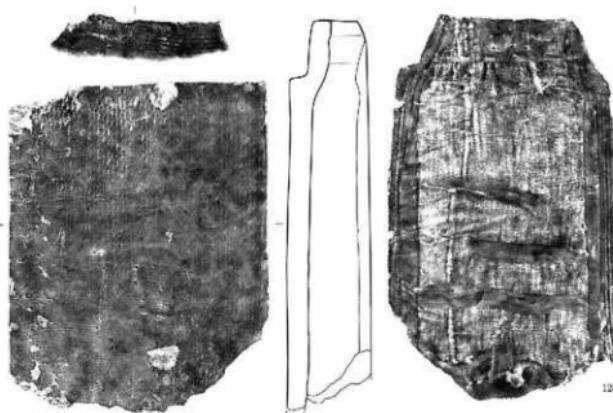
###### ① SD08出土

110は巴文軒丸瓦である。巴文は右回りである。瓦当裏面の調整は不明である。

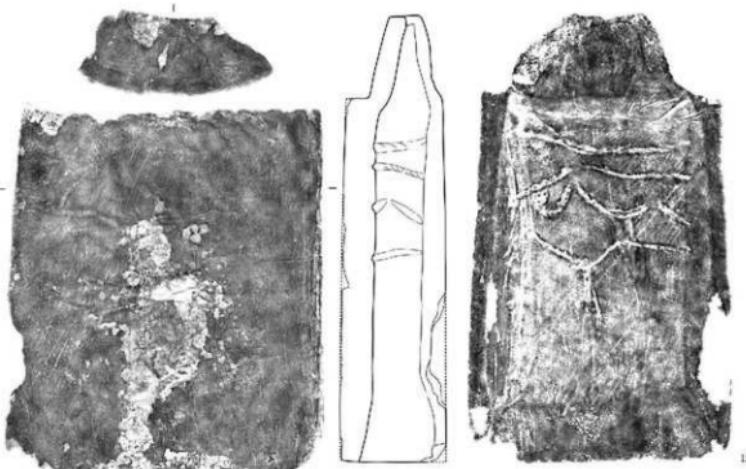
###### ② SD10出土



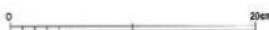
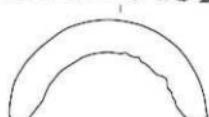
第6図 遺物実測図（軒丸瓦・軒平瓦）



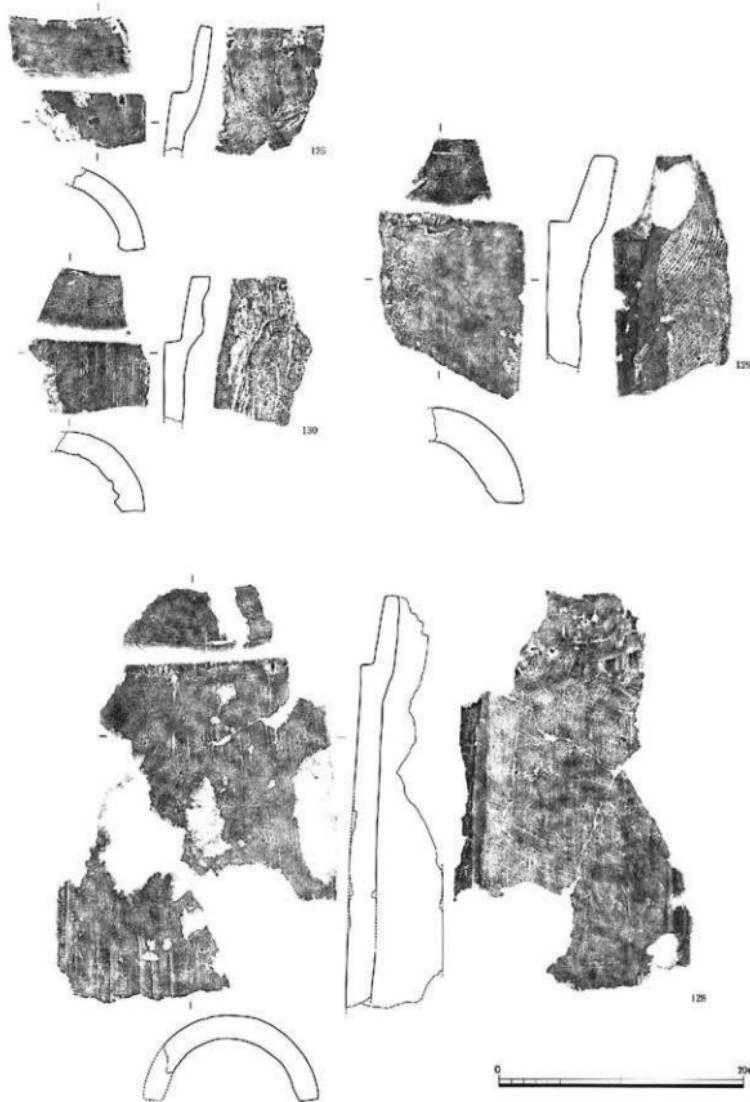
126



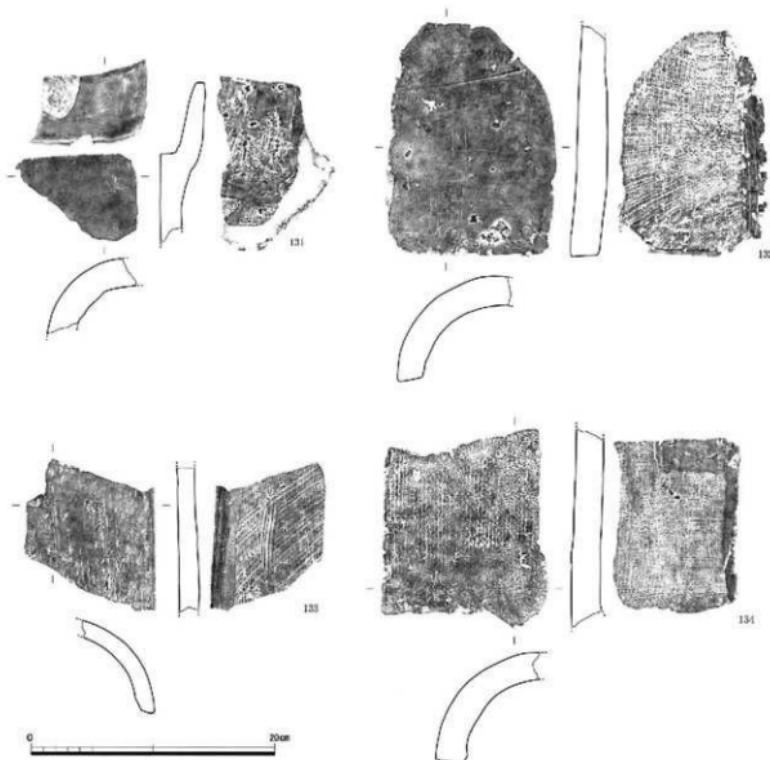
127



第7図 遺物実測図（丸瓦）



第8図 遺物実測図（九瓦）

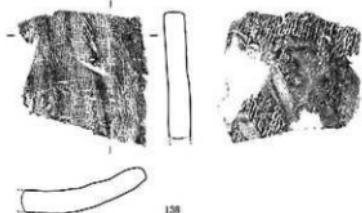


第9図 遺物実測図（丸瓦）

111は巴文軒丸瓦か。瓦当裏面は指ナデ調整する。確認調査トレンチより出土。112は軒丸瓦の小破片である。外縁が突出し、珠文が残る。時期不明。113は巴文軒丸瓦である。外縁が高く突出する。瓦当裏面は指ナデ調整する。凸面をナデ調整する。凹面は布目とコビキ痕が残る。鎌倉時代後期～室町時代。114は巴文軒丸瓦である。巴文は左回りである。外縁が高く突出する。瓦当凹凸面を指ナデ調整する。115は幅の狭い外縁が突出する。凹面凸面ともにナデ調整する。

### ③その他遺物包含層出土

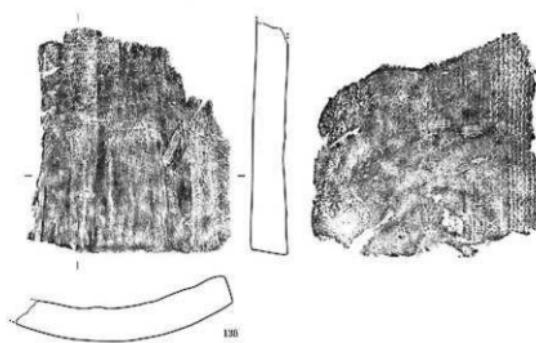
116・117は軒丸瓦の小破片である。外縁が突出し、珠文が残る。116は確認調査トレンチ、117は第一面構成土より出土。すべて時期不明。118は巴文軒丸瓦か。外縁が突出する。凸面はナデ調整し、凹面に布目が残る。第3面構成土より出土。鎌倉時代。



138



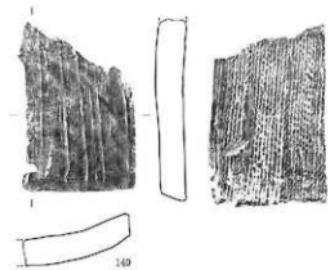
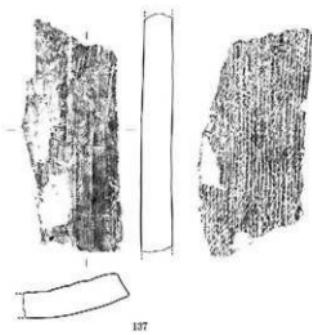
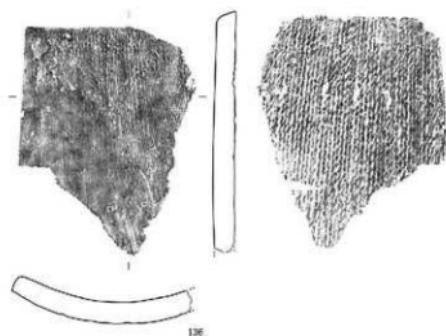
139



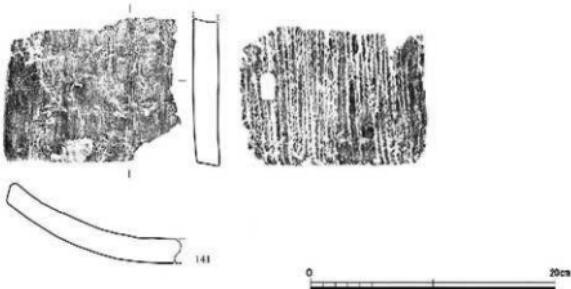
138



第10図 遺物実測図（平瓦）



第11図 遺物実測図（平瓦）



第12図 遺物実測図（平瓦）

### （2）軒平瓦

#### ① SD10出土

119は剣頭文軒平瓦である。額は段額。外縁が突出する。凹面に布目が残る。鎌倉時代。120は重弧文軒平瓦である。額は幅広の段額である。額凸面、額裏面、凸面すべてナデ調整する。白鳳時代。121は均整唐草文軒平瓦である。外縁が突出する。凹面はナデ調整する。室町時代。122は重廓文軒平瓦である。額部は欠損している。額凹面はナデ調整する。凹面は布目が残る。凸面に繩目がわずかに残る。奈良時代。123は連珠文軒平瓦である。外縁が突出する。凹面の調整は不明である。室町時代。

#### ②その他遺物包含層出土

124は瓦当部が欠損している。額は段額である。凹面に布目が残り、凸面はナデ調整し、朱線が残る。重弧文か。第1面構成土より出土。白鳳～奈良時代か。

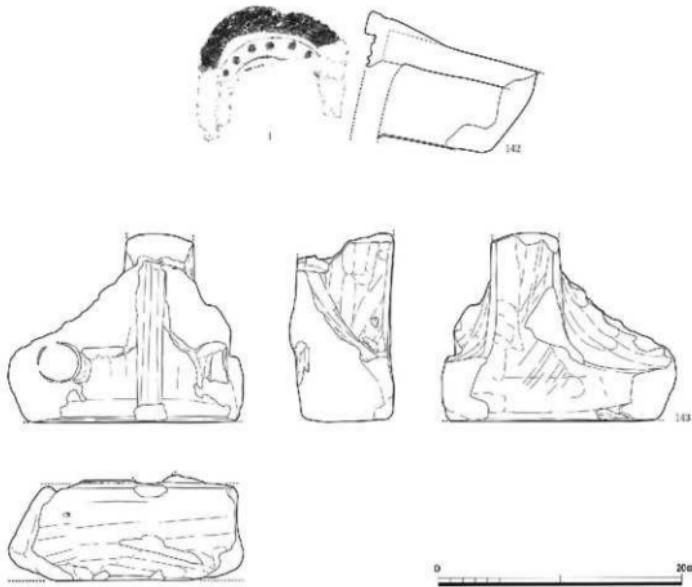
### （3）丸瓦

#### ① SD01出土

125は凹面に布目とコビキ痕が残る。凸面はナデ調整する。SD01出土。平安時代。

#### ② SD10出土

126凹面に布目が残る。板状粘土の継ぎ目を横方向にナデ調整する。凸面はナデ調整する。室町時代。127は凹面に布目とコビキ痕、釣り紐痕が残る。凸面はナデ調整する。室町時代。128は凹面に布目が残り、凸面に繩目が残り、強いナデ調整する。室町時代後期。129は凹面に布目とコビキ痕が残る。凸面はナデ調整する。室町時代。130は凹面に布目が残り、凸面に繩目が残り、正縁部はナデ調整する。室町時代。131は凹面に布目が残り、指ナデ調整する。凸面はナデ調整する。室町時代。132は凹面に布目とコビキ痕が残る。凸面はナデ調整する。鎌倉時代。133は凹面に布目とコビキ痕が残る。凸面に繩目が残る。室町時代。134は凹面に布目が残り、凸面繩目が残る。軒丸瓦の瓦当が欠損したものの。平安時代。



第13図 遺物実測図（鳥食瓦・鬼瓦）

#### (4) 平瓦

##### ① SD10出土

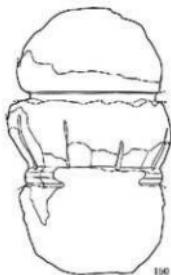
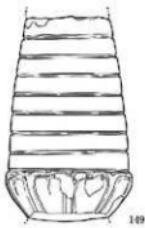
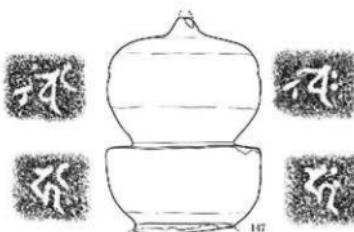
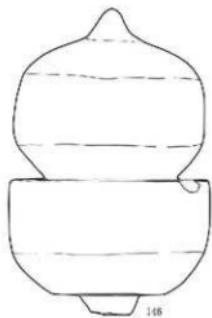
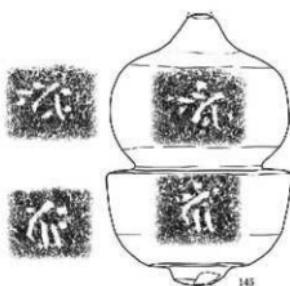
135は凸面に縄目のタタキを施し、粗雑なナデ調整する。凹面は粗雑なナデ調整する。端面はケズリによって面を持つ。奈良時代か。136は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は丁寧なナデ調整する。端面及び側面はケズリによって面を持つ。奈良時代。137は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。側面はケズリによって面を持つ。奈良時代。

##### ②その他遺物包含層出土

138は凸面に縄目のタタキを施し、部分的に不定方向に指ナデ調整する。凹面は布目が残る。端面はケズリによって面を持つ。第2面構成土より出土。奈良時代。139は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。側面はケズリによって面を持つ。第2面構成土より出土。平安時代。140は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。端面及び側面はケズリによって面を持つ。奈良時代。141は凸面に縄目のタタキを施す。凹面は布目が残る。端面はケズリによって面を持つ。奈良時代。南側先行トレンチより出土。

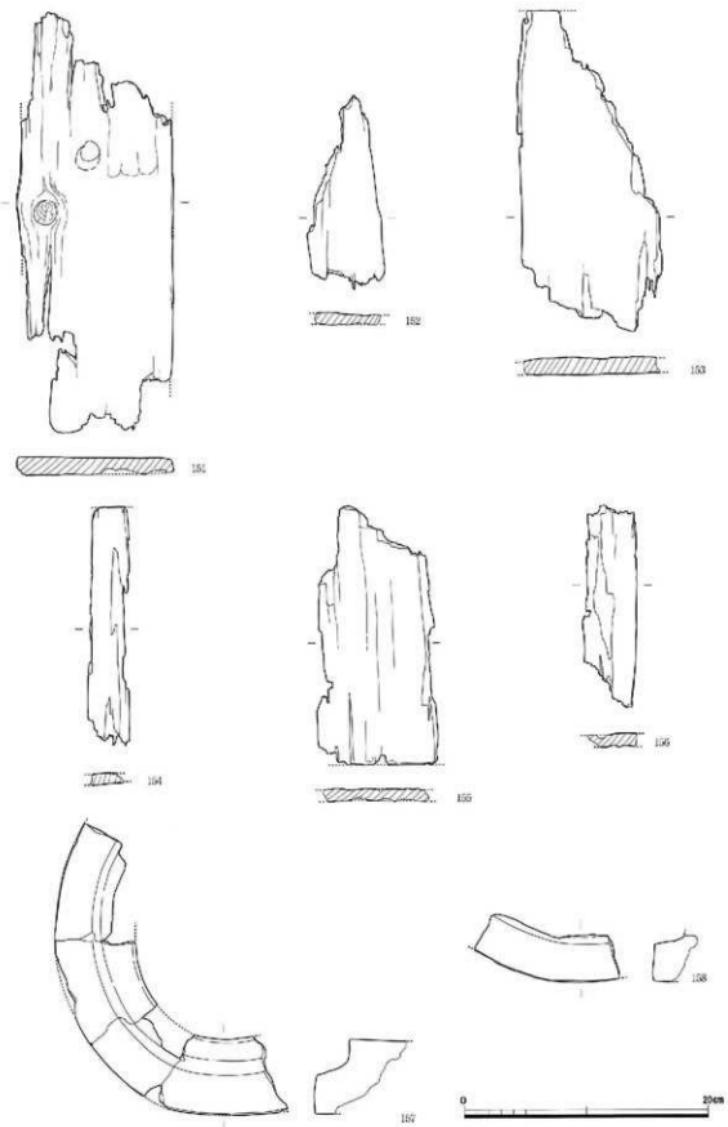
#### (5) 鳥食瓦・鬼瓦

鳥食と鬼瓦が出土した。それぞれSD10からの出土である。



0 20cm

第14図 遺物実測図（五輪塔・宝篋印塔）



第15図 遺物実測図（木製品・不明土製品）

142は鳥食瓦である。瓦当面を欠損しており、連珠文と圓線の一部のみ残存する。室町時代後期。  
143は鬼瓦の破片である。竹管文が1ヶ所残存する。裏面は強いナデが残る。室町時代後期。

11) 五輪塔・宝瓶印塔

144～148は五輪塔である。144～147は風輪と空輪が、148は地輪、水輪、火輪がそれぞれ残存する。145は五大種字が、147に五大種字とみられる梵字がそれぞれ刻まれている。149と150は宝瓶印塔である。149は菊花と九輪が残る。150は伏鉢、諸花、九輪が残る。144・149は確認調査トレンチより出土した。145・146・148はSD08、147はSD10より出土した。

12) 木製品

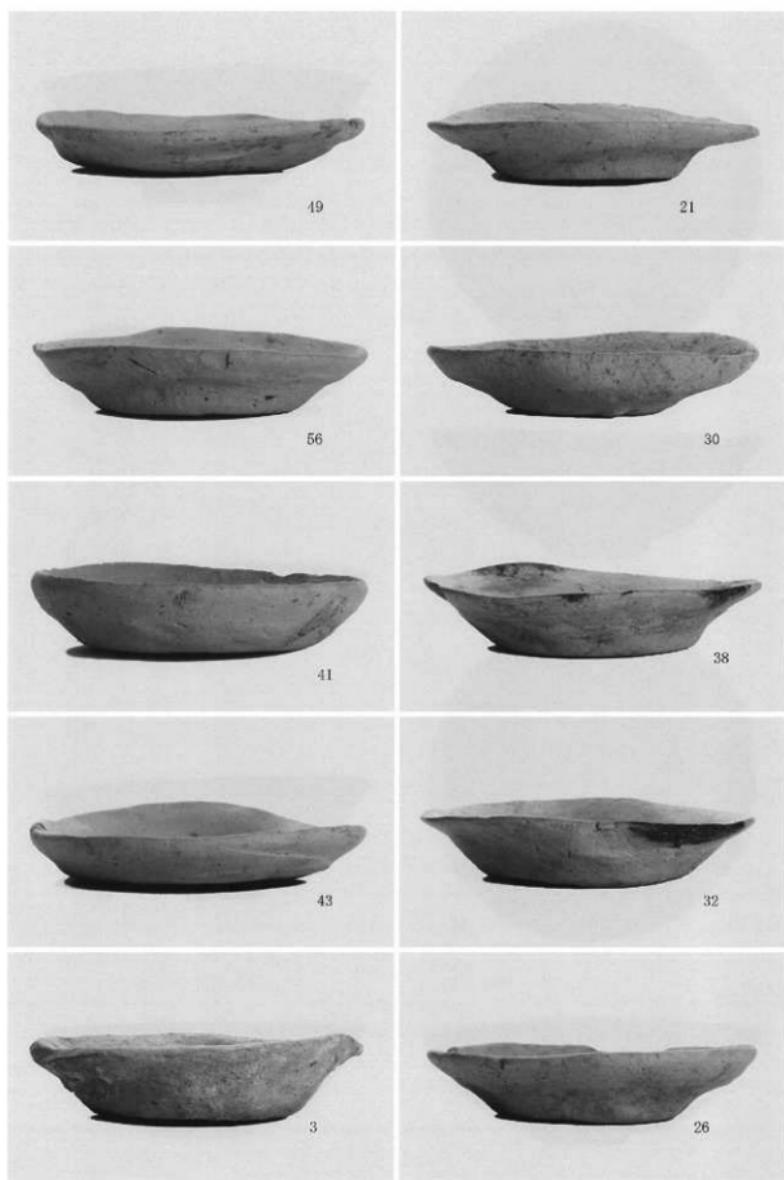
151～156はSP14から出土した檻板である。13世紀代か。

13) その他不明土製品

157・158は用途不明土製品である。SD10より出土した。全体に強い焼成を受けている。

【参考文献】

財団法人 東大阪市文化財協会1983『若江遺跡発掘調査報告書 I 遺物編』

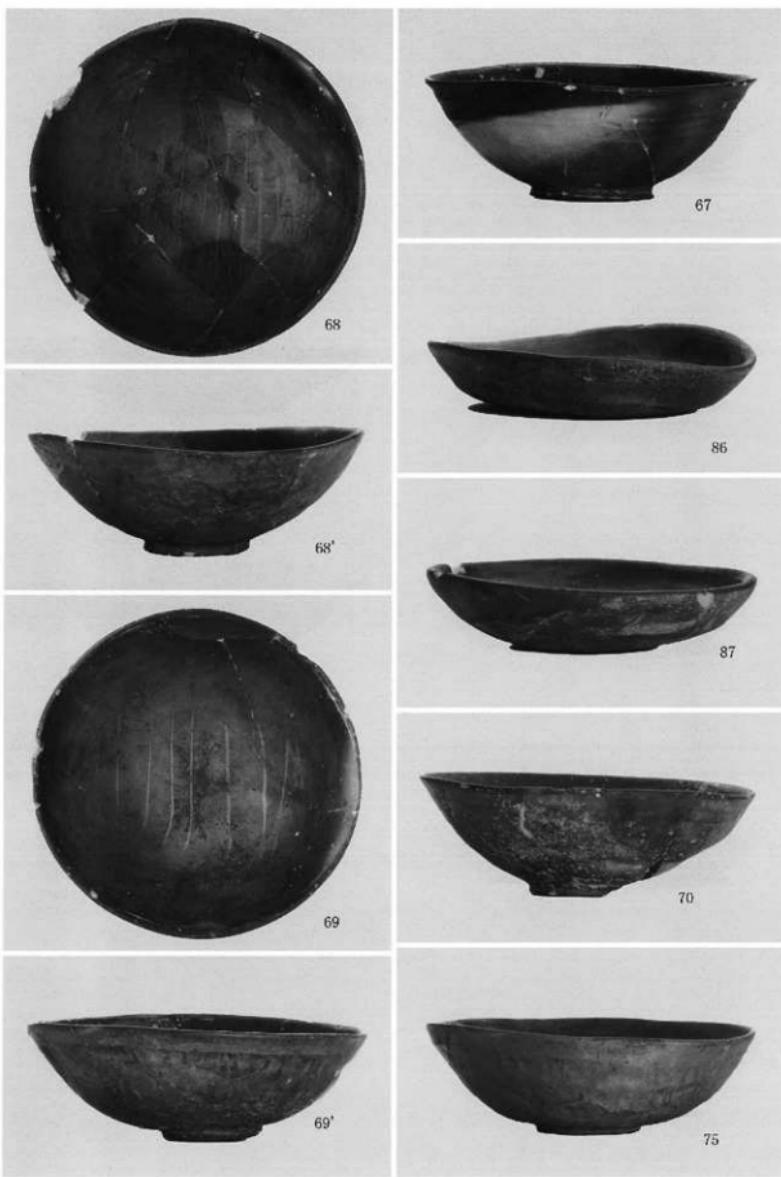


土師器（各層位出土）

図版2

若江遺跡第87次発掘調査

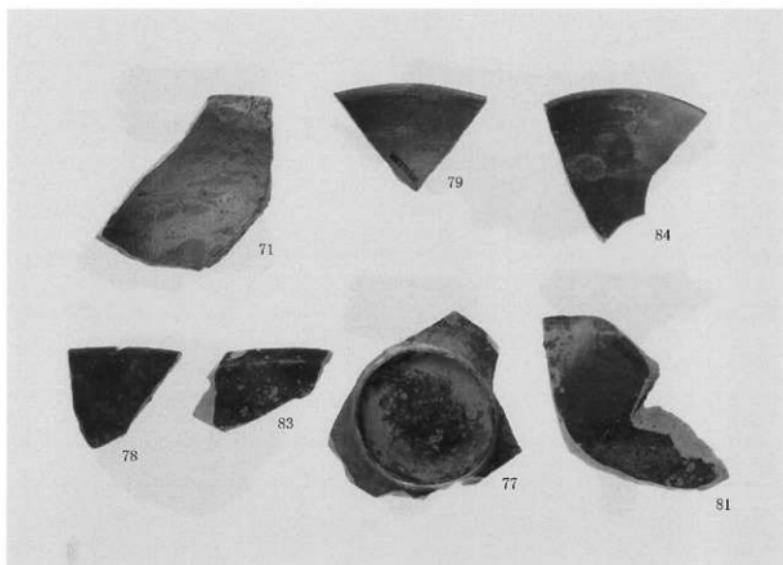
遺物



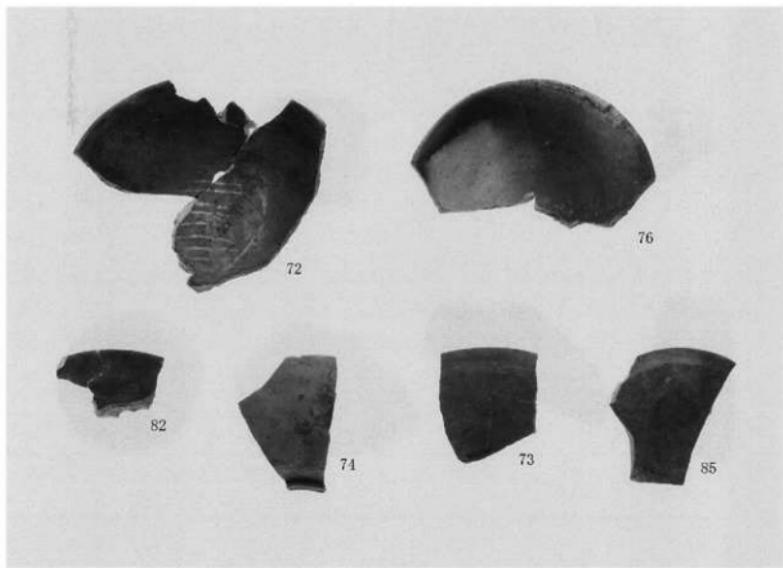
瓦器（各層位出土）

図版3

若江遺跡第87次発掘調査  
遺物



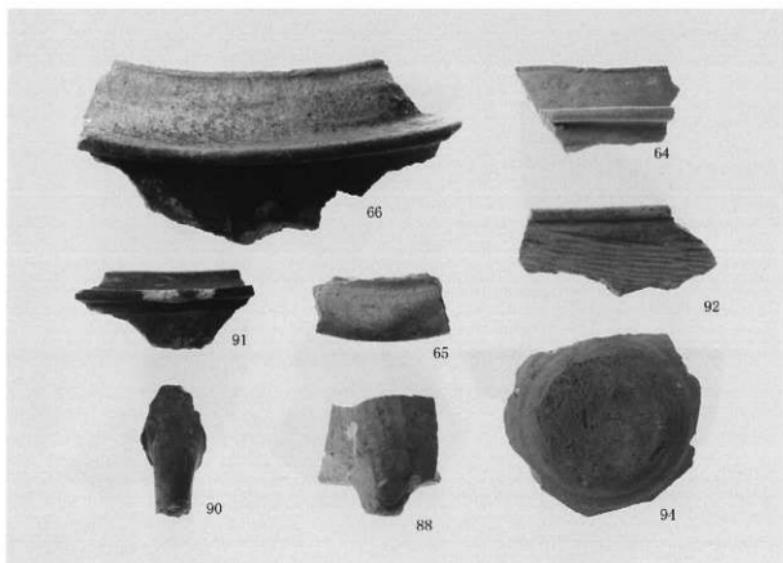
1. 瓦器（各層位出土）



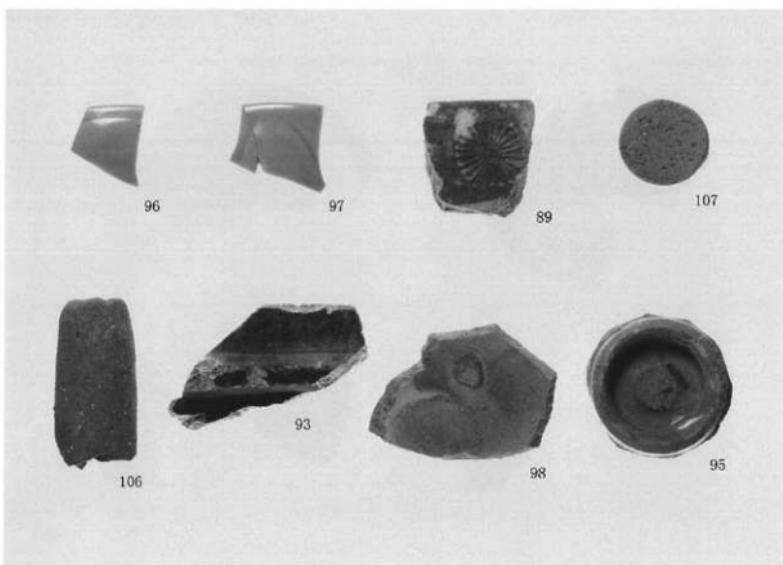
2. 瓦器（各層位出土）

圖版 4

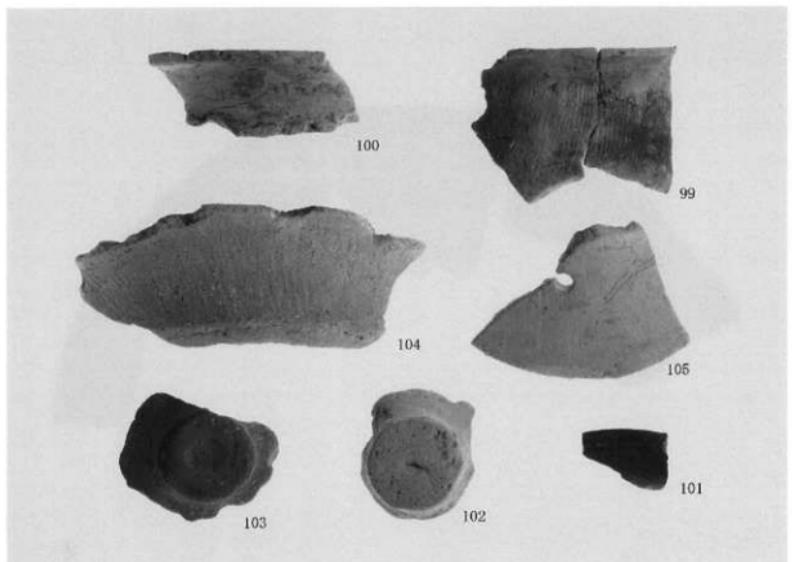
若江遺跡第87次発掘調査  
遺物



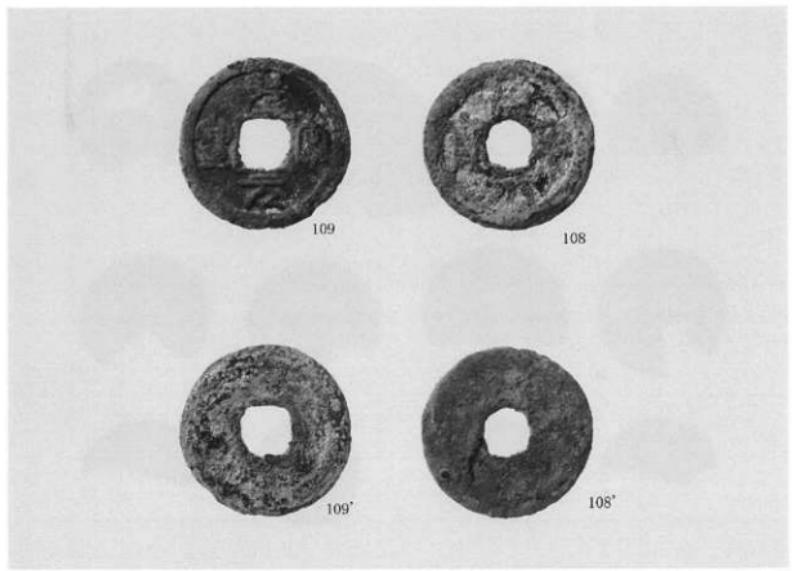
1. 土師器・瓦質土器・須恵器（各層位出土）



2. 陶磁器・土製品（各層位出土）



1. 弥生土器（各層位出土）

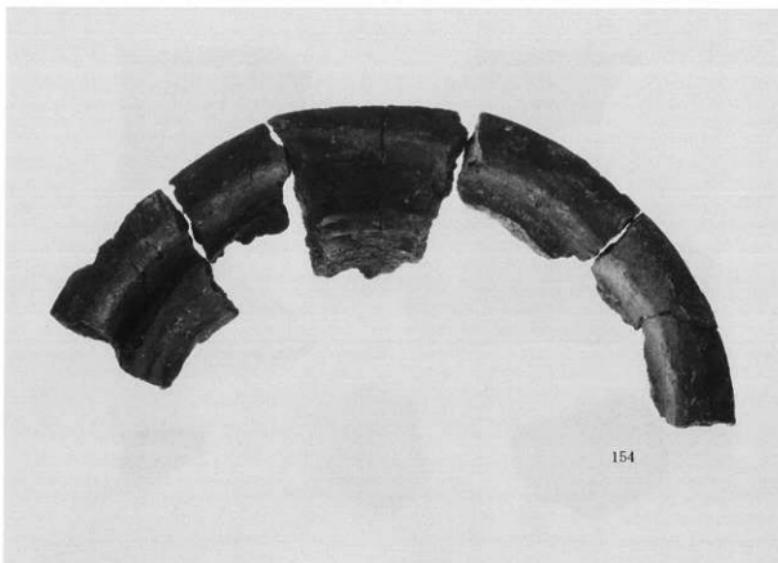


2. 錢貨（SP15 出土）

圖版 6

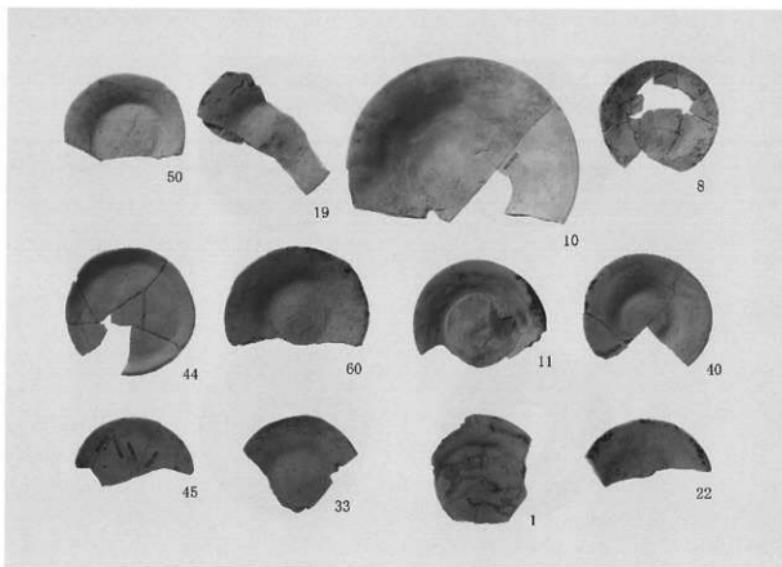
若江遺跡第87次発掘調査

遺物

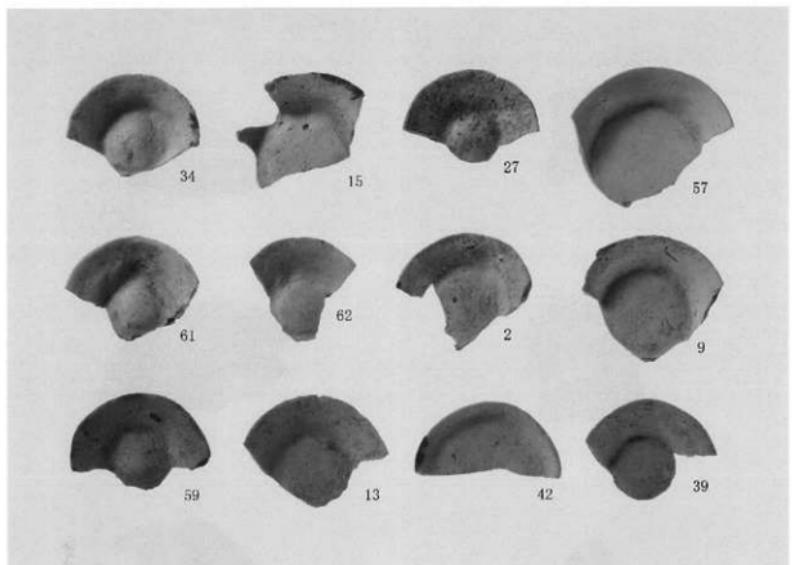


154

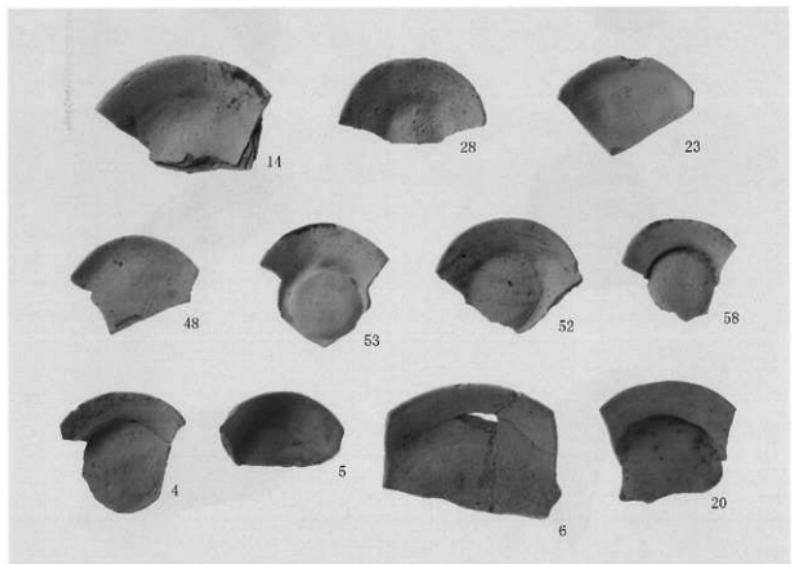
1. 不明土製品 (SD10出土)



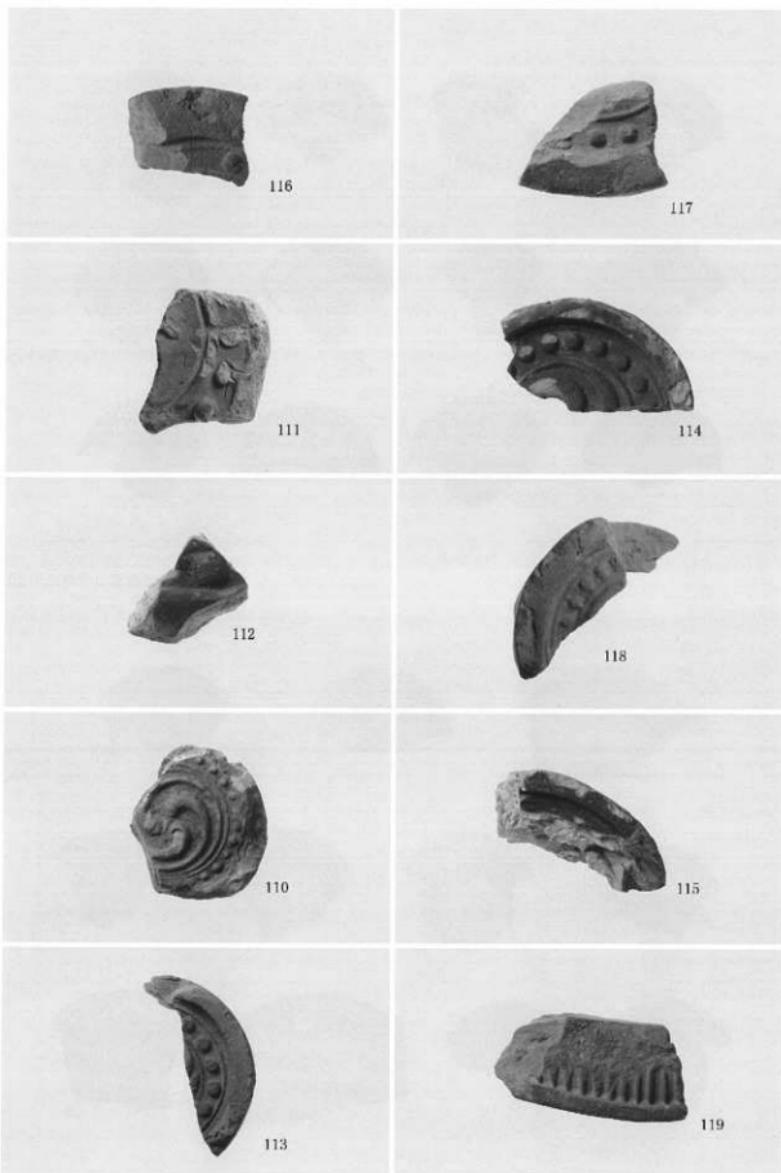
2. 土器 (各層位出土)



1. 土師器（各層位出土）



2. 土師器（各層位出土）



軒丸瓦・軒平瓦（各層位出土）

図版9  
若江遺跡第87次発掘調査

遺物



142



142



143



143



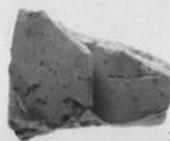
143



120



121



124

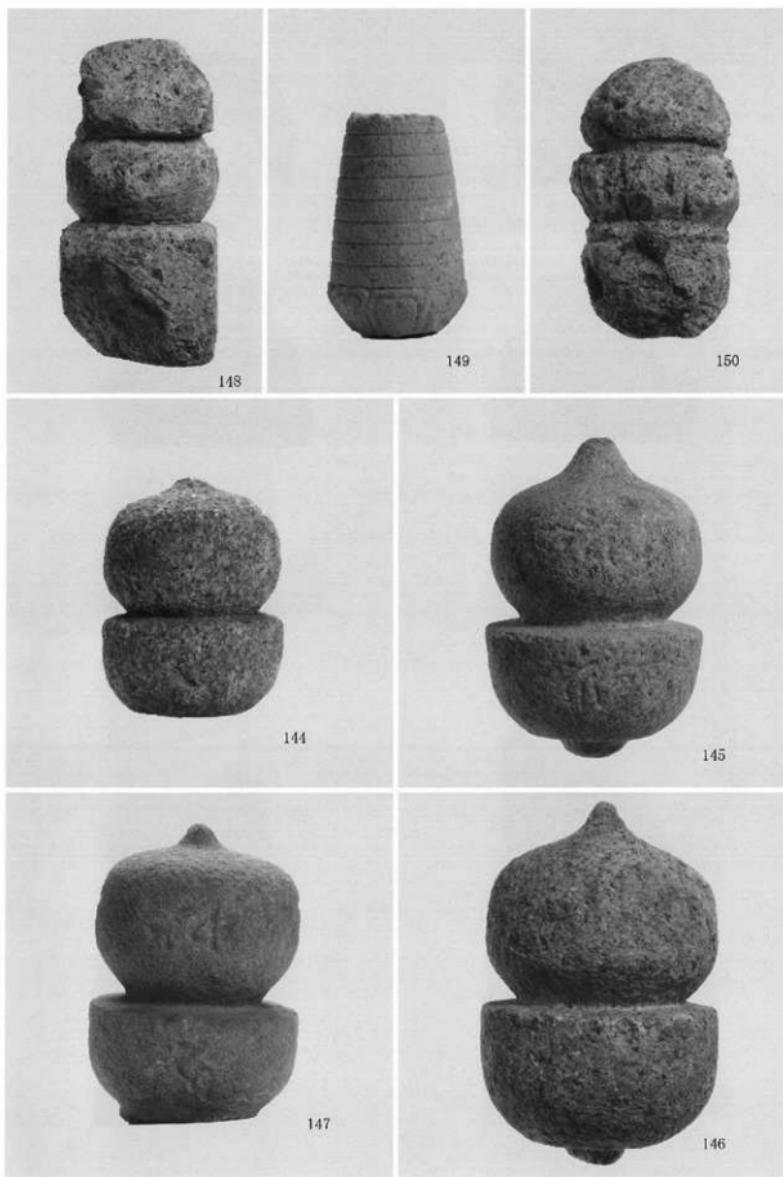


122



123

鳥糞瓦・鬼瓦・軒平瓦（各層位出土）



五輪塔・宝篋印塔(各層位出土)

### 第3章 若江遺跡第89次発掘調査

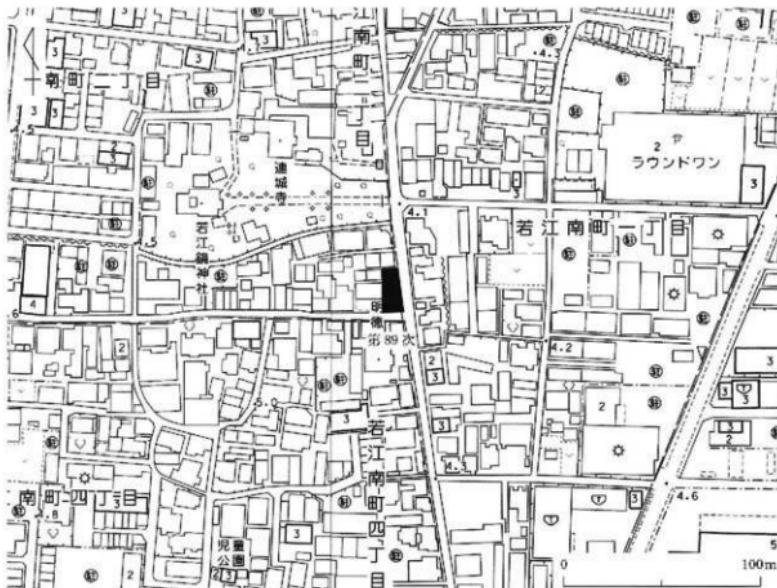
#### 1) はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町及び若江南町にわたる弥生時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡である。昭和9（1934）年に楠根川の改修工事に伴い、弥生土器、須恵器、土師器、瓦などが出土したことから、遺跡の存在が知られるようになった。

既往の発掘調査や文献史料によって、若江遺跡には各時代の集落跡のほか、奈良時代から平安時代の若江郡衙及び若江寺、室町時代から安土桃山時代にかけての若江城の存在が知られている。

#### 2) 調査の経過

平成25年11月、東大阪市若江南町二丁目482番4において、個人施工による共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第1図）。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成25年11月25日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-0.7mから-1.5mの間で中世の瓦器、土師器及び瓦が出土し、溝を検出した。この結果に基づき協議代理者と取り扱いについて協議を行い、平成25年12月5日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で43.5m<sup>2</sup>である。（第2図）



第1図 調査位置図

### 3) 調査の概要

#### 層序

機械掘削により近・現代層を除去したのち、それ以下を人力掘削により掘り下げる基盤層にいたった。近世以降になると細かな層の単位が認められたがこれは生活面を安定させるための整地行為による結果である。そこで、南壁の構造切り込み面を単位として面的な調査を行つた。

#### 第1面

近・現代の層を除去した面である。近・現代層にはビンや煉瓦が含まれていた。出土した遺物から第1面は、18世紀後半～19世紀前半。

#### 第2面

第12層を基盤とした面である。焼土や炭などを含む土も所々に見られた。細かな土の単位が認められ整地された層である。17世紀代。

#### 第3面

第13層を基盤とした面である。16世紀中～後半。

#### 第4面

砂層を基盤とした上層に泥が堆積し、この泥を耕作した面である。16世紀前半。

#### 第5面

第15層上面である。12世紀～15世紀。

#### 遺構

上記のように調査を進めたが、遺構検出に際して012溝と016土坑が適切に捉えておらず、それぞれ1つ下の面で検出している。具体的な様相については後述のまとめ述べるので、ここでは検出した順で記述する。

#### 第1面

##### 001土坑

下部に木質が残っており、曲物があったと考えられる。残存状況はかなり悪い。性格については不明である。すぐ西側に礎石が残されている。他に礎石がないことから隅の部分であろう。機能した時期は、いずれも18世紀後半～19世紀前半である。

##### 002土坑

長径で1.4mを測る。深さは10cm程度であり、遺物も出土していないことから、単なる窪みまたは整地の単位であろう。

##### 003土坑

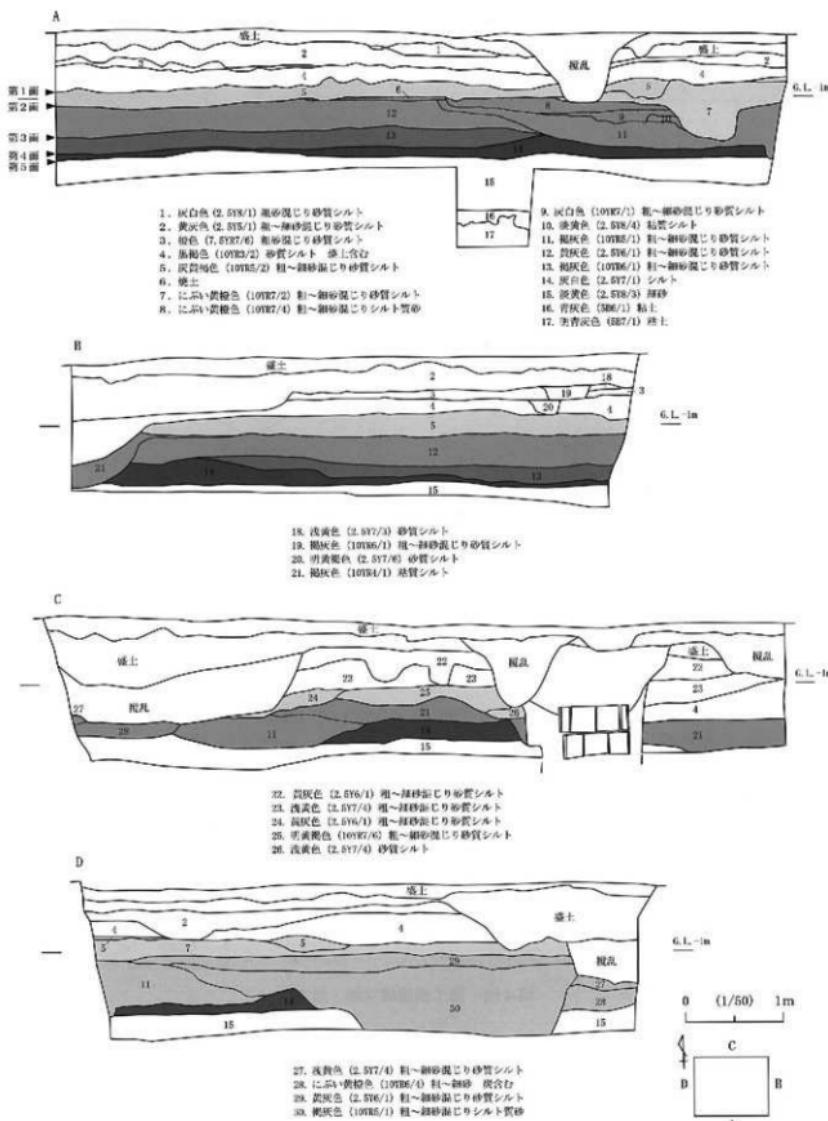
2段の掘方を持ち、長径で1.4mを測る。井戸の可能性があるが底に泥などの水の存在を示す層が認められない。性格は不明である。

##### 004ピット

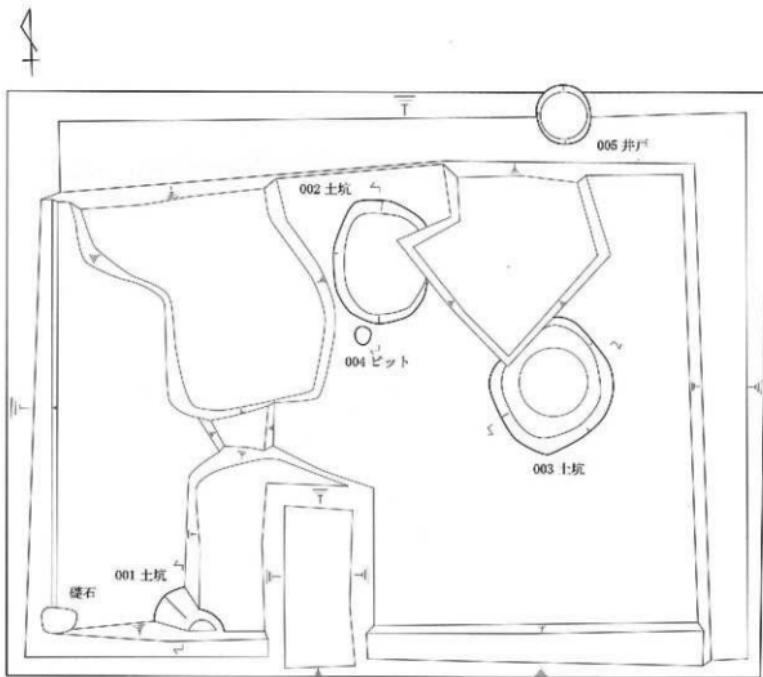
深さ0.2mを測る。単独で存在しており、性格は不明である。



第2図 調査トレンチ位置図



第3図 調査区断面



1. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質シルト
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質シルト

002



1. 黄灰色 (2.5Y6/1)  
粗～細砂混じり粘質シルト

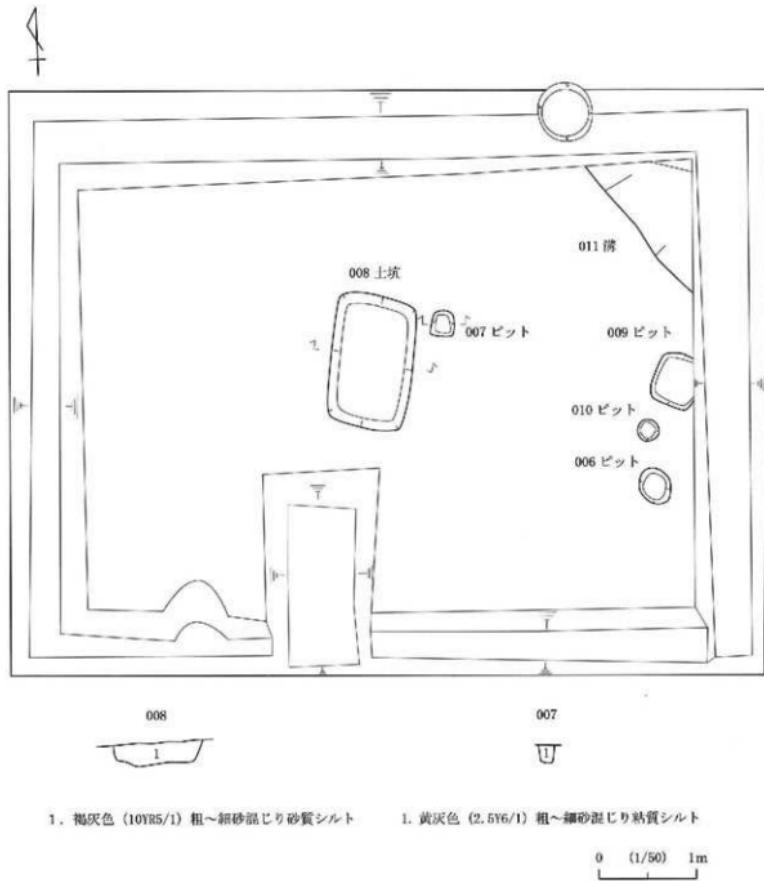
003



1. 黄灰色 (2.5Y6/1)  
粗～細砂混じり粘質シルト

0 (1/50) 1m

第4図 第1面造構平面・断面



第5図 第2面造構平面・断面

#### 005井戸

瓦を枠にした井戸である。井戸枠瓦8枚で円を形成する。掘削深度が深くなる可能性があることから底まで掘削していない。近・現代層を切り込むことから近代の所産と考えられる。

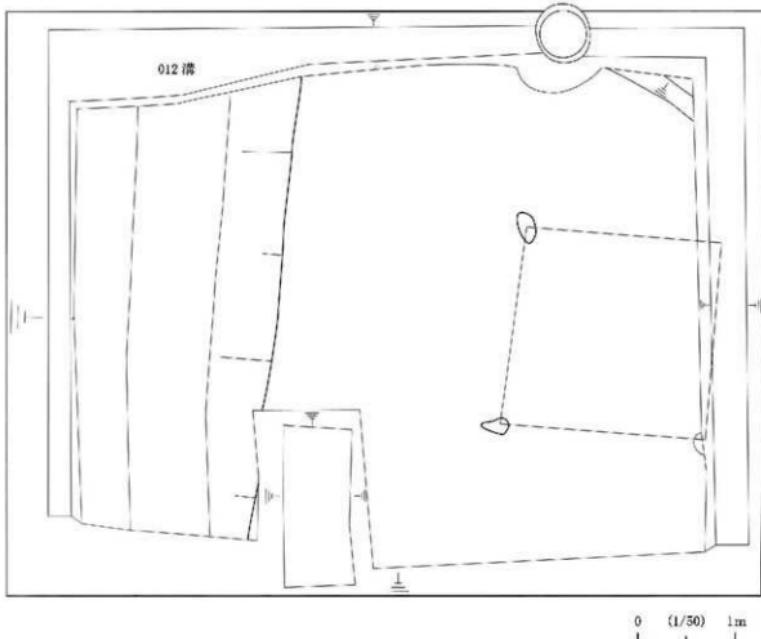
#### 第2面

##### 006・007・009・010ピット

深度は非常に浅く、単なる窪みまたは、整地の単位と考えられる。ただ、いずれも炭がたまる。

#### 008土坑

平面形態は長方形を呈する土坑である。埋土からは焼土と平瓦が出上した。焼土には藻が混ざっており、焼土は屋根または壁の一部と考えられる。このことからいわゆる片付け土坑といった性格のも



第6図 第3面平面

のであろう。

#### 011溝

調査区の北東部にあたり全形を検出できていない。005井戸に切られており、東壁から南壁にかけて埋土が続いていることから溝の可能性が高い。埋土からは土師器の小破片しか出土しておらず時期を特定できるものはない。

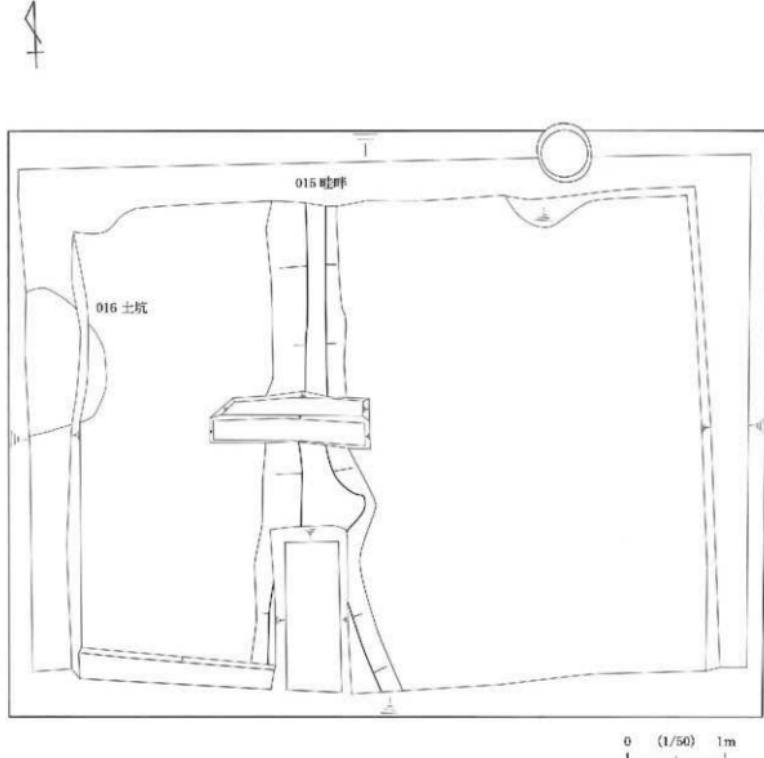
#### 第3面

#### 012溝

南北の溝である。底には粘土が堆積しており水があったと考えられる。ある程度埋没した後に整地が行われ、機能を停止している。出土遺物は少なく白磁碗が出土した。検出面から16世紀前半には埋没したと考えられる。

#### 礎石建物

2つの礎石を検出した。側溝掘削時に調査区の際に礎石があったが落石してしまい、位置を留める



第7図 第4面遺構縦面

のみとなってしまった。また、側溝掘削中にも礎石と考えられる石が出土しており、4本柱建物であったと考えられる。

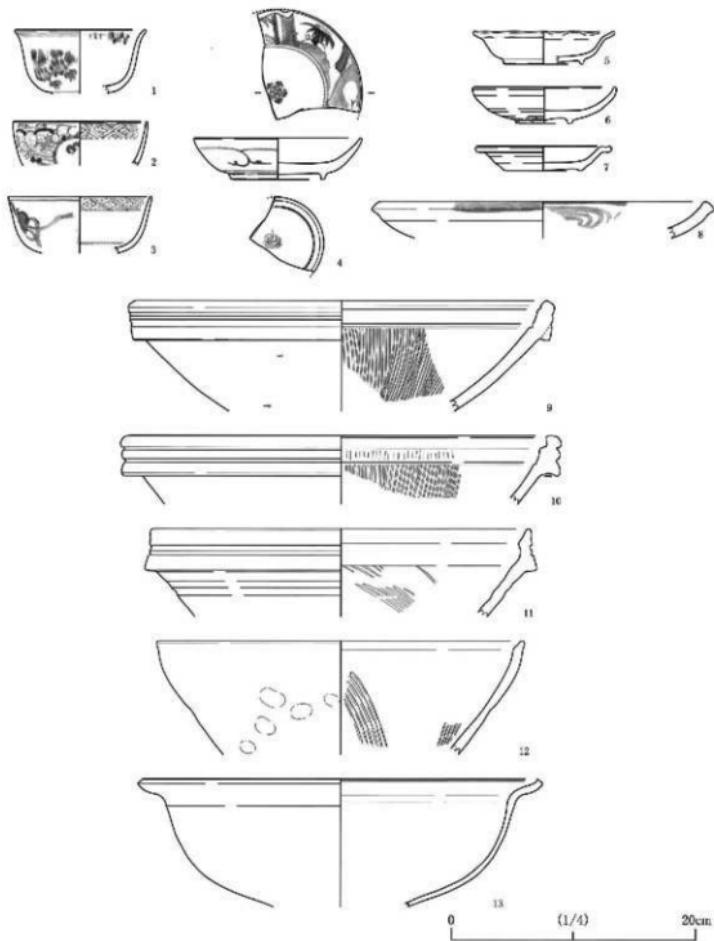
#### 第4面

##### 015 础畔

周囲の泥を盛り上げて畦畔を形成している。他にもあったと考えられるが残りがよくない。

##### 016 土坑

西壁断面で確認した遺構である。本来は、第2面で検出すべき遺構であった。検出面で径約1.5mを測る。埋土は、偽縛を含むもので埋め戻したものであることがわかる。規模が大きくゴミ穴の可能性があるが、大量の遺物は確認できなかった。

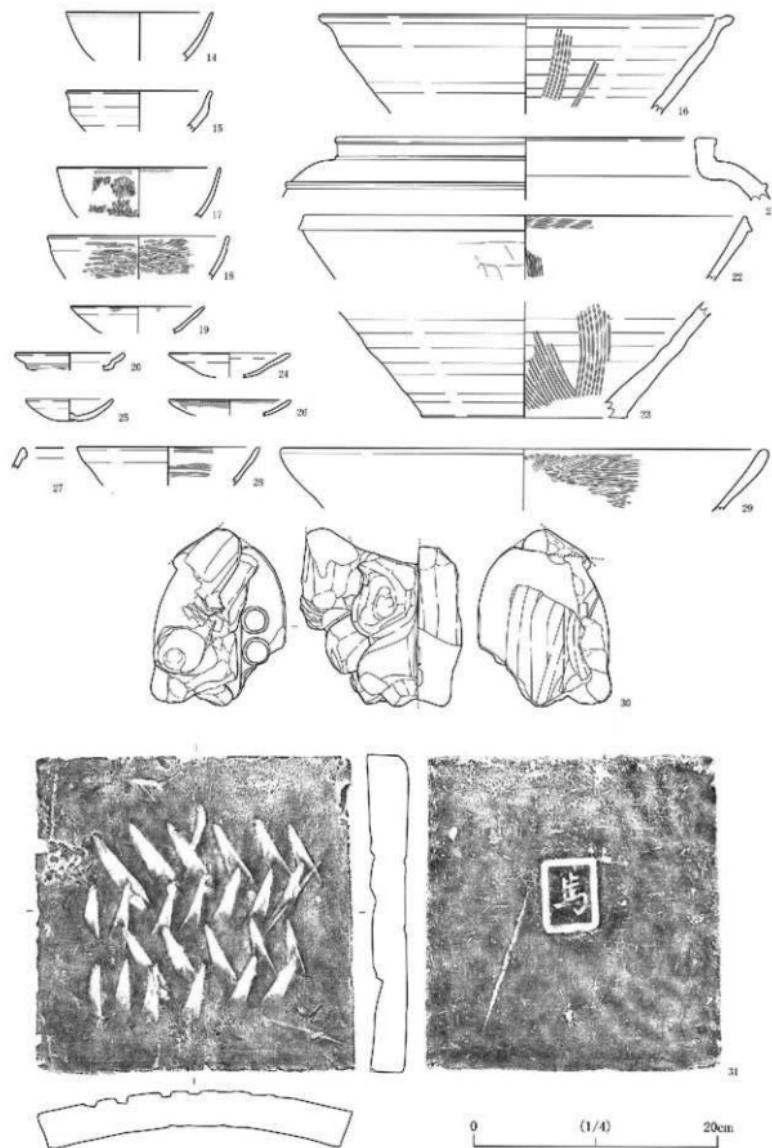


第8図 第3・4層出土遺物実測図

#### 4) 出土遺物

第3・4層

1～3は、肥前磁器染付碗である。1は端反碗で19世紀前半であろう。2は口縁部内面に四方襷文を巡らせており、18世紀半ばから後半であろう。3は外面に單配の文様を施す。18世紀後半。4は肥前磁器染付皿である。内面に竹、見込にコンニャク印判、高台に溝福を配する。5は、肥前白磁端反輪花皿である。6は肥前陶器丸皿、7は灰釉陶器折線皿、8は鉄絵馬の目皿である。7・8は瀬戸・美濃であろう。6・7は16世紀後半、8は18世紀代である。9～12は插鉢である。9・10は明石・堺、



第9図 第5・12・13・15層・012溝出土遺物実測



第10図 第3・12層出土遺物実測

18世紀後半。11は備前、16世紀後半。12は瓦質土器である。16世紀代。13は土製鍋である。32は、火打ち石である。緑色チャートであることから、徳島県阿南市のものと推定される。

#### 第5層

14は肥前磁器碗である。17世紀半ば。15は天目茶碗である。全面に鉄釉がのこる。16は瀬戸・美濃の擂鉢である。いずれも16世紀後半である。

#### 第12層

17是中国製染付碗である。16世紀末～17世紀初め。33は銭貨「紹聖元宝」。初鑄は1094年である。

#### 第13層

18は瓦器椀である。内外面ともに密にミガキが施されている。12世紀。19は土師器皿である。スヌが付着しており灯明皿として使用されていた。

#### 第14層

20は土師器皿である。21は瓦質風炉である。口唇部、頸部、肩部に突帯がめぐる。22は瓦質擂鉢である。端部を下方へと肥厚させ面を持たせる。口縁端部内面にはハケメが残る。外面は粗いケズリ調整である。23は備前擂鉢である。

#### 第15層

24～26は土師器皿である。25は、底部中央に突出を持ついわゆる「へそ皿」である。いずれも15世紀代と考えられる。

#### 012溝

27是中国製白磁碗である。口縁端部を折り返し、玉縁状を呈する。12世紀代。28は瓦器椀である。12世紀後半であろう。29は瓦質鉢である。内面に密にミガキが残る。

30は鬼瓦の一部である。江戸時代の所産であろうか。

#### 005井戸

31は井戸の枠瓦である。内面に「篤」の刻印を持つ。

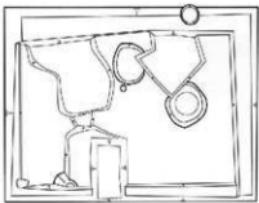
### 5) まとめ

今回の調査地は、若江遺跡でも南側に位置するもので、あまり様相は判明していなかった。南に隣接する道路が十三街道と考えられており、敷地内にも享和三（1803）年の道標が設置されている。北側には若江鏡神社が鎮座しており、街道の交差点にあたる場所で、一定の成果を得ることができたのは今後の若江遺跡を考えるうえで重要である。

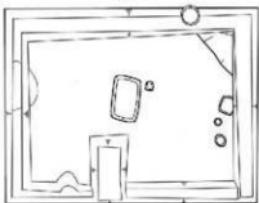
上述したように各面における同一時期の遺構を改めて抽出した。

#### 第1面

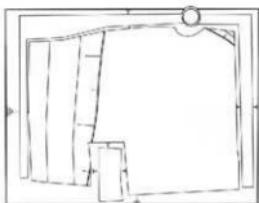
001土坑近くにある礎石が属する。



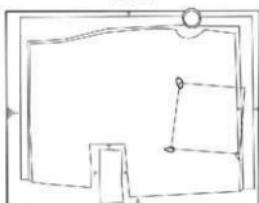
第1面



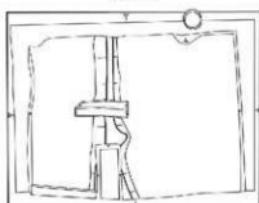
第2面



第3面



第4面



第5面

## 第2面

008土坑と016上坑が所属する。いずれも整地した土の上から切り込まれていた。

## 第3面

南北の012溝と調査区北東端に位置する011溝が掘削される。012溝は畠山期の若江城に関する遺構と考えられる。

## 第4面

16世紀前半に一度整地したのち、礎石建物を建築している。一部を検出したのみで規模などは不明であるが、方位は正位を示している。

## 第5面

12世紀から15世紀にかけて一帯は耕作地であったと考えられる。この地が開発されるようになったのは、16世紀前半であろう。

## 【参考文献】

上田 秀夫1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究』1 関西近世考古学研究会

北野 隆亮2000「畿内とその周辺地域における火打石の流通」『和歌山地城史研究』三八号

九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』

瀬戸市1993『瀬戸市史陶磁器篇四』

中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

水井 久美男編1994『中世の出土銭-出土銭の調査と分類-』兵庫埋蔵銭調査会

第11図 遺構変遷



1. 第1面  
全景  
(北東より)



2. 第1面  
001 土坑断面  
(東より)



3. 第1面  
002 土坑断面  
(東より)

図版2 若江遺跡第89次発掘調査  
遺構

1. 第1面  
003 井戸断面  
(北西より)



2. 第1面  
礎石  
(北東より)



3. 第2面  
全景  
(北東より)



図版3

若江遺跡第89次発掘調査  
遺構



1. 第2面  
008 土坑  
(東より)



2. 第2面  
008 土坑焼土出土状況  
(南東より)



3. 第3面  
全景  
(北東より)

図版4 若江遺跡第89次発掘調査 遺構

1. 第3面  
012溝  
(北より)



2. 第3面  
礎石  
(北東より)



3. 第4面  
全景  
(北東より)



図版5  
若江遺跡第89次発掘調査  
遺構



1. 第4面  
015 眮畔  
(南より)



2. 第5面  
全景  
(東より)



3. 南壁断面  
(北より)

## 第4章 若江遺跡第90・91次発掘調査

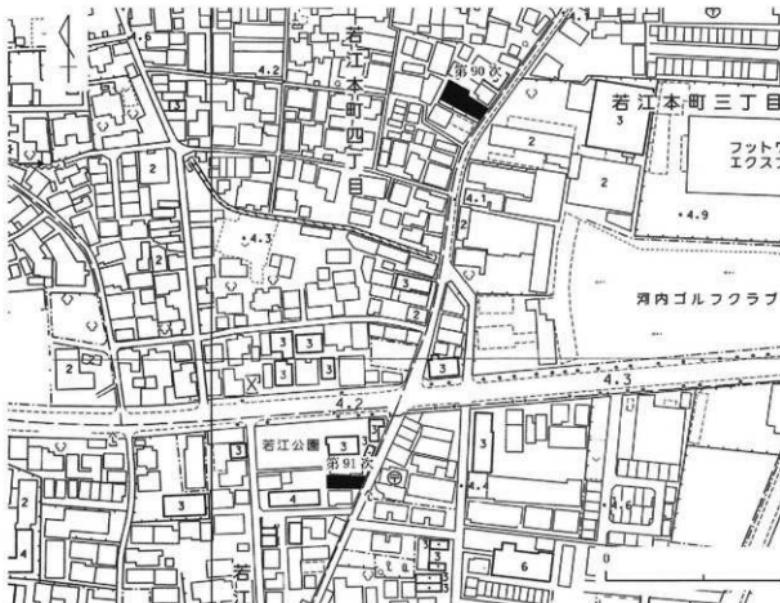
### 1) はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町及び若江南町にわたる弥生時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡である。昭和9（1934）年に楠根川の改修工事に伴い、弥生土器、須恵器、上部器、瓦などが出土したことから、遺跡の存在が知られるようになった。昭和47（1972）年、東大阪市立若江小学校校舎増築に伴う第1次発掘調査が実施されて以降、今回の調査を含めて、88次の調査が行なわれてきた。遺跡は、東西約750m、南北約1,000mの範囲と推定され、現在の玉串川、楠根川やその旧河川の微高地上又は自然堤防上に位置していたと考えられている。

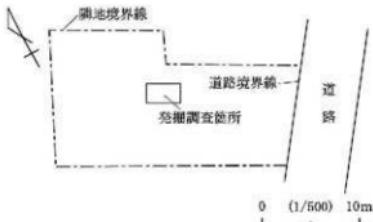
既往の発掘調査や文献史料によって、若江遺跡には各時代の集落跡のほか、奈良時代から平安時代の若江郡衙及び若江寺、室町時代から安土桃山時代にかけての若江城の存在が知られている。

若江寺は、飛鳥時代後期に創建され、室町時代まで存続したと考えられている古代寺院である。ただし、これまでの調査で寺域や建物に伴う遺構は確認されていない。

若江城は、室町時代初期に河内国守護、畠山基国によって築かれ、守護所とされていた時期（第1期）、安土桃山時代に三好義継によって築かれた城であった時期（第2期）、そして、その義継を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの拠点としていた時期（第3期）に区分されている。第1期及び第2期の城館に関する遺構は、堀や井戸が見つかっているだけである。第3期の城は、現在の若江幼稚園を中心に東西約180m、南北約190mの主郭をもち、周間に逆茂木の打たれた幅約15mから30m、深さ3.5m



第1図 調査位置図



第2図 調査トレンチ位置図

前後の内堀に囲まれていたことが、既往の発掘調査で判明している。いずれにしても、若江城は、織田信長が石山本願寺との和睦が成立した後に廃城となったようである。

### 2) 第90次調査にいたる経過

平成26年11月、東大阪市若江本町四丁目において、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響

が懸念された。このため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。協議代理者との協議の結果、今回の調査地は、付近の既往の調査状況より、若江城に関連する遺構が存在する可能性が非常に高かったため、平成25年12月6日より調査地内に発掘調査トレンチを設定し、発掘調査を実施した。

#### 3) 第90次調査の概要

調査は平成25年12月9日までの2日間実施した。調査面積は6.8m<sup>2</sup>である。

調査はまず、重機を使用して盛土及び旧耕作土を除去し、その下層にある遺物包含層を人力で掘削した。調査トレンチの位置は第2図のとおりである。

##### (1) トレンチ東壁の堆積状況

調査トレンチ東壁で確認した堆積状況及び層位は以下のとおりである。

第0層 盛土。

第1層 旧耕土。オリーブ黒色(7.5Y3/2) 3~5cmの大粒混じり砂質粘土。瓦片含む。

第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1) 中粒混じり粘土。陶磁含む。

第3層 オリーブ黒色(7.5Y3/1) 中粒混じりシルト質粘土陶磁含む。

第4層 オリーブ黒色(10Y3/1) 砂混じり粘土土器・陶磁器含む。

第5層 黒色(7.5Y2/1) 粗砂混じり粘土。土器片含む。

第6層 黒色(5Y2/1) 粗砂混じり粘土。土器片含む。

第7層 オリーブ黒色(7.5Y2/2) 粗砂混じり粘土。土器片含む。

第1層は、現代の耕作土層である。

第2層から第4層までは、後述する北壁断面第7層を切り込んだ溝の埋土である。埋土からは、近世の陶磁器、土器が出土していることから、埋没時期も近世以降に求められる。

第5層から第7層は、近世溝の下層にあった溝の埋土である。埋土は後述する北壁断面第15層を切り込んだ溝の埋土である。埋土からは、瓦、瓦器、土器皿が出土している。

##### (2) トレンチ北壁の堆積状況

次に東壁で確認した堆積状況及び層位は3図のとおりである。

まず、第1層及び第2層は、東壁第1層と対応した層である。

第3層から第6層、第9・10層は、緩やかに西から東へと傾斜する第7層・第8層上に堆積していた。第9層が東壁第3層に、第10層が東壁第4層とそれぞれ対応する。

第12～第14層、第16・17層は、第15層を切り込んだ形で検出したため、溝の埋上であると考えた。第13層が東壁第5層、第14層が東壁第6層、第18層が東壁第7層にそれぞれ対応している。

### (3) 調査トレンチ内での堆積状況

トレンチ北壁の断面観察により、時期の異なる2条の溝を確認した。それぞれ上層溝と下層溝とする。

まず、北壁第7層及び第8層が西から東に傾斜して下がっていく状況が確認できた。この傾斜上に北壁第3層から第6層及び第9・10層が堆積していることや、トレンチ南壁でもこの北壁第7・8層に相当する層及びそれらを覆う形の堆積は確認できたことから、これらは南北方向の上層溝の埋土であると考えた。埋土から出土した遺物は近世以降の土師器・陶磁器を含むため、比較的新しい時代に堆積したものであろう。東壁第2～4層はオリーブ黒色粘土層で中縫が多く混入するのに対し、下層の第5～7層は黒色粘土層で粗砂が混じるため、これらを上層と

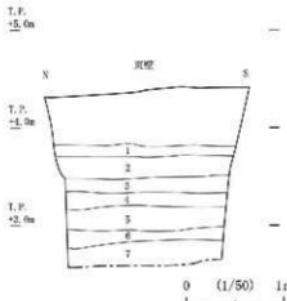
下層で区別した。上層の最下層はトレンチ東壁第4層であるが、これはトレンチ北壁第10層に対応する。したがってこの近世以降の溝の埋土はトレンチ北壁第10層及び東壁第4層が最下層となる。深度は約60cmである。溝の東肩はトレンチ内では検出できなかった。

下層溝の状況は、北壁15層はトレンチ西壁及び南壁でも検出されており、トレンチ南壁でも西から東への落ちを検出している。このため、溝は南北方向へと走ることが分かった。また、調査トレンチ内では溝の底部は検出できなかった。

### 4) 第90次調査出土遺物

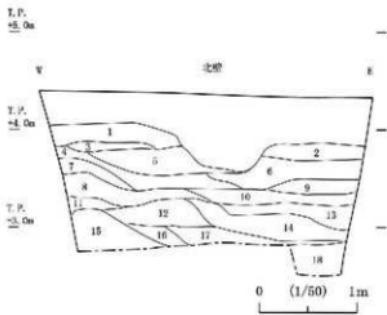
1～4は和泉型瓦器碗である。1は、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面・口縁部内面はヨコナデ調整のちヘラミガキ調整し、口縁部内面はヨコナデ調整する。口縁部と体部の間に段をもつ。12世紀初め。下層溝埋土より出土。2は、体部は内弯し、口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部内面はナデ調整のち暗文を施す。体部外面はユビオサエ調整する。口縁部外面はヨコナデ調整する。13世紀中頃。東側先行トレンチより出土。3は、体部から口縁部にかけて外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部外面はユビオサエ調整し、内面はナデ調整する。体部内面には暗文が残る。口縁部内面はヘラミガキ調整し、口縁部外面はヨコナデ調整する。13世紀中頃。4は、体部は内弯し、口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部下方はユビオサエ調整が残り、上方はヘラミガキ調整する。体部内面はヘラミガキ調整する。12世紀初め。東側先行トレンチより出土。

5～10は土師器皿である。5は、底部は平底を呈し、体部から口縁部は内弯する。口縁端部は丸く終わる。底部の調整方法は風化により不明である。体部・口縁部外面はヨコナデ調整する。下層溝埋土出土。12世紀代6は、体部は内弯し、口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。下



第3図 確認調査トレンチ東壁断面図

1. オリーブ黒色(7.5Y3/2)3～5cm大の陶混じり砂質粘土瓦片含む
2. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中礫混じり粘土 陶磁含む
3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中礫混じりシルト質粘土陶磁含む
4. オリーブ黒色(10Y3/1)砂混じり粘土 土師器・陶磁器含む
5. 黒色(7.5Y2/1)粗砂混じり粘土 土師器片含む
6. 黒色(6Y2/1)粗砂混じり粘土 土師器片含む
7. オリーブ黒色(7.5Y2/2)粗砂混じり粘土 土師器片含む



1. 暗オリーブ灰色(5GY3/1)細～中粒混じり砂質シルト
2. オリーブ黒色(7.5Y3/2)3～5cm大の疊層じり砂質粘土瓦片含む
3. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂質
4. 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質
5. オリーブ黒色(10Y3/1)粘土質シルト
6. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒混じり七脚岩含む
7. オリーブ黒色(5Y3/2)細粒混じりシルト質細砂
8. オリーブ黒色(5Y3/1)粗～細粒混じり粘土
9. オリーブ黒色(7.5Y3/1)中粒混じりシルト質粘土  
陶磁含む
10. オリーブ黒色(10Y3/1)砂混じり粘土  
土師器・陶磁器含む
11. 黒褐色(2.5Y3/1)粗砂混じり粘土
12. オリーブ黒色(5Y3/1)細～中粒混じりシルト
13. 黒色(7.5Y2/1)粗砂混じり粘土 土師器片含む
14. 黑色(5Y2/1)粗砂混じり粘土 土師器片含む
15. 黒色(5Y2/1)粘土質シルト
16. オリーブ黒色(5Y3/1)粗砂混じり粘土
17. オリーブ黒色(5Y2/2)粗砂混じり粘土質シルト
18. オリーブ黒色(7.5Y2/2)粗砂混じり粘土  
土師器片含む

第4図 確認調査トレンチ北壁断面図

##### 5) 第90次調査まとめ

今回の調査で検出した溝の性格について以下に述べる。

まず、今回の調査地は東に若江木村通と面しており、また前述のとおり溝は南北に走ることから、若江木村通に並行する可能性が考えられる。

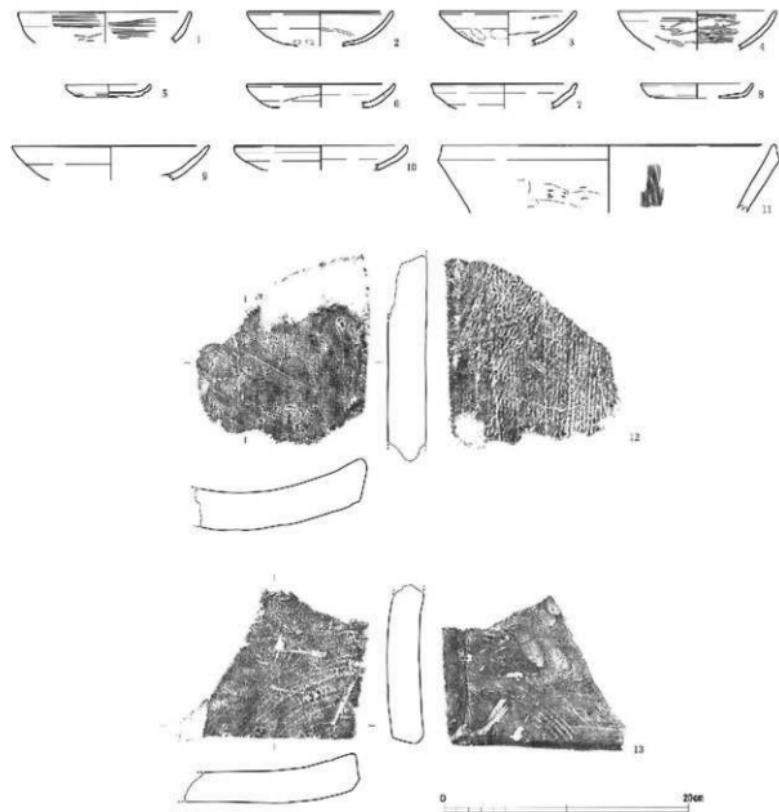
若江木村通は、大坂夏の陣で豊臣方に属していた武将、木村重成（生年不詳～1615）が若江の戦いの際に通ったとされる道の跡である。また、付近の字名の復元より、現在の若江木村通を境として西側（若江城側）には若江城に関すると考えられる小字（「城」、「東口」、「返見口」等）が残されているが、東側では字「為」と溜池を連想させる小字しか残っていない。このことから、この道を境として若江城の区画が形成されていた可能性が考えられる。若江城は前述のとおり17世紀末には既に取り壊されており、その後主郭部等の跡地に集落が形成されていた。昭和17年の航空写真では、旧村のほぼ東端にあたる部分に若江木村通が走っていることが確認できることから、現在のように宅地化が進む以前からの道であったことは間違いない。

若江木村通付近の既往の調査では、まず平成元年に実施された第43次発掘調査があげられる。当該調査では、若江木村通の西側で最も近接する東地区第7トレンチでやや東に振れている南北方向の溝

層溝埋土出土。東側先行トレンチより出土。7は、体部は外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く終わる。体部・口縁部内外面はヨコナデ調整する。東側先行トレンチより出土。12世紀中頃。8は、底部は平底を呈し体部は内弯する。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。東側先行トレンチより出土。9は、体部は内弯し、口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に終わる。体部外面はユビオサエ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はヨコナデ調整する。下層溝埋土より出土。15世紀初め。10は、体部・口縁部内外面はヨコナデ調整する。体部は内弯し、口縁部は上方に立ち上がる。口縁部と端部の境目に段をもつ。口縁端部は丸く終わる。下層溝埋土より出土。12世紀中頃～後半。

11は瓦器捕鉢である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は上方に伸びる。体部内面には捕目が施され、外側の調整方法は風化により不明である。下層溝埋土より出土。15世紀代。

12・13は平瓦である。12は、凹凸面ともにナデ調整し、コビキ痕が残る。13は、凹面は布目が残り、凸面は繩タタキ痕が残る。凸面に二次焼成を受けた痕跡が残る。平安時代。それぞれ下層溝埋土より出土。



第5図 出土遺物実測図

2条を検出している。この溝は幅5m、深さ1.2mで、16世紀から17世紀にかけての遺物が出土しており、若江城の堀跡であると報告されている。

また平成4年度に実施された下水道工事に伴う第45-2次調査では、夜間立会調査ではあるが、若江木村通の下で中世の遺物包含層の痕跡を確認している旨が報告されている。

今回の調査で確認した中世の溝は、トレンチ内では深度及び東端を確認できなかったが、堆積状況から推測できる幅及び深度は、堀である可能性を否定するものではない。また上層で検出した近世の溝もまた南北方向に走ることから、東端部を確認できなかったものの、中世の溝埋没後に同じ場所に掘られた溝であるとも考えられる。

以上を踏まえると、現在の若江木村通は、当初は若江城東邊を区画する堀であったが、廢城となつたのちは埋め立てられ、集落を区画する溝又は道として機能していたという変遷が想定できる。いず

れにしても、この近辺での調査履歴が少ないため、今後の調査事例の増加が待たれる。

#### 6) 第91次調査の経過

平成25年2月15日、東大阪市若江南町二丁目において、零細事業主による事務所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。協議代理者との協議の結果、平成26年7月3日に確認調査を実施した。確認調査の結果、埋蔵文化財が検出されたため、平成26年7月7日から7月18日までの8日間、調査地内において発掘調査を実施した。

#### 7) 第91次調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、確認調査トレンチ及び調査トレンチの位置は第6図のとおりである。

##### (1) 確認調査の概要

確認調査トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

第0層 盛上・擾乱層。

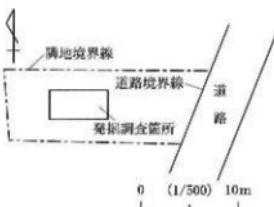
第1層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。

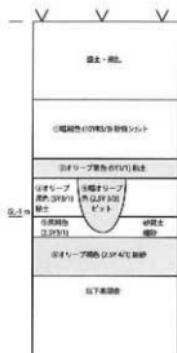
第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土。

第4層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質細砂。

第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂。



第6図 第91次調査位置図



第7図 確認調査柱状図

確認調査の結果、GL-0.7m～1.3mで古代～中世の瓦・土器を含む遺物包含層と第3層上面でピットを検出した。第2層は近世の耕作上層で、遺構を検出した第3層が中世の堆積層と考えた。

##### (2) 発掘調査の概要

引き続き実施した発掘調査は、調査面積は18m<sup>2</sup>となった。

発掘調査トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

第0層 盛上・擾乱層。

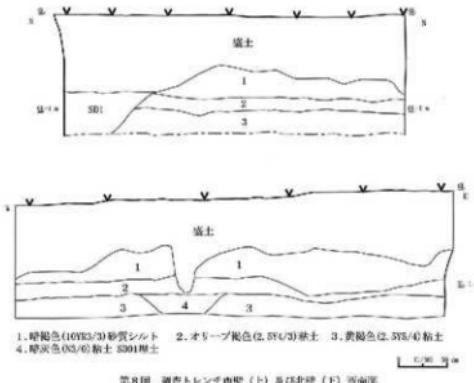
第1層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。

第3層 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。

概ね GL-0.5～0.8mまでが造成に伴う盛土及び擾乱層で、その下にさらに厚さ約30cm～50cmの暗褐色シルト層(第1層)を検出した。出土遺物より第1層は近代以降の盛土であることを確認した。

第1層の直下に近世の瓦・磁器が含まれているオリーブ褐色粘土層を検出した。これを第2層とした。第2層は、近世の耕作土層である。水田面は一部、近代の擾乱により失われていたが、ほぼ全面に広がることが判明した。第2層上面では、近世～近代の溝を検出した。溝はトレンチ東壁より西へ



第8図 調査トレンチ西壁(上)及び北壁(F)表面図

際、下層の黄褐色砂層より少量の瓦器碗が出土したため遺構の存在が予測できた。第2層を取り除くと、その直下より灰色粘土層を切り込んだ形の溝(SD01)を検出した。SD01は、検出幅0.92m、検出深度0.19mで、第3層上面で検出した近代の溝により切られていたが、トレンチ西壁で同溝の下層にSD01の埋土である暗灰色(N3/0)粘土を確認した。このためSD01は当初は北から南に延び調査区南端で、西へ屈曲する溝であったが、その後、調査トレンチ中央部で屈曲する部分のうち、北へ向かう部分を埋め、東へと伸びる溝として利用又は再利用されていたことが分かった。なお、出土遺物には近世の陶磁器が含まれていたことから、SD01も近世以降に埋没していたと考えられる。ただし、第3層は、検出した土器を精査したところ、13世紀代前半の特徴をもつ瓦器碗を検出したことから、

伸び、トレンチ中央付近でいつたん南へ約0.6m方向を変えた後、再び西へ伸びていた。溝埋土からは近世の遺物が出土したため、埋没時期もそれ以降であることがわかった。また、溝以外の耕作に伴う遺構や水田畦畔の検出に努めたが、明確な痕跡は認められなかつた。

第3層は、黄褐色(2.5Y 4/4)細砂層である。第3層上面では中世の羽笠井戸、溝及び噴砂を検出した。

#### トレンチ東側攪乱坑の掘削の

際、トレンチ東側攪乱坑の掘削の際に、下層の黄褐色砂層より少量の瓦器碗が出土したため遺構の存在が予測できた。第2層を取り除くと、その直下より灰色粘土層を切り込んだ形の溝(SD01)を検出した。SD01は、検出幅0.92m、検出深度0.19mで、第3層上面で検出した近代の溝により切られていたが、トレンチ西壁で同溝の下層にSD01の埋土である暗灰色(N3/0)粘土を確認した。このためSD01は当初は北から南に延び調査区南端で、西へ屈曲する溝であったが、その後、調査トレンチ中央部で屈曲する部分のうち、北へ向かう部分を埋め、東へと伸びる溝として利用又は再利用されていたことが分かった。なお、出土遺物には近世の陶磁器が含まれていたことから、SD01も近世以降に埋没していたと考えられる。ただし、第3層は、検出した土器を精査したところ、13世紀代前半の特徴をもつ瓦器碗を検出したことから、



第9図 調査トレンチ遺構平面図

同時期の堆積と考えた。したがって溝の上面である本来の造構面は既に削平されている可能性も考えられる。

SD01が屈曲する部分の西北で、羽釜を検出した。羽釜は据えられた状態で、底部は打ち抜きによりせん孔がなされ、竹筒が立てられていた。羽釜井戸の残存と考え、井戸の掘方を検出するため周辺部分を断ち割って精査したが、検出できなかった。検出した羽釜は最低部又はそれに近い部分が遺存していたものとみられることから、前述のSD01と同じく後世の削平を受けていた可能性がある。

また、この面を切り裂く2条の砂脈を検出した。この砂脈は地震の際の液状化の痕跡であり、下層の砂層が液状化した際に噴出したものと考えられる。

#### 8) 第91次調査出土遺物

第91次調査では前述のとおり羽釜・瓦・瓦器などが出土した。現在これらの遺物は整理作業中であるため、報告は来年度に行うこととする。

#### 9) 第91次調査まとめ

今回の調査地は字「城」に含まれる部分ではあるが、調査トレンチ内では若江城に関する造構は検出されなかった。ただし、SD01は、若江城築城以前～信長期の間に機能していた溝であることから、今後周辺での調査の進展によってその性格に関する知見が得られるかもしれない。

#### 【参考文献】

財団法人東大阪市文化財協会1987『若江遺跡第25次発掘調査報告』

財団法人東大阪市文化財協会2002『若江遺跡発掘調査報告集－第39・41・43次調査－』

財団法人東大阪市文化財協会1991『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1990年度－』

財団法人東大阪市文化財協会1992『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1991年度－』

図版1 若江遺跡第90次発掘調査 遺構



1. 人力掘削状況  
(北西より)



2. トレンチ北壁断面  
(南より)



3. トレンチ南壁断面  
(北より)

圖版2  
若江遺跡第90次発掘調査  
遺構



1. 調査トレンチ東壁断面  
(西より)



2. 調査断面西壁  
(東より)



3. 調査トレンチ全景  
(北東より)

図版3 若江遺跡第91次発掘調査 遺構

1. 調査前風景  
(東から)



2. 羽釜井戸検出状況  
(西から)

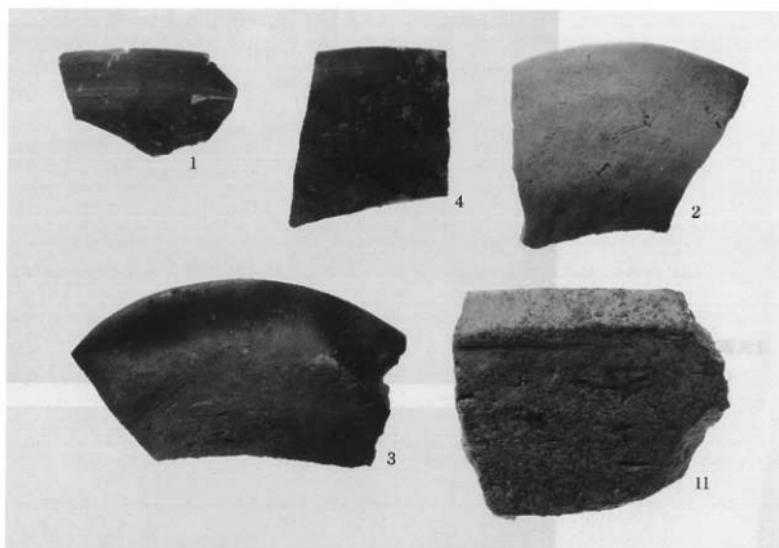


3. 調査トレンチ全景  
(南東より)

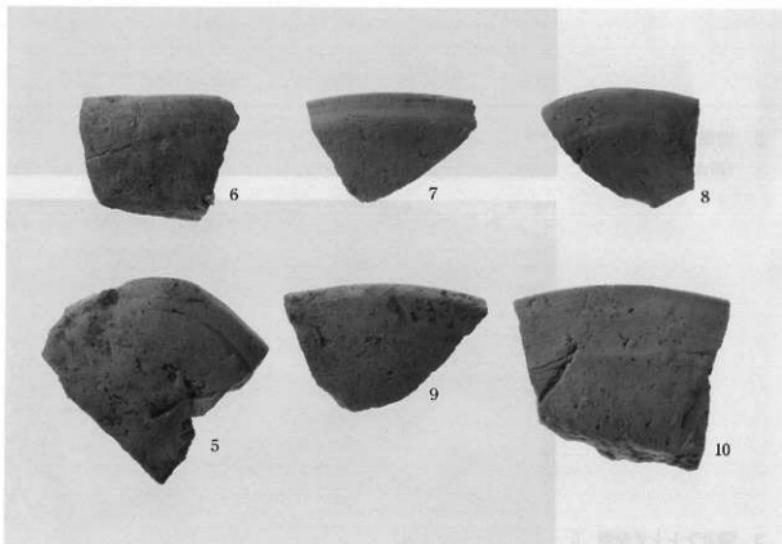


圖版4

若江遺跡第90次發掘調查  
遺物



1. 各層位出土 瓦器・瓦質土器



2. 各層位出土 土師器

## 第5章 山畠古墳群第33次調査

(山畠21号墳平成24年度調査)

### 1)はじめに

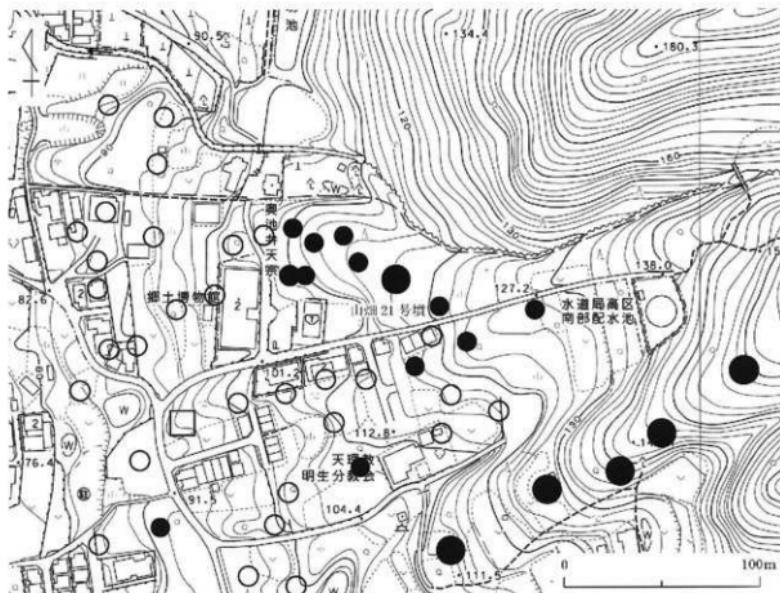
山畠古墳群は、瓢箪山駅の東側の山麓部に分布する古墳群である。市内最大の群集墳で、これまでの開墾や宅地開発によって破壊された古墳も入れると70基ほどが確認されている（第1図）。

円墳が主体を占めるが、中には方墳や上円下方墳、双墳といった墳形を有するものもある。副葬品には須恵器や土師器、鉄製品、装身具があり、特に馬具の出土量が多く、特徴的である。

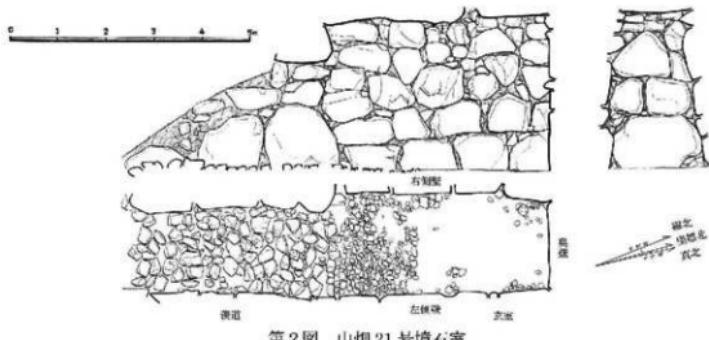
### 2)既往の調査

昭和41（1966）年、枚岡市教育委員会の事業として、大阪府立花園高校地歴部が作業を行った調査が行われている。調査成果は、大阪府立花園高等学校地歴部1966.9「山畠21号墳」「温故知新」3に概報として掲載され、枚岡市教育委員会1966.10「枚岡市四条町山畠21号墳の調査」枚岡市文化財調査報告2として刊行された。また、「河内四条史」にも成果をまとめた概要が掲載されている。

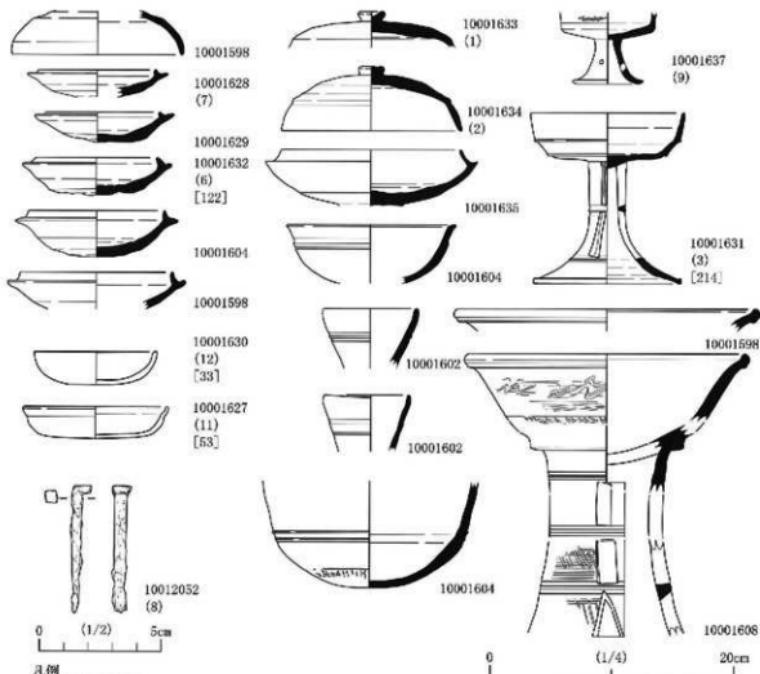
昭和41年の調査に関して、3つの文献では見解が異なる部分がある。検証する情報が少なくいずれが正しいか判断することはできないが、現在判明している情報をここでは述べておきたい。



第1図 調査位置図



第2図 山畑 21号 填石室



第3図 玄室出土遺物実測図

・昭和41年の調査

調査の体制・期間

調査は、枚岡市教育委員会の事業として藤井直正が担当し、原田修・松田正昭の指導をもとに大阪府立花園高等学校地歴部が作業にあたった。期間は、昭和41年3月13日から5月3日までである。

発掘調査

調査前、石室入口部に石が落ち込んでおり、かなりの土砂が室内に流れ込んでいた。そのため狭道部は判然としなかった。室内には所々に盗掘された跡があり、茶碗やガラス瓶が散乱している状態であった。

調査はまず、室内から行われた（第2図）。室内を掘り進めて行くと床面に石が敷かれているのを確認した。狭道と想定される場所も同時に掘り進め、天井石と思われる大きな石が渾門あたりに横たわっており、調査の妨げとなつたので取り除いたところ、狭道床面にも石が敷かれているのを確認した。玄室と狭道では敷石に違いがあり、狭道部分はやや大きな石を使用していた。

渾門と墳丘の関係をみるために、トレンチCを設定して調査を行った（第6図）。約50cm下で敷石のように小石が並べられているのを検出し、葺石の可能性が指摘された。石室の実測とともに平面図を作成し、発掘調査を終了した。

測量調査

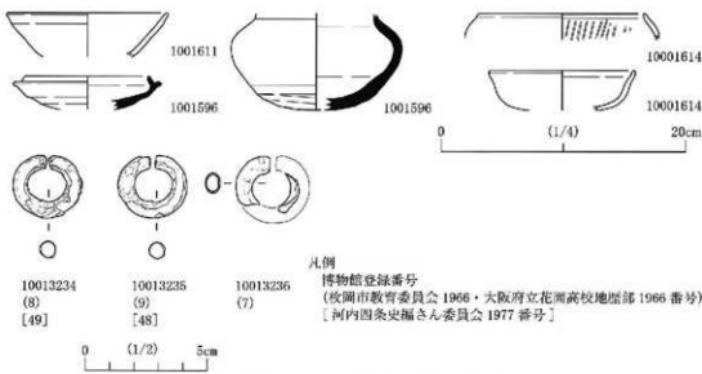
発掘調査終了後、4月10日から5月3日まで土日を中心に8日間の墳丘測量を行った。

報告書作成

報告書は、調査終了後ただちに行われ、実測図のトレース、遺物の整理、原稿の作成を行い、同年10月に報告書が刊行された。

この調査で出土した遺物は、現在東大阪市立郷土博物館において保管されている。現在確認できるのは、土器・石器がコンテナ2箱、金属製品・骨が1箱である。

既に遺物等は報告されているが、印刷が不鮮明であったり、出土位置が不明であつたりするためここで改めて報告したい。遺物番号は、郷土博物館の登録番号7桁を付し、報告書で記載されている番



第4図 狹道・トレンチC出土遺物実測図

号もその下に記載した。概報と報告書は同一の図面が使用されており、番号は同じである。郷土博物館の番号で重複しているものは、同一の番号で複数個体が管理されているためである。また、いずれの遺物も出土位置が玄室・羨道・トレンチ C といった範囲でしかわからない。

### 玄室（第3図）

須恵器（杯・有蓋高杯・無蓋高杯・器台・臺・提瓶）、土師器（杯・盤）、瓦器（椀）、刀子、尾鉄、鉄鎌、鉄釘、鎧、石棺の破片、骨が出土した。

玄室は大きく敷石部分と敷石の無い部分に分かれる。敷石部分の右側壁に近い場所から鉄釘が多数出土した。敷石の無い部分でも、奥壁に近い場所では尾鉄・鉄鎌が出土し、左側壁に沿って刀子・土器、右側壁に沿って石棺の破片が出土した。骨は、玄室内の所々にかたまって出土した。骨は鑑定していないため種類等は不明である。

報告書に記載のある遺物の中で、現在確認できる須恵器（杯・有蓋高杯・無蓋高杯・平瓶・器台）、土師器杯、釘を実測した。ただし、どの地点から出土したのか詳細は不明である。

須恵器は、いずれも TK209型式である。土師器は、7世紀前半の特徴を有している。

#### 石棺の破片

図化していないが石棺の破片と考えられる石材がある。板状の石材でいずれの面も打ち欠かれている。二上山白色凝灰岩の中でもいわゆる「松香石」を含まないものである。玄室内に組合式の家形石棺があったと考えられる。

玄室内部には、平安時代の須恵器及び中世の瓦器椀が混在していた。出土層位等の情報がないため後世の改変がいずれにまで及んでいたのか不明であるが、石棺が残されていないことを考えるならば、盜掘などにより石室内部はかなり改変を受けたと見るのが妥当である。搅乱の時期は、出土遺物から平安時代・鎌倉時代になる。

報告書の記載から石棺の破片は、中心よりも玄室左側壁に近い場所で出土し、釘は玄室右側壁に近い場所から出土した。詳細な出土状況を検討できないため想像に過ぎないが、石室内には石棺と木棺の二棺が埋葬されていたと考えられる。木棺が古墳時代に属すると考えてよいならば、玄室から出土した遺物に時期差は認められないため、石棺と一緒に埋葬された可能性が指摘できる。

### 羨道

須恵器（杯・高杯・無頸壺・甕）、土師器杯、瓦器椀、耳環、石棺の破片が出土した。

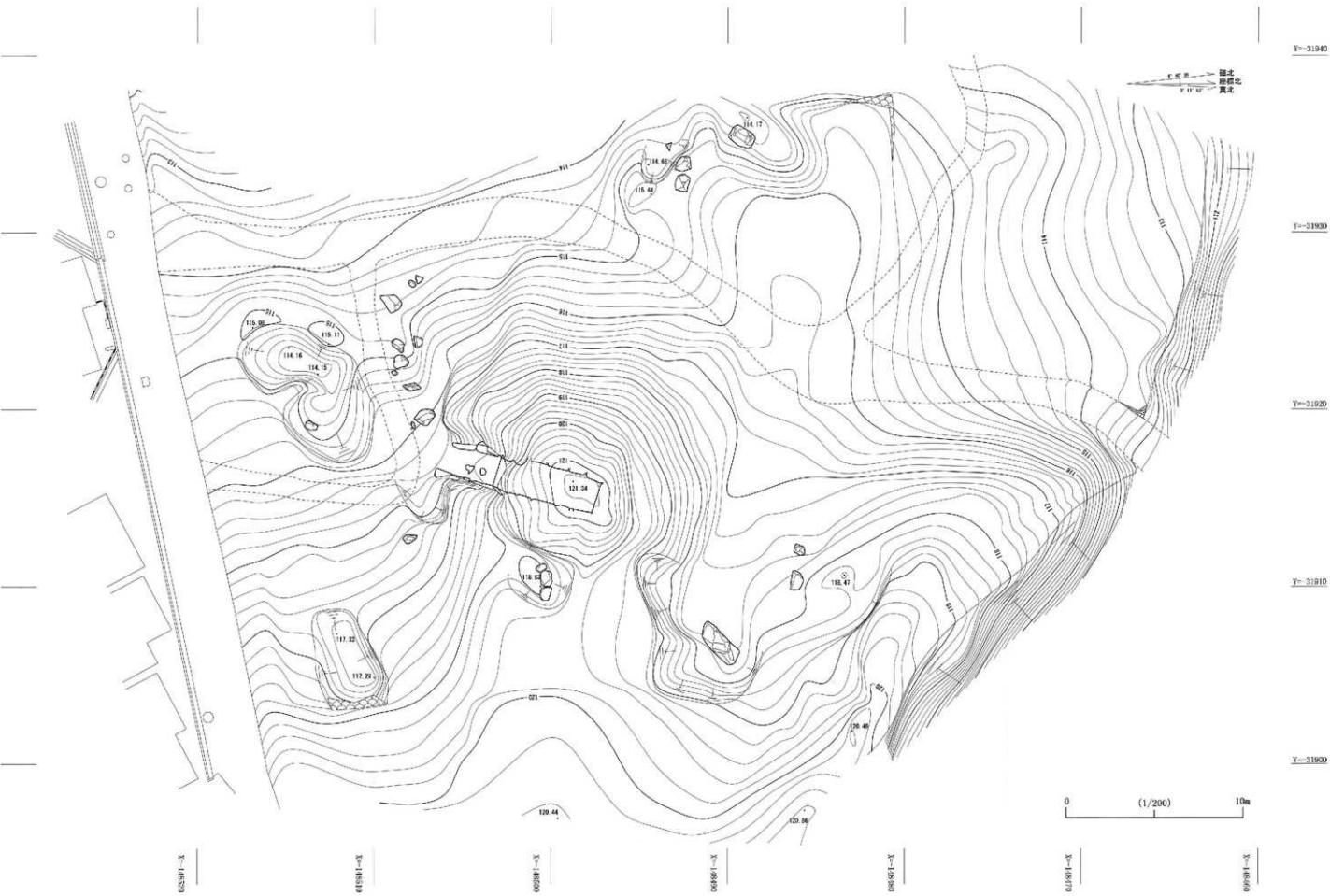
耳環は、2つが中心部の奥壁より 6 m から出土し、残り 1 つは掘り出された土のなかから発見された。報告書に記載のある遺物の中で、須恵器（杯・無頸壺）、土師器杯を図化した（第4図）。須恵器は TK209型式である。土師器杯は 7世紀初頭である。

### トレンチ C

須恵器（杯身・甕）・土師器杯が出土した。その中で、土師器杯を図化した（第4図）。

10001614上は、内面にミガキを施し暗文状を呈する。10001614下は、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す、口縁部内面に段を有する。7世紀である。この他に瓦器椀が出土している。羨道から取り出されたものか、墳頂から転落したものかなど遺物の性格については判然としない。

以上が昭和41年の調査の概要である。



第5図 填丘測量図

### 3) 調査の経過

平成24年、地権者より山畠21号墳の保存と活用について相談を受けた。昭和41年の調査成果は年月が過ぎており、山畠21号墳の保存を考える上で、基礎的なデータが不足していると判断した。そこで平成25年1月21日から1月31日まで、測量調査とトレンチを設定して調査を行った。調査面積は、測量調査を含め988m<sup>2</sup>である（第5図）。

### 4) 調査の概要

今回の調査は現状保存を目的とした調査であり、山畠21号墳の現状と関連遺構の確認を目的とした。まず、測量調査を行うことにより、古墳の現況記録を作成した（第5図）。次に、関連遺構を確認するため調査区を2箇所設定して発掘調査を行った。調査区の設定は、石室の長軸を基本とし、それに沿った場所を選定して設定した。調査区の配置は第6図のとおりである。

#### 第1トレンチ（第7・8図）

石室の長軸の延長上に設定した。この調査区は、北側の墳丘裾の検出、葺石の有無、北側における墳丘外での遺構の有無を目的とした。調査の範囲は12×1mで、土坑状遺構を検出したことから一部拡張し、最終の面積は13.2m<sup>2</sup>である。

#### 墳丘

墳丘部分では表土直下において葺石を検出した。葺石は20cm大の河原石を使用しており、一部は表土上に露出している状態であった。裾部にはやや大きめの河原石を横長に置いて部分もある。斜面の葺石は小口面をそろえて墳丘斜面に差し込むように葺かれている。裾部から高さ約90cmまで残存していたが、それより上部に葺石が施されていたのかは不明である。

葺石に平行する溝を検出した。幅は60cmである。ただし、古墳に伴う周溝であるのか断定できなかつた。後述するように、下層確認を行ったところ石室構築と同時期と思われる遺物が第4層より出土しており、北側における墳丘構築過程を確定できていない。そのため今回の調査では、周溝の有無は保留としたい。

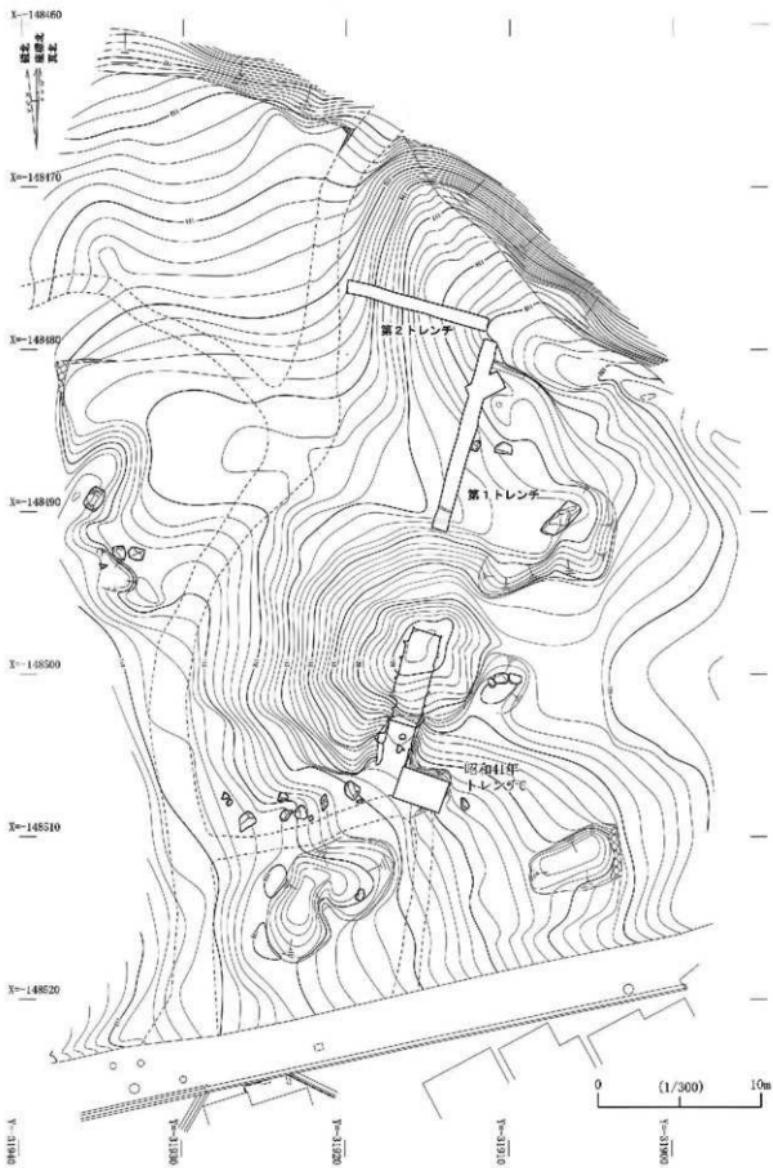
#### 土坑状遺構

墳丘の北側にある尾根状の高まりの中でやや平坦な箇所において土坑状遺構を検出した。短辺0.8m、長辺1.5mの長方形を呈し、深さ0.1mを測る。出土遺物はなく時期や性格は不明である。

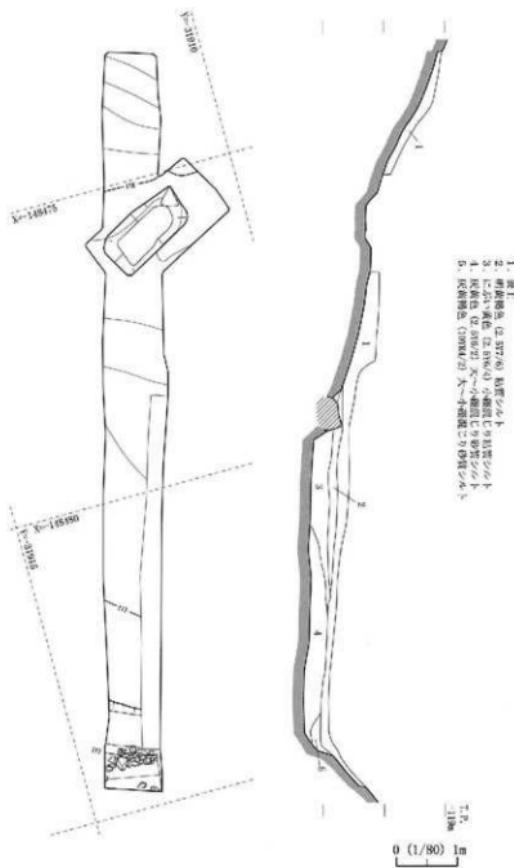
墳丘に影響がない場所において下層確認を行った。調査の結果、下層から弥生土器、土師器の破片が出土した。土師器は、杯・壺の一部で非常に細片であるが7世紀のものと考えられる。下層確認の結果、第3・4層が7世紀以降に形成されたものであることがわかった。これらは、墳丘構築に伴う整地または、後世の改変が考えられる。調査範囲が狭小なためその性格を決定するには検討材料が不足しており、今後の調査の進展によって検討していきたい。

#### 第2トレンチ（第9図）

東西方向の調査区である。墳丘北側に位置する尾根状の高まりと墳丘の関係を調べる目的で設定した。長さは8.9m、幅1mである。調査面積は、8.9m<sup>2</sup>である。表土を掘削後、すぐに基盤層があらわれ遺構は検出できなかった。



第6図 調査区配置図

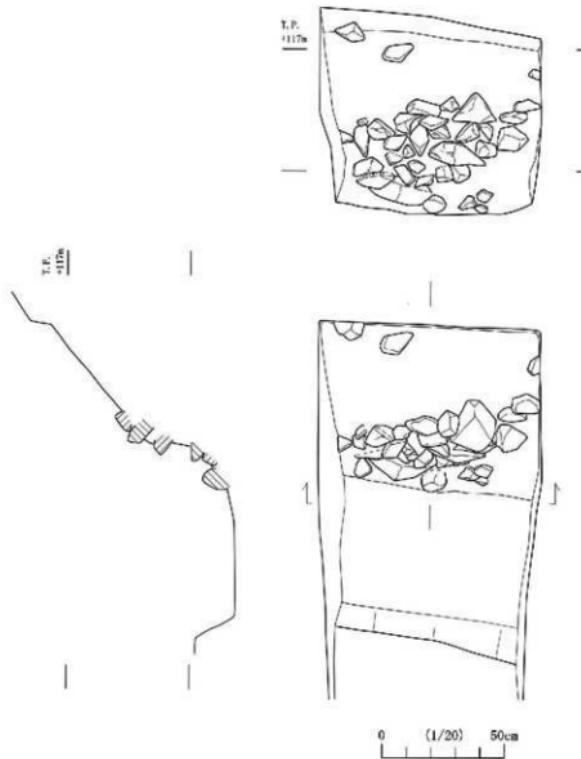


第7図 第1トレンチ平面・断面図

### 5)まとめ

第1トレンチにおいて葺石と上坑状造構を検出した。昭和41年の調査においても葺石の存在が確認されていたが、実態は不明であった。今回の調査では墳丘北側における葺石を確認するとともに、その構造を検討する資料を得た。

周溝に関しては、明確にすることはできなかった。下層確認のためのトレンチから遺物が出土したため第3・4層は基盤層ではないことが判明した。遺物は細片であり二次堆積によるものであること



第8図 第1トレンチ実測図

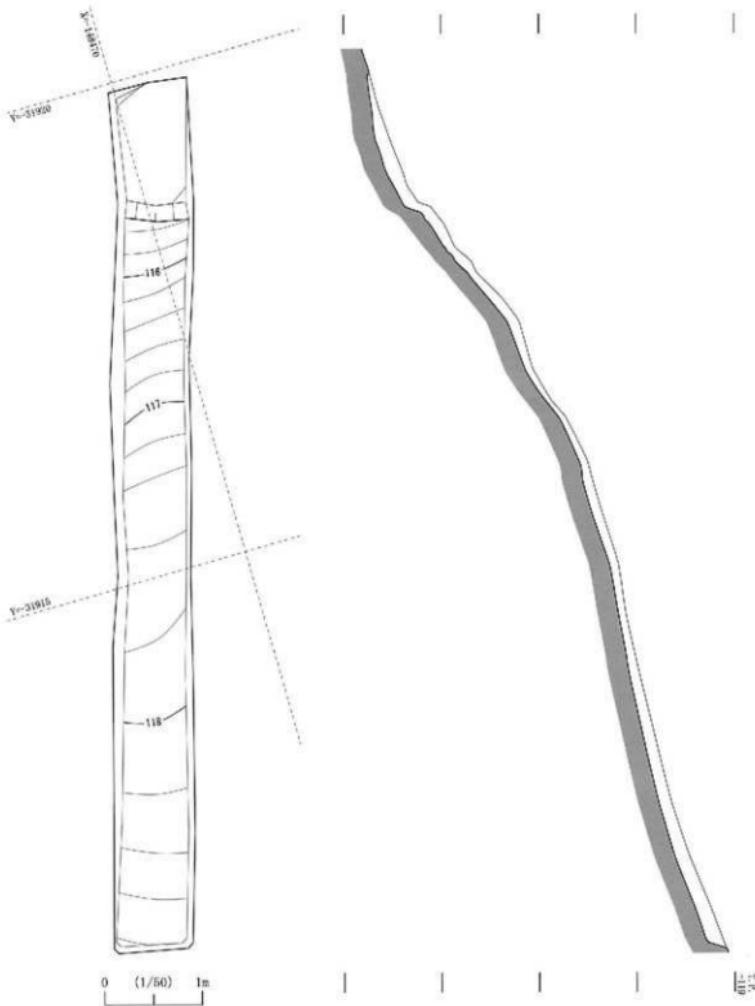
は明白であるが、第3・4層の性格について再度検討する必要がある。墳丘構築の際の整地、後世の改変、自然堆積が想定される。

今後の課題として墳丘と直交する西側に墳頂部までトレンチを設定し、葺石がどこまで葺かれていたのかを確認する。さらに北側の第1トレンチを基本としてやや広いトレンチを設け、北側の様相についても明らかにしたい。また、昭和41年の調査について実態を把握するための調査区を設け実施したいと考えている。

さらなる調査について、現在協議中であることを申し添える。

#### 【参考文献】

枚岡市教育委員会1966『枚岡市四条町山畠21号墳の調査』枚岡市文化財調査報告2



第9図 第2トレンチ平面・断面図

大阪府立花園高等学校地歴部1966「山畠21号墳」「温故知新」3

河内四条史編さん委員会1977「河内四条史」

横穴式石室研究会事務局2007「研究集会 近畿地方の横穴式石室」



1. 第1トレンチ  
(北より)



2. 第1トレンチ  
葺石検出状況  
(北西より)



3. 第1トレンチ  
下層確認  
(北より)

図版2 山畠古墳群第33次発掘調査 遺構

1. 第1トレンチ  
下層確認断面  
(西より)



2. 第1トレンチ  
下層確認断面  
(西より)



3. 第1トレンチ  
下層確認断面  
(西より)



図版3

山畠古墳群第33次発掘調査

遺構



1. 第1トレンチ  
土坑状遺構検出  
(南より)



2. 第1トレンチ  
土坑状遺構断面  
(南より)



3. 第2トレンチ  
全景  
(西より)

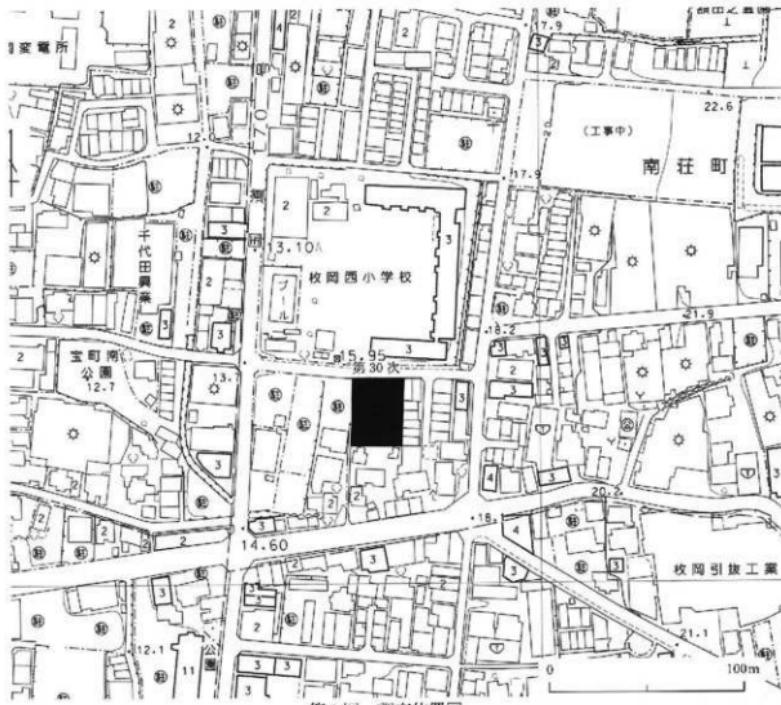
## 第6章 鬼塚遺跡第30次発掘調査

### 1)はじめに

鬼塚遺跡は、東大阪市箱崎町、新町、宝町、南莊町及び豊浦町にわたる縄文時代中期末から室町時代にかけての集落跡である。遺跡は、生駒西麓の豊浦川によって形成された扇状地上にあり、標高は10m～30m程度の場所に位置する。

鬼塚遺跡は、昭和35年に旧枚岡電報電話局建設工事の際に、土器が大量に出土したことからその存在が知られるようになり、その後、今回の調査を含めて30次の発掘調査が実施された。

既往の調査状況について見ていく。今回の調査地より南東約350mに位置し、昭和53年に実施された第5次調査区では、平安時代の掘立柱建物跡や、弥生時代後期の竪穴住居跡が火災により焼失した状態で検出された。焼失した住居跡付近には土器の製作のためと思われる粘土塊がそのまま造存した状態で検出された。調査地より南西に約150mに位置する昭和57年の第8次調査区では、縄文時代の土壙墓、弥生時代の方形周溝墓が検出されている。また、平成2年から平成3年にかけて実施された共同住宅建設に伴う第13次調査では、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物跡や、墨書き土器などが検出された。



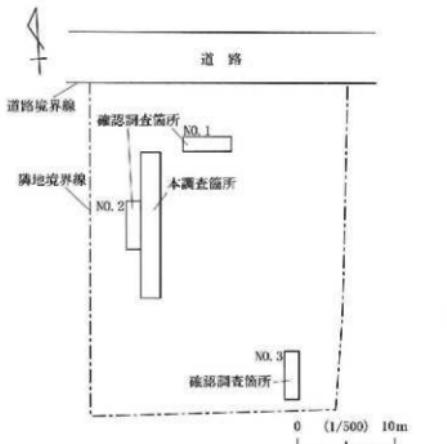
第1図 調査位置図

今回の調査地付近の調査履歴としては、南方約60m地点で下水道工事に伴う第24次調査が平成12年に実施され、弥生時代～古墳時代の遺物包含層が検出された。また調査トレンチに制限はあったものの、古墳時代のピットを検出したと報告されている。

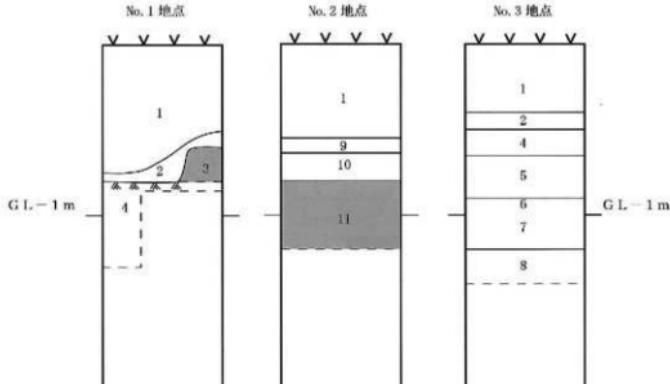
## 2) 確認調査の概要

平成25年9月13日に東大阪市南莊町においてサービス付高齢者向け住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該建築物の基礎工事は地盤改良工事を伴うもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたことから、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知し、平成25年9月18日に確認調査を実施した。

確認調査は、3カ所の確認調査トレンチを設定し実施した。確認調査トレンチのうちNo.1地点及びNo.3地点では埋蔵文化財は検出されなかったが、No.2地点ではGL-0.8mより古墳時代の土師器・



第2図 確認調査トレンチ及び本調査トレンチ位置図



- 1. 盛土 2. 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質シルト 3. 咀嚼 (土師器出土上) 4. 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト (地山)
- 5. 暗灰色 (10YR4/1) 粗～細砂混じりシルト 6. 暗緑灰色 (5G3/1) 粘土 7. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 砂質シルト
- 8. にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粗砂混じり砂質シルト 9. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト
- 10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黏土質シルト 11. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質粘土 5cm～10cmの大いびき、炭化物含む。

第3図 確認調査トレンチ柱状図

須恵器が出土した。

### 3) 発掘調査の概要

確認調査の結果を受け協議代理者と協議の上、計画地西寄りに東西幅2m、南北長さ15m、30m<sup>2</sup>の調査区を設定し、平成25年10月4日から10月11日にわたり計6日間、上記調査区の発掘調査を実施した。

#### (1) 層位

発掘調査トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

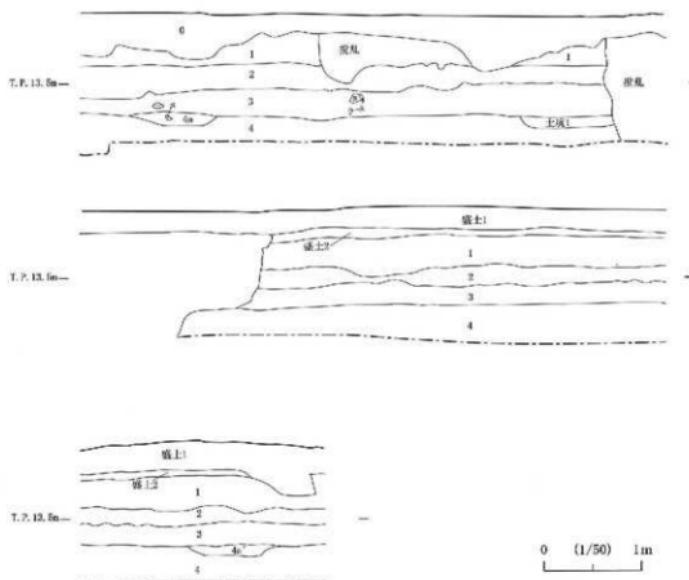
第0層 盛土。

第1層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒シルト。耕作土1。

第2層 黒褐色(2.5Y3/2)細粒シルト。耕作土2。

第3層 黒色(10YR2/1)細粒シルト。土師器、須恵器含む遺物包含層。

第4層 黒褐色(10YR3/1)細粒シルトに暗褐色(10YR3/4)シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトがブロック状に多く含まれる。



1. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒シルト 耕作土1
2. 黒褐色(2.5Y3/2)細粒シルト 耕作土2
3. 黒色(10YR2/1)細粒シルト 土師器、須恵器含む遺物包含層
4. 黒褐色(10YR3/1)細粒シルトに暗褐色(10YR3/4)シルトと褐灰色(10YR4/1)シルトがブロック状に多く含まれる。  
第4a層 黒色(10YR2/2) 細粒シルト中に細繊・極粗粒砂を多く含む。  
第4a'層 第4a層と同質。

第4図 調査トレンチ断面図

第4a層 黒色（10YR2/2）細粒シルト中に細礫・極粗粒砂を多く含む。

第4a'層 第4a層と同質。

調査はまず重機による表土の除去作業を行った。表土層は現代の盛土層で、調査区の北側では深浅が認められた。厚さは調査区中ほどでは深さ20cmと一定しているが、深いところで58cmに達していた。さらに下層の調査区中ほど東側で上端幅2.6mの擾乱坑を検出した。擾乱坑の南側では、これに切られるさらに古い盛土が6cmから12cmの厚さで堆積していた。擾乱坑は、深さ約11mであることが調査最終段階で確認された。東側調査区壁には、その最下部で木枠様の板材の一部が観察された。擾乱坑の目的・用途は不明である。

盛土層の下には近世・近代の耕作土が平均して40cm程度堆積していた。細粒シルト層ではほぼ同質であったが、色調によって2層に分層し、第1・2層とした。

これら耕作土層を重機及び人力で慎重に掘削したところ、GL-80cmで締まり・粘性ともに強い黒色の細粒シルト層を検出した。これを第3層とした。

第3層上面を精査し、人力によって段階的に掘り下げつつ精査したところ、層中から土師器片が出土し、前述した擾乱坑を挟んだ南側からは6世紀代の須恵器片が出土した。この遺物包含層の厚さは平均25cmである。層中からは破碎された円窓が若干量出土した。

この遺物包含層を人力掘削で除去したところ、黒褐色を主体としつつも暗褐色シルトをブロック状に含み、粘性・締まりともに強い明らかに土質の異なる面に達した。これをいわゆる地山層と考え、第4層とした。

第4層上面をさらに精査したところ調査区中ほど東壁寄りで土師器高杯などが集中した状態で検出された。遺構の存在が予想されたため、遺物の周囲を精査したところ、調査区東壁にかかって、上坑（SK1）、その南側に近接してピット（SP1）を確認した。この他、ピットをいくつか確認したが、いずれも前述した遺構面を構成する土壤に含まれる暗褐色シルトブロックの集中したものであった。これらの遺構が掘りこまれた土層を表土下1.2mまで掘り下げたが、この層中からの遺物は皆無であった。

## （2）遺構

前述のとおり第4層上面で遺構を検出した。いずれの遺構も深度は浅く、遺物包含層又は上層耕作土によって削平された上層から掘りこまれた可能性も考えられる。

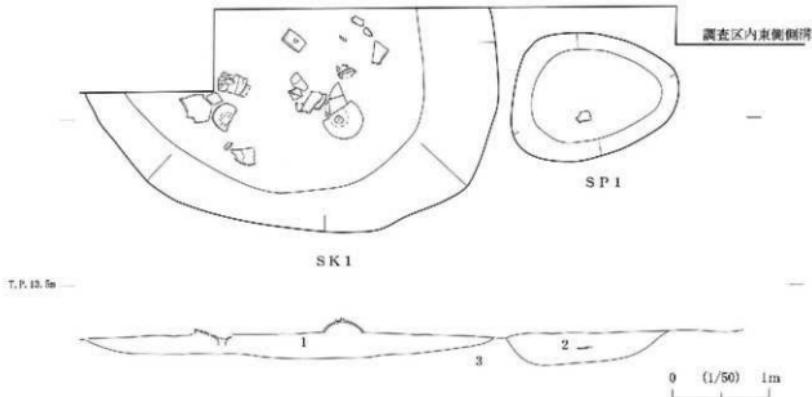
### ① SK1

調査区中ほど東壁にかかって検出された。確認できる最大幅は170cm、深さは10cmである。底部は平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかな皿状を呈している。土坑内の遺物の出土状況は大きく2群に分かれしており、遺物はいずれも土坑底面に接していない。埋土は褐色（10YR4/6）の泥岩粒径1~3cmを含む黒色（10YR2/1）細粒シルトで、埋土は分層が困難であった。遺構は黒色土中に掘り込まれ埋土も黒色土であったが、遺構埋土中に褐色の泥岩粒を含むことと、遺構面を構成する第4層が暗褐色シルトや褐灰色のシルトをブロック状に含み粘性が極めて強いことをもって区別した。

### ② SP1

南北にやや長い卵型を呈し、長軸で最大70cm、短軸で最大53cmである。深さは北側でやや深く17cm、南側で11cmである。

埋土は暗褐色（10YR3/4）のシルト粒を多く含む黒褐色（10YR2/2）細粒シルトで、6世紀の土師



第5図 SK1・SP1遺構平面・断面図

器壺片が出土している。埋土は単層で暗褐色シルト粒を多く含む。底部は平坦で壁面の立ち上がりは南側に比して北側でややきつかった。

#### 4 出土遺物

出土した須恵器及び土師器のうち6点が復元できた。

1は須恵器杯である。体部内外面と立上り内外面は回転ナデ調整する。受部上面に溝状の凹みが残る。立上りは内傾し、端部は丸く終わる。

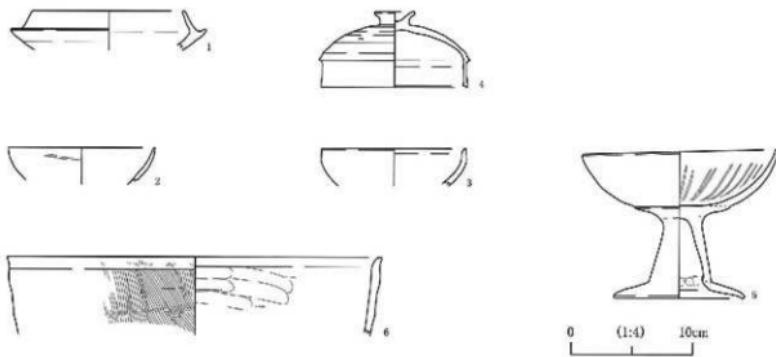
2、3は土師器杯である。2は、体部は内湾し、口縁部は外上方に伸びる。口縁端部は尖り気味である。体部外面はヘラミガキ調整し、内面の調整方法は風化により不明である。口縁部内外面はヨコナデ調整する。奈良時代か。3は、内外面の調整方法は不明である。体部は内湾し、口縁部は外上方に伸びる。口縁端部は丸く終わる。時期不明。

4は、須恵器蓋である。口縁部は回転ナデ調整し、天井部は上部3/4を回転ヘラケズリ調整し、残りを回転ナデ調整する。つまみ部はナデ調整する。口縁部と天井部の境に鋭い稜を持ち、口縁端部に沈線をめぐらす。6世紀中頃。

5は土師器高杯である。杯部は浅い椀状を呈し、体部から口縁部にかけて内湾する。口縁端部は丸く終わる。脚部は、裾部が緩く立ち上り、柱状部はハの字状を呈する。杯部は内面をヨコナデ調整のち放射状の暗文を施す。外面の調整方法は不明である。脚部は、柱状部内外面はナデ調整し、裾部内外面はヨコナデ調整する。裾部内面に黒斑が残る。脚部内面以外は赤い化粧粘土を施す。6世紀中頃。

6は瓶である。体部外面はハケメ調整し、内面はナデ調整する。口縁部内外面はナデ調整する。体部は外上方に伸び、口縁部は緩く外反する。口縁端部は面をもつ。5世紀中頃～6世紀。

1～4及び6は第3層から出土し5はSK1より出土した。



第6図 出土遺物実測図

## 5 まとめ

確認調査の結果、調査地全体での遺構の存在は希薄と考えられたが、設定された調査区では遺物及び遺構が良好な状態で遺存していた。

第3層は前述のとおり下層遺構の深度が浅いことから、これらを削平した後整地された可能性が考えられること及び奈良時代のものと考えられる遺物が出土しているため、第4層の時期よりも下った時期の堆積と考えられる。

第3層と第4層（地山層）との境に部分的ではあるが、黒色細粒シルト層中に細礫・楕円粒砂を含む土壌を確認した。小規模な河川の氾濫や滯水の痕跡と考えた。

また、第4層上面で検出したSK1より出土した土器は6世紀代で収まることから、第24次調査で検出された古墳時代の遺物包含層及び遺構と同時期のものである可能性が指摘できる。

## 【参考文献】

- 東大阪市教育委員会1978『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17』
- 東大阪市教育委員会1978『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報19』
- 財団法人東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』
- 財団法人東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第13次（遺構編）・22次発掘調査報告書』
- 東大阪市教育委員会2001『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成12年度－』

図版1 鬼塚遺跡第30次発掘調査 遺構



2. 人力掘削状況  
(南から)



3. SK1 検出状況  
(南から)



1. SK1 遺物検出状況  
(西から)



2. 調査トレンチ  
東壁断面1  
(西から)



3. 調査トレンチ  
東壁断面2  
(西から)

図版3 鬼塚遺跡第30次発掘調査  
遺構



1. 調査トレンチ  
東壁断面3  
(西から)



2. 調査トレンチ  
東壁断面4  
(西から)



3. 調査完了状況  
(北から)

圖版 4  
鬼塚遺跡第30次發掘調查  
遺物



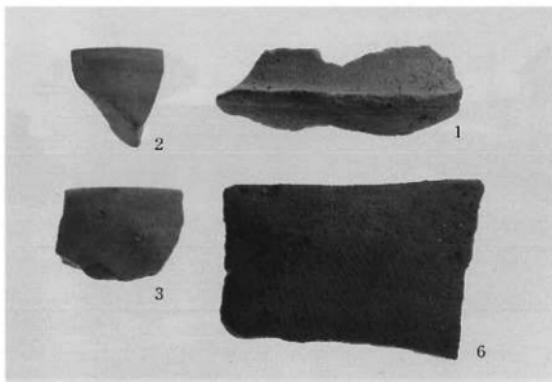
4

1. 第3層出土  
須恵器



5

2. SK1 出土  
土師器



2

1

3

6

3. 各層位出土  
土師器・須恵器

## 第7章 弥刀遺跡第10次発掘調査

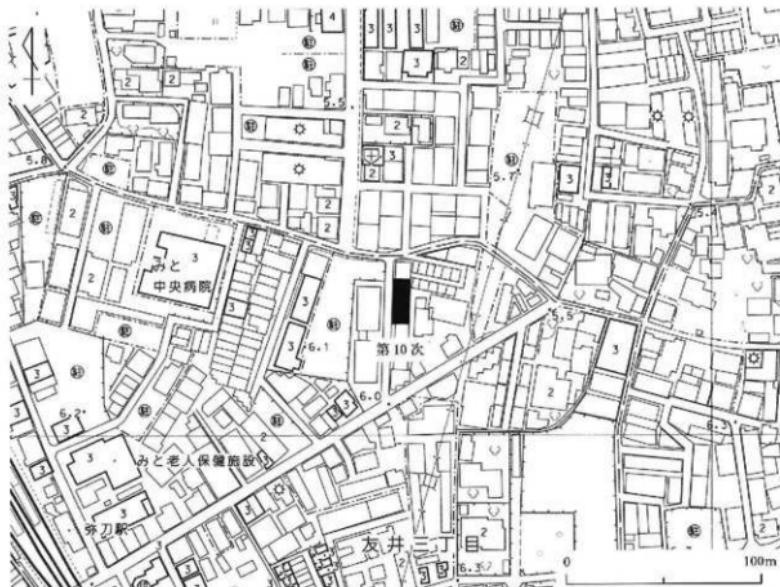
### 1) はじめに

弥刀遺跡は、近江堂・友井・源氏ヶ丘一帯に広がる弥生時代後期から中世の複合遺跡である。

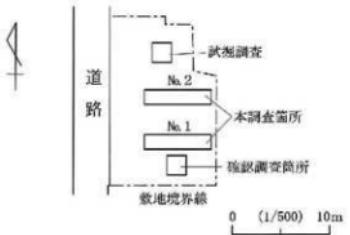
昭和38(1963)年、弥刀小学校の校舎建設工事中に須恵器・大型加工材などが発見され、占墳時代の遺跡として周辺地されるようになった。その後、みと中央病院での調査において弥生時代後期末から古墳時代前期の堅穴住居や掘立柱建物・井戸・土坑などが検出され、奈良時代から中世の掘立柱建物・井戸なども検出されており、長瀬川右岸に広がる集落遺跡であることが確認された。

### 2) 調査の経過

平成25年11月、東大阪市友井町三丁目340番13の一部において、個人施工による共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された(第1図)。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成25年12月3日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-1.0mから-1.5mの間で中世の瓦器及び土師器が出土し、溝を検出した。この結果に基づき協議代理者と取り扱いについて協議を行い、同日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で21.75m<sup>2</sup>である。(第2図)



第1図 調査位置図



第2図 調査トレンチ位置図

### 3) 調査の概要

#### 層序（第3図）

盛土。

1. 層 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質シルト。
2. 層 褐灰色 (10YR6/1) 細砂混じり砂質シルト。
3. 層 褐灰色 (10YR5/1) 細砂混じり粘質シルト。
4. 層 黄色 (2.5Y8/6) 粘質シルト。

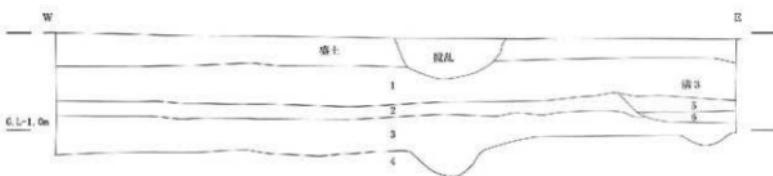
第1層と第2層は、近世の耕作上と考えられる。第3層は、中世の耕作上である。第4層は、水成堆積層である。いわゆる基盤層と考えられる。土器は主に第3層からの出土である。瓦器・土師器・黒色土器が出土し、概ね11世紀後半～12世紀前半の所産である。

#### 遺構

No.1とNo.2とともに第4層上面を第1面として調査を行った。

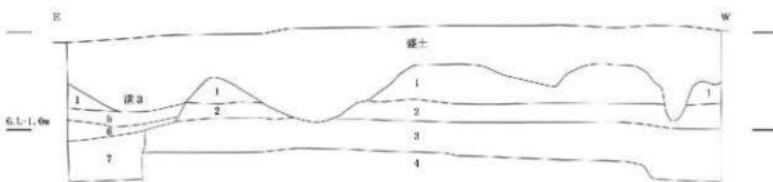
#### 溝1

東西に軸を持つ溝である。機械掘削の掘り過ぎにより溝2との関係は不明である。出土した遺物はないが埋土は第3層であり、他の遺構と同一時期と考える。



- |                             |                        |
|-----------------------------|------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質シルト     | 4. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質シルト  |
| 2. 褐灰色 (10YR6/1) 細砂混じり砂質シルト | 5. 明黄褐色 (10YR7/6) 粗～細砂 |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 細砂混じり粘質シルト | 6. 灰白色 (10YR7/1) 砂質シルト |

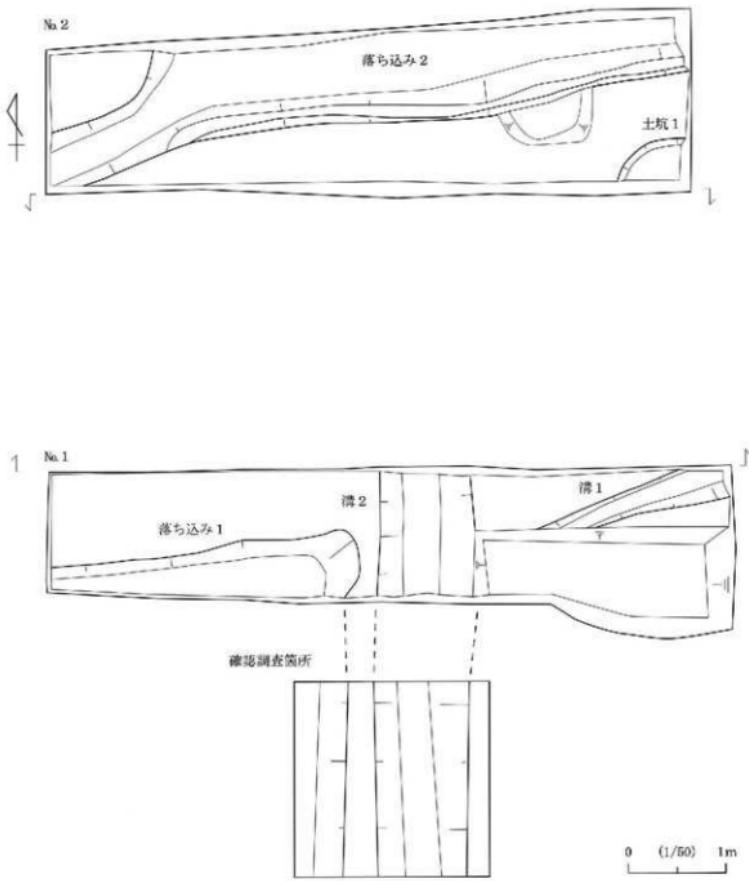
No.1 調査区北壁断面



- |                             |                        |
|-----------------------------|------------------------|
| 1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質シルト     | 4. 黄色 (2.5Y8/6) 粘質シルト  |
| 2. 褐灰色 (10YR6/1) 細砂混じり砂質シルト | 5. 明黄褐色 (10YR7/6) 粗～細砂 |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 細砂混じり粘質シルト | 6. 灰白色 (10YR7/1) 砂質シルト |
|                             | 7. 灰色 (M1/0) 粘土        |

No.2 南壁断面

第3図 調査区断面



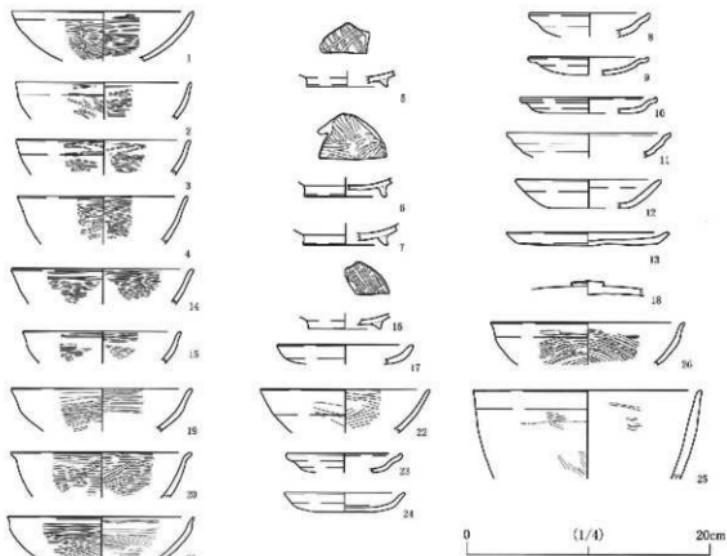
第4図 第1面遺構平面

### 溝 2

南北に走行する溝である。確認調査の際にも検出しておおり、少なくとも3mはあったと考えられる。No.2では検出できないことから、No.1とNo.2の間で途切れる。溝2を境に西側と東側で高低差があり、上地区画に伴う溝であろう。No.1ではあまり顕著ではないが確認調査では約20cmの差が認められた。

### 溝 3

これとは別に第2層上面から切り込む溝を壁断面において検出した。南北に延びる溝3である。西側部分のみであり全形は不明である。近世に属するものであろう。



第5図 出土遺物実測

#### 落ち込み 1

No 1の南西隅で検出した。調査区が狭く全形を確認できない。確認調査で検出した落ち込みに続くものと考えられる。

#### 落ち込み 2

No 2の北側半分を占める落ち込みである。高低差が約20cmあり、2段になっている部分もある。西側に西へと延びる溝が接続する。耕作面の段差の可能性がある。

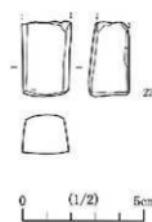
#### 土坑 1

第4層上面で検出したが、断面観察の結果、第3層からの切り込みであることを確認した。瓦器碗が出土しているが、層位との関係から遺構の時期を示しているとは考えられず、近世以降に属するものと考える。

#### 4) 出土遺物 (第4・5図)

##### 第3層

1～6は、瓦器碗である。内外面ともに密なミガキが残る。5は見込みに斜子状の暗文が残る。いずれも和泉型で11世紀後半～12世紀前半の所産である。7は黒色土器の底部である。内面が黒く装飾はない。外面は不明である。10世紀後半。8～13は、土師器皿である。8～10は「て」の字状口縁を持つ皿である。いずれも11世紀後半。



第6図 出土遺物実測

## 溝2

14～16は、瓦器椀である。内外面ともに密なミガキが残る。16は見込みに斜子状の暗文が残る。17は、土師器皿である。いずれも11世紀後半から12世紀前半。18は、須恵器杯蓋である。低平な摘み部が残る。9世紀前半であろう。

## 落ち込み2

19～22は、瓦器椀である。内外面ともに密なミガキが残る。23・24は、土師器皿である。23は「て」の字状口縁を持つ皿である。いずれも11世紀後半～12世紀前半の所産である。25は、黒色土器である。内外面ともに黒く、わずかにミガキが残る。外面の黒色部分は部分的である。10世紀後半であろう。27は、砥石である。凝灰岩製で上部を欠損している。4面とも使用されており平滑である。仕上げ砥であろう。

## 土坑1

26は、瓦器椀である。内外面ともに密なミガキが残る。11世紀後半。

## 5)まとめ

出土した遺物は、10世紀のものを一部含むが、ほとんどが11世紀後半から12世紀前半のものである。調査区域が狭くいすれの遺構も性格を決めるのは困難であるが、土坑1を除き中世の耕作に関係する遺構と考えたい。みと中央病院を調査した際にも中世のT字形に伸びる溝、柱穴群、土坑、井戸を検出している。出土した土器は、今回出土した土器と同時である。このことから、みと中央病院が集落の中心であり、当該調査区は周辺の生産地域であったと考えられる。

当該調査地は、弥刀遺跡の境目の箇所であり、届出者との協議を経て包蔵地外の部分で試掘調査を行った。試掘調査の結果、遺物・遺構は検出されなかった。層位は、水成堆積層であり河川または池と考えられ、中世の遺構は削平されたと結論付ける。

## 【参考文献】

中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

財団法人東大阪市文化財協会1990『埋蔵文化財発掘調査概報集－1998年度(2)－』

図版 1  
弥刀遺跡第10次発掘調査  
遺構



1. 確認調査  
(北より)

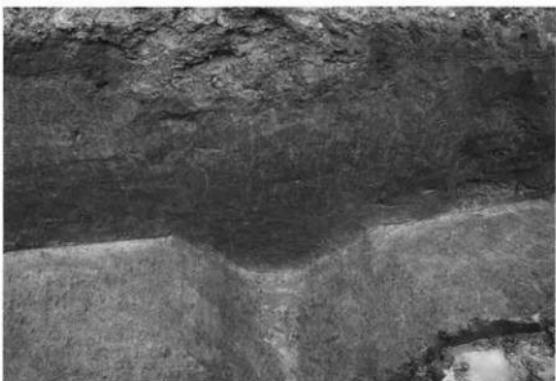


2. No. 1  
第1面  
(西より)



3. No. 1  
第1面  
(南西より)

1. No. 1  
溝2  
(南より)



2. No. 2  
第1面  
(西より)

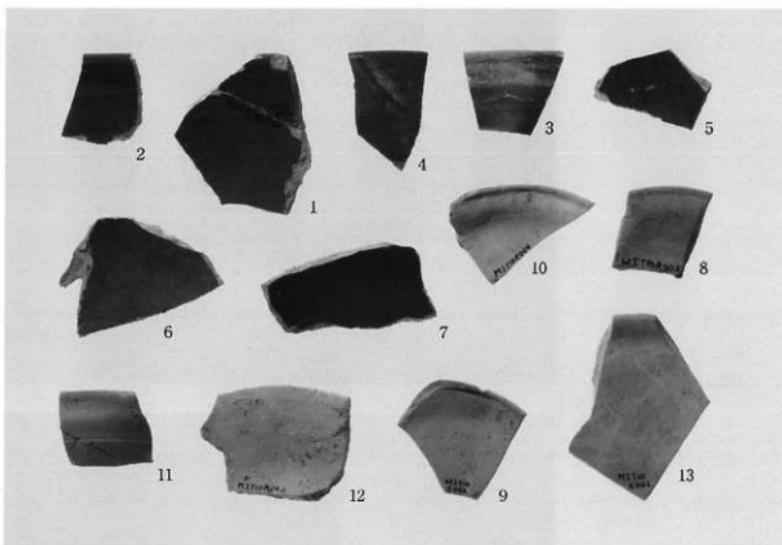


3. No. 2  
土坑1  
(北より)

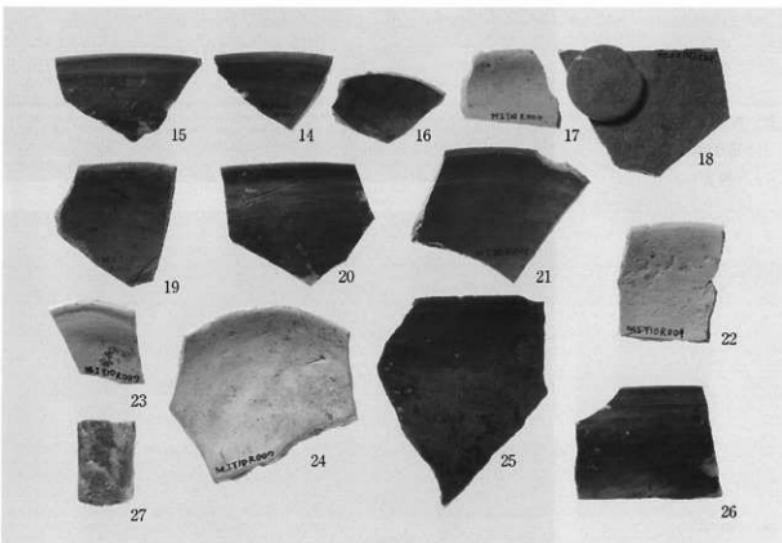


圖版3

弥刀遺跡第10次發掘調查  
遺物



1. 第3層出土 土師器・瓦器



2. 溝2・落ち込み2・土坑1出土 須恵器・土師器・瓦器・石製品

## 第8章 五合田遺跡第6・7次発掘調査

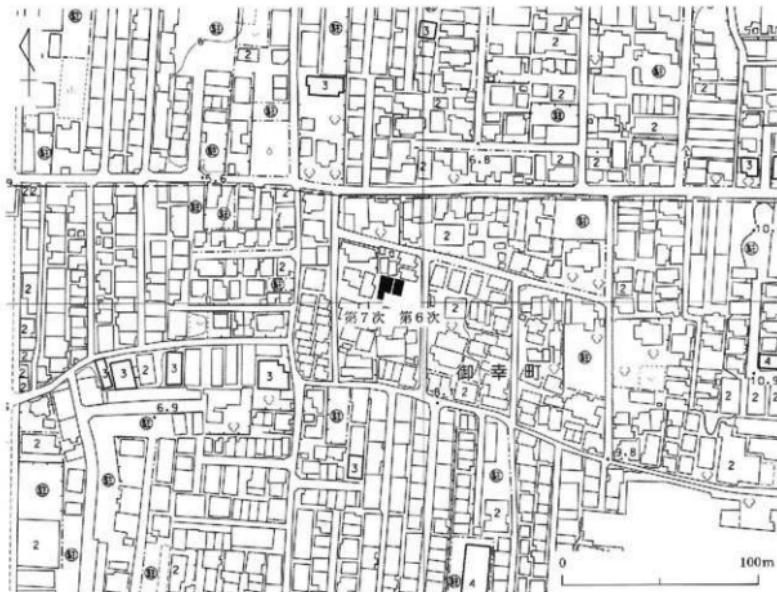
### 1)はじめに

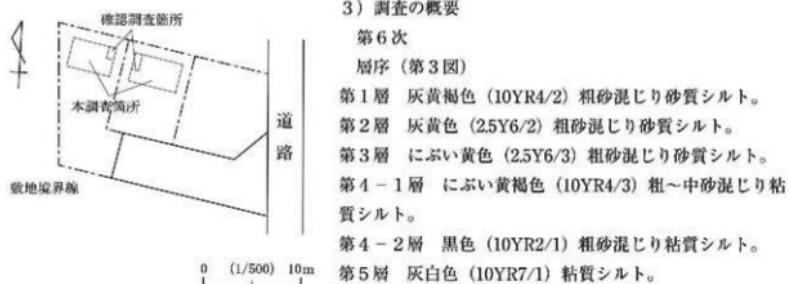
五合田遺跡は、生駒山西麓の標高10～13mの扇状地末端部から沖積平野にかけての範囲で、現在の末広町から御幸町にかけて広がる。長門川の後背湿地に立地し、泥質堆積物が卓越する。

五合田遺跡が所在する末広町から御幸町の一帯は早くから住宅開発が進められてきた地域で、現在も住宅や商店街が建て込んでいる。これまで遺構面の広がりをみる調査は行われていないが、平成10年度の下水道埋設工事に伴う調査で、古墳時代前期から中期の土師器、傳式系土器、製塙土器がまとまって出土した。平成14年度の下水道埋設工事に伴う調査でも羽釜が出土しており、一帯に集落が広がっていたと考えられる。

### 2) 調査の経過

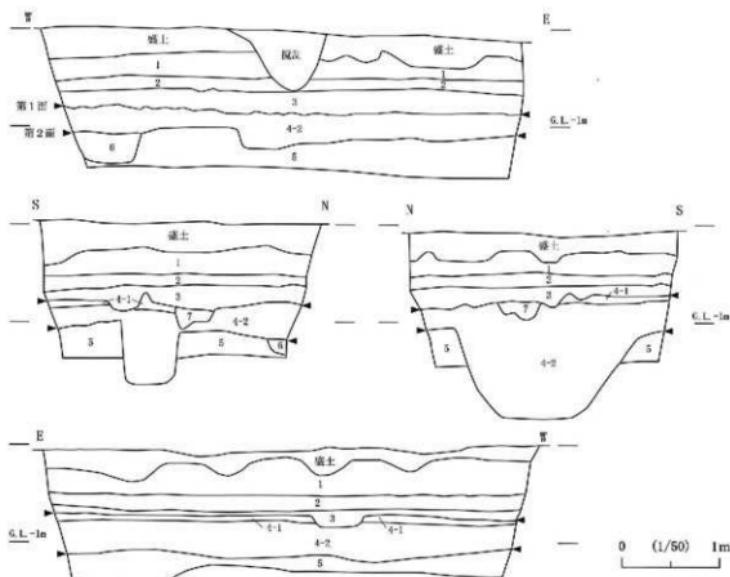
平成26年2月、東大阪市御幸町638番78(第6次)、638番79(第7次)において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された(第1図)。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成26年3月6日と11日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-1.0mから-1.7mの間で古墳時代の須恵器・土師器が出土し、土坑を検出した。この結果に基づき協議代理者と取り扱いについて協議を行い、平成26年3月8～10日(第6次)、3月11～14日(第7次)トレンチを設定して調査を行った。調査面積は15m<sup>2</sup>(第6次)、13.5m<sup>2</sup>(第7次)である(第2図)。





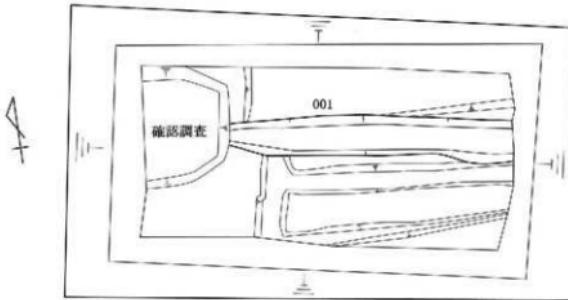
第2図 調査トレンチ位置図

第1～3層は、耕作土である。第4-1～5層は、後背湿地に堆積した泥質堆積物である。第2～3層からは、陶器が出土しており近世以降の耕作土である。第4-1～4-2層は古墳時代に堆積した層である。

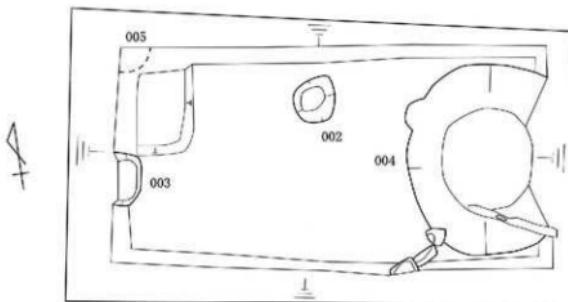


- 1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質シルト
- 2. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗砂混じり砂質シルト
- 3. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗砂混じり砂質シルト
- 4-1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗~中砂混じり粘質シルト
- 4-2. 黒色 (10YR2/1) 粗砂混じり粘質シルト
- 5. 灰白色 (10YR7/1) 粘質シルト
- 6. 黒色 (10YR2/1) 粗砂混じり粘質シルト
- 7. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト

第3図 第6次調査断面図



第1面



第4図 第6次調査平面図

#### 造構（第4図）

第4-1層上面を第1面、第5層上面を第2面として調査を行った。

#### 第1面

複数の時期の造構を同一の面で検出した。第3層に属する造構と第4-1層に属する造構があった。  
第3層に属する造構は、鶴溝である。

#### 001溝

上層の鶴溝により上部は削られているが、耕作に関する溝と考えられる。

#### 第2面

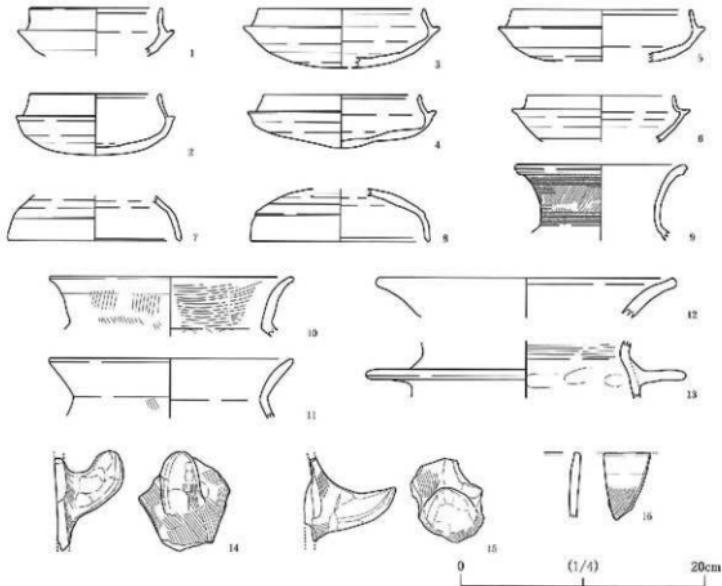
土坑・柱穴・井戸を検出した。

#### 002土坑

長径で40cmを測る。深さは15cm程度であり、単なる窪みの可能性がある。

#### 003柱穴

平面形は方形を呈し、一辺の長さ60cm、深さ60cmを測る。埋土には第4-2層と偽縞が混じる。



第5図 第6次第4-2層出土遺物実測

#### 004井戸

直径1.5mを測る。断面形は、上部が広く下部にしたがい径を減じて漏斗状を呈する。埋土には植物遺体が良く残存していた。埋土からは、須恵器杯(17)・須恵器壺(18)・木製品(19~22)が出土した。

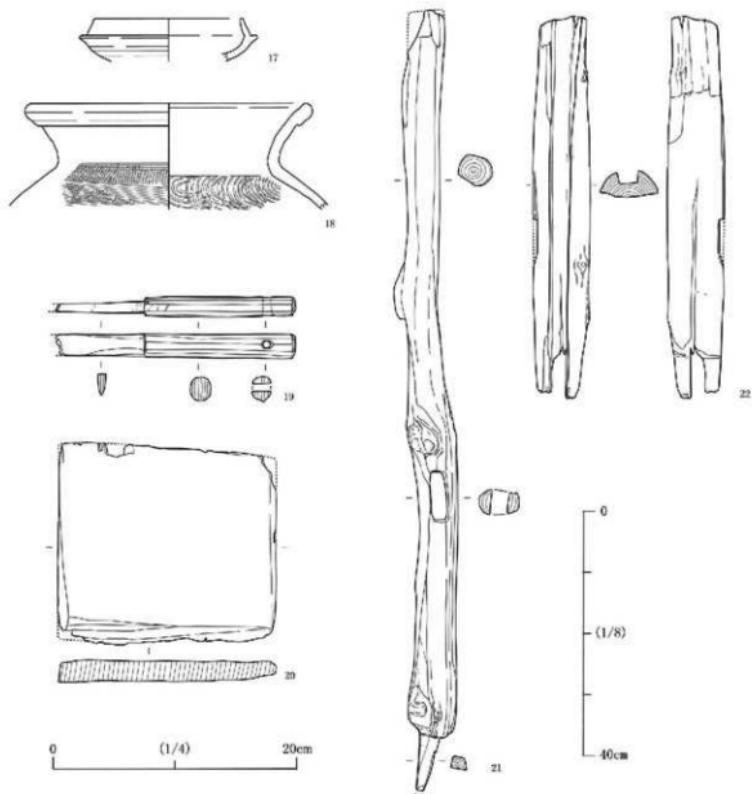
#### 005柱穴

平面では検出していないが、北壁断面において検出した。埋土には、第4-2層と偽碟が含まれており、003と同じく柱穴と考えられる。

#### 4) 出土遺物

##### 第4層(第5図)

1~6は須恵器杯身である。1~5は口縁端部に段を持つ。1・2はTK47、3~6はMT15~TK10。7・8は須恵器杯蓋である。MT15~TK10。9は須恵器壺である。口縁端部に突帯がめぐり、外面にハケ目が施される。TK47であろうか。10・11は土師器壺である。口縁部を外反させ、口縁部と体部の境は明瞭である。外面にはハケ目が残る。12・13は、土師器羽釜である。12は、大きく外反する口縁部で、端部内側をナデによってやや窪ませる。13は水平に伸びた鉗は、端部を丸くおさめる。内面には、ユビオサエとハケ目が残る。14~16は土師器瓶である。14・15は把手部分である。外面に明瞭にハケ目が残る。16は口縁部である。垂直に伸びる口縁部で上部は丁寧なナデが施され、下部にはハケ目が施される。



第6図 第6次調査 004井戸出土遺物実測

#### 004井戸（第6・7図）

17は須恵器杯身、18は須恵器甌である。17は口縁部を丸くおさめる。18は、口縁端部に突帯がめぐる。体部にはタタキを施したのち、カキメを施す。内面はあて具の跡が明瞭に残る。いずれもTK10。

19～22は木製品である。19は武器型木製品で刀子を模している。柄は面取りと穿孔が施される。柄頭は工具の痕跡がそのまま残る。20は板である。用途は不明であるが小口は丁寧に加工されている。21・22は建築部材である。21の下部は四角錐となるよう加工が施される。中央やや下部にはホゾ穴が開けられており、組み合わせによって使用されたものとわかる。表面に加工はない。22は丸太を半截したもので、その一部に溝状の加工が施される。

#### 第7次

##### 層序（第8図）

第1層 暗灰黄色（2.5YR4/2）粗砂混じり砂質シルト。

第2層 にぶい黄色（2.5Y6/3）粗砂混じり砂質シルト。

- 第3-1層 灰黃色(2.5Y6/2)粗砂混じり砂質シルト。  
 第3-2層 灰黃褐色(10YR6/2)粘質シルト。  
 第4-1層 褐灰色(10YR5/1)粗砂混じり粘質シルト。  
 第4-2層 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。  
 第5層 灰色(5Y6/1)粗~細砂混じり粘質シルト。

#### 遺構(第9図)

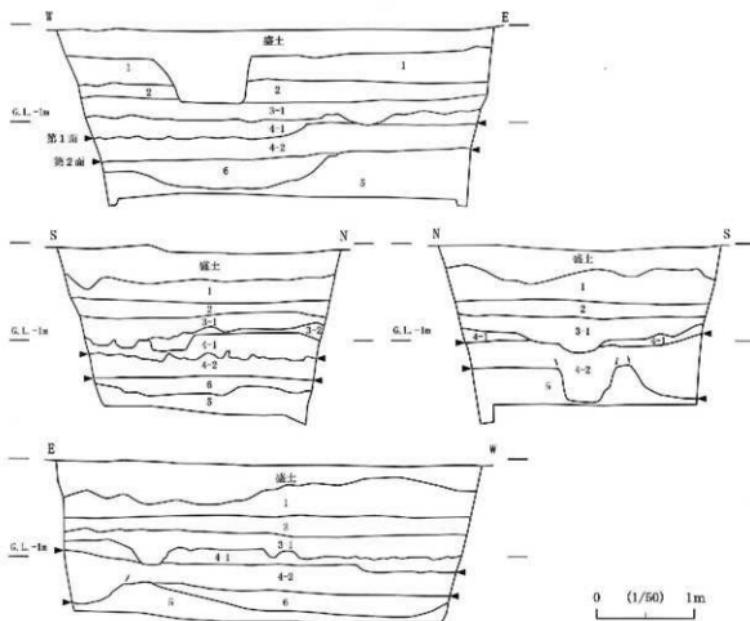
第4-2層上面を第1面、第5層上面を第2面として調査を行った。

#### 第1面

第3層に属する飼溝と第6次調査001溝から続く溝を検出した。

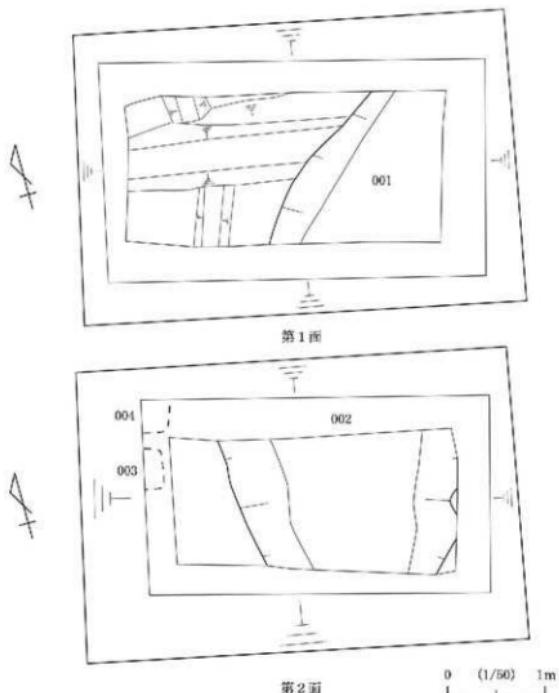
#### 001土坑

調査区の西側に土坑を検出した。幅の広い溝または耕作に関する遺構と考えられる。



- |                             |                             |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 灰灰黄色(2.5Y4/2)粗砂混じり砂質シルト  | 4-1. 褐灰色(10YR5/1)粗砂混じり粘質シルト |
| 2. に茶い黄色(2.5Y6/3)粗砂混じり砂質シルト | 4-2. 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト      |
| 3-1. 灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混じり砂質シルト | 5. 灰色(5Y6/1)粗~細砂混じり粘質シルト    |
| 3-2. 灰黄褐色(10YR6/2)粘質シルト     | 6. 黑色(10YR2/1)粘質シルト         |

第7図 第7次調査断面図



第8図 第7次調査平面図

#### 第2面

##### 002溝

南北に走る溝を検出した。幅は3m、深さ0.4mを計る。埋土からは、須恵器・土師器(32・33)・製塙土器(34~36)が出土した。

##### 003柱穴

平面では検出できなかったが、西壁断面において003柱穴を検出した。埋土には第4~2層と偽縛が混じる。

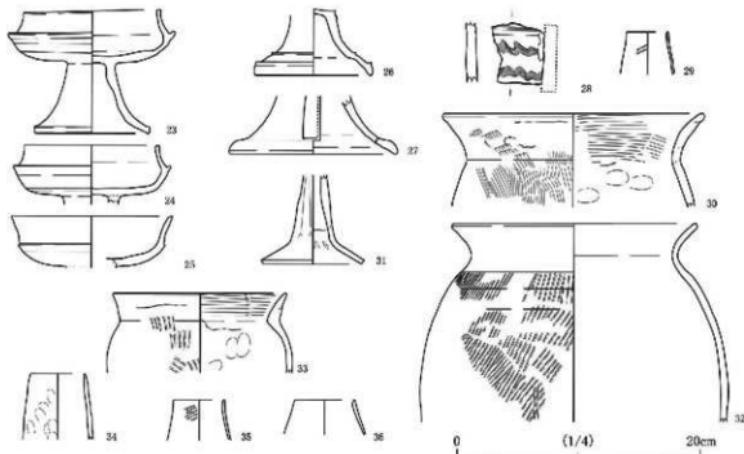
##### 004土坑

003と同じく平面では検出できなかったが、西壁断面において004土坑を検出した。埋土には第4~2層と偽縛が混じる。

##### 出土遺物(第10図)

##### 第4層

23~27は、須恵器高杯である。23~26は低脚、27は長脚の高杯である。TK47~MT15。28は須恵器器台である。体部の一部で方形透し孔と波状飾描文が残る。29は製塙土器である。外面に僅かに



第9図 第7次調査出土遺物実測

タタキが残る。30は土師器壺である。緩やかに外反させる口縁部を持ち、外面はタテハケを施す。内面は口縁部にヨコハケを施す。31は土師器高杯である。脚端部はハの字に開き脚柱部の外面にミガキを施す。

#### 002溝

32・33は土師器壺である。32は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。外面に平行タタキが施され、口縁部には丁寧なナデが施される。口縁部と体部の境に明瞭な凹線がめぐりさらにその下に2条の平行する凹線が認められる。いわゆる韓式系土器である。33はやや小型の壺である。口縁部は直線的に外方へと伸び、内面にはヨコハケメが残る。外面は平行タタキがわずかに認められる。34～36は、製塙土器である。いずれも丸底化した小型の器形である。

#### まとめ

5世紀末から6世紀前半にかけての遺構を検出できたことは大きな成果である。これまで五合田遺跡では、遺物の出土は多く見られたが明確な遺構は判然としなかった。今回、柱穴や井戸を検出したことにより、この地点を中心とした居住域が広がっていたと推測される。これまでの成果から遺跡の性格を推測するならば、馬の生産・飼育を行っていた波来系集団が集住していたと考えたい。

#### 【参考文献】

大阪府立近つ飛鳥博物館2006「年代のものさし－陶邑の須恵器－」

積山 洋2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塙」『季刊考古学・別冊14 畿内の巨大古墳とその時代』雄山閣

辻 美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

1. 第1面  
全景  
(西より)



2. 第2面  
全景  
(西より)



3. 002 土坑  
断面  
(東より)





1. 003 柱穴  
断面  
(東より)



2. 004 井戸  
出土状況  
(南西より)



3. 調査区北壁  
断面  
(南より)

図版3 五合田遺跡第7次発掘調査 遺構



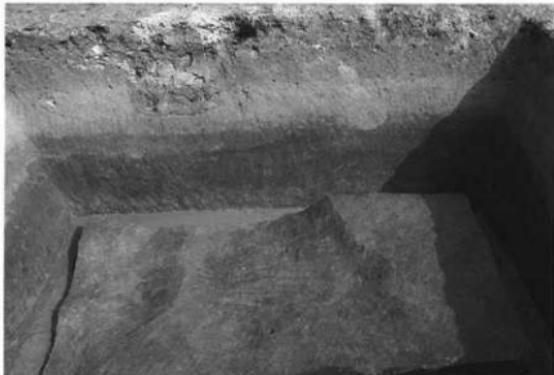
1. 第1面  
全景  
(西より)



2. 001 土坑  
断面  
(南より)



3. 第2面  
全景  
(南東より)



1. 002 溝  
断面  
(南より)



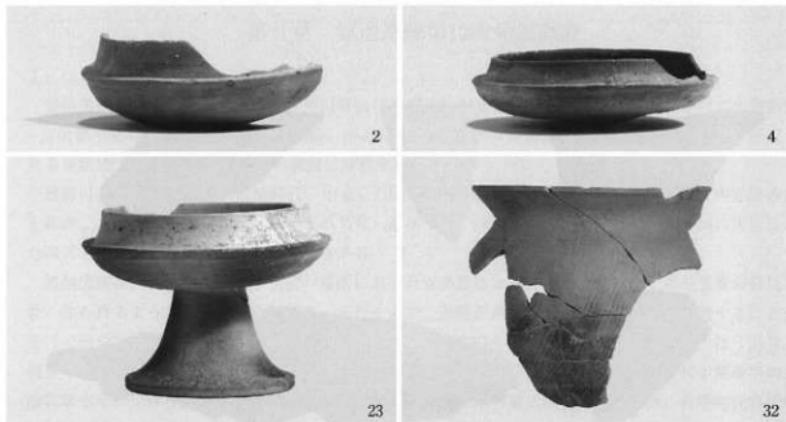
2. 003 柱穴  
断面  
(東より)



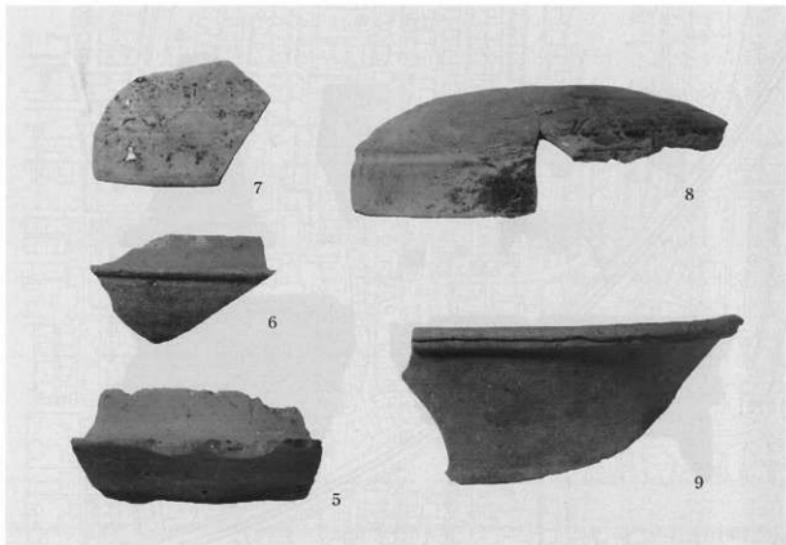
3. 004 上坑  
断面  
(南東より)

図版5 五合田遺跡第6・7次発掘調査

遺物



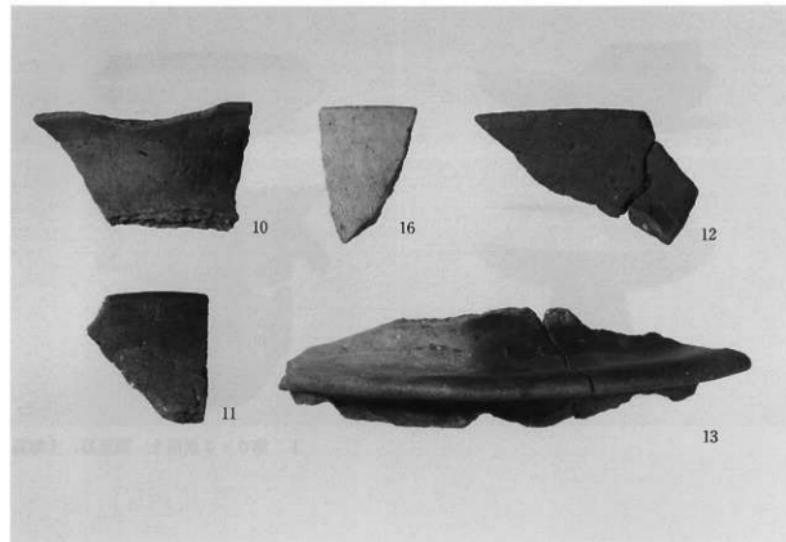
1. 第6・7次出土 須恵器、土師器



2. 第6次 第4-2層出土 須恵器

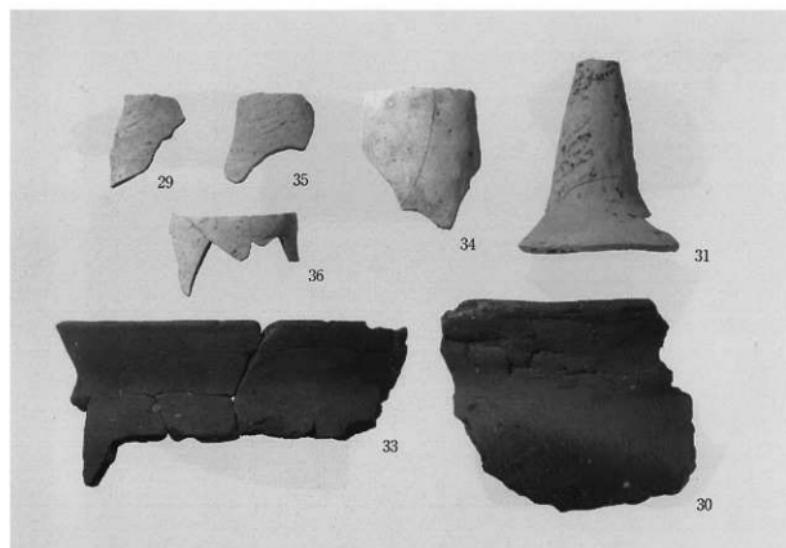
図版6

五合田遺跡第6・7次発掘調査



1. 第6次 第4-2層出土 土師器

遺物



2. 第7次 第4層出土 土師器・製塙土器

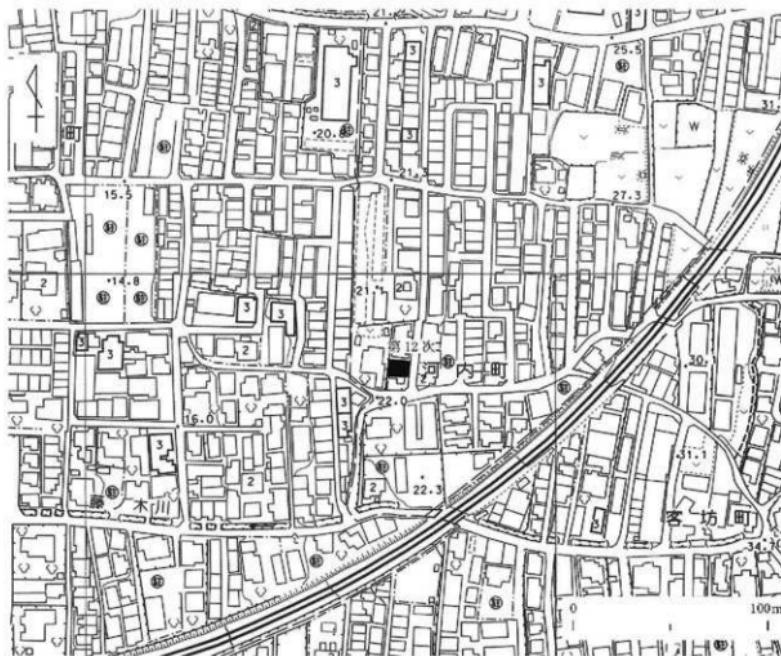
## 第9章 皿池遺跡第12次発掘調査

### 1) はじめに

皿池遺跡は、東大阪市河内町、喜里川町及び本町に広がる弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡・官衙跡である。遺跡は、東西約300m、南北約400mに広がり、客坊谷を流れる河川によって形成される扇状地上の標高15m～30mの範囲に位置する。

遺跡は、北に孤塚遺跡（古墳時代～中世）、南に河内寺跡（飛鳥時代～中世、国史跡河内寺魔寺跡を範囲に含む周知の埋蔵文化財包蔵地の名称）と接する。河内寺魔寺跡は、飛鳥時代後期に創建された天王寺式伽藍配置をとる古代寺院跡である。

皿池遺跡は、現在の繩手北中学校の場所にあった五条皿池より弥生時代後期の土器や遺構が発見され、知られるようになった遺跡である。また一方で、遺跡が河内国河内郡の大宅郷に位置することから、公館や官衙の存在がかつてより推定されてきた。昭和51年の繩手東小学校建設工事に伴う第3次調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物跡が検出された。その後の調査では、古墳時代中期後半の皿池古墳やそれに伴う船形埴輪等が出土した。また、平成17年の第7次発掘調査では、古墳時代の総柱建物が、平成18年の第8次発掘調査では渤海三彩の可能性がある三彩陶が出土した。これらの調査成果により、河内寺郡衙跡の様相が少しずつ解明されてきたところである。



第1図 調査位置図

## 2) 第12次調査の経過

平成26年5月に、今回の調査地での計画建物の建築確認申請にかかる意見聴取があった。今回の調査地は、当時は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、北側に皿池遺跡が近接し、また同遺跡は近年の調査により範囲拡大が進んできていることより当該計画地でも何らかの埋蔵文化財が発見される可能性が考えられた。このため、本件工事の設計担当者と協議を重ね、建築主からの依頼に基づき確認調査を実施することとなった。

確認調査の結果、中世の遺物包含層を検出し、当該地に埋蔵文化財が存在することを確認した。確認調査の結果を受けて、同日に引き続き発掘調査を実施した。

調査完了後、大阪府教育委員会文化財保護課とも当該地を周知の埋蔵文化財包蔵地皿池遺跡の範囲に含めるための協議を行った。今回の確認調査は、国庫補助事業の対象となる文化財保護法（昭和25年法律第214号。以下「法」という。）第99条第1項の規定により地方自治体が行う発掘である。したがって建築主には法第96条第1項に規定する埋蔵文化財の不時発見の届出義務の適用はない（法第97条第1項）。このため大阪府に周知の埋蔵文化財包蔵地の変更協議書を提出し、埋蔵文化財包蔵地の範囲を変更するとともに、建築主に対し法第93条第1項に基づく届出を提出する旨の行政指導を行った。

## 3) 第12次調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、調査トレンチの位置は第3図のとおりである。

### 調査トレンチ

第0層 盛土層。

第1層 黒褐色（2.5Y3/1）細礫混じり粘土質シルト。

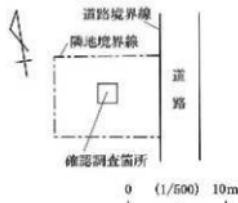
第2層 暗オリーブ色（2.5Y 3/3）中～細礫混じり砂質シルト。

第3層 黒褐色（2.5Y3/2）細～中礫混じり砂質シルト。

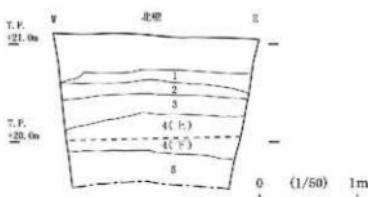
第4層（上層） 5cm～10cm大の礫混じりオリーブ黒色（5Y3/1）粗～中砂。

第4層（下層） 10cm～15cm大の礫混じりオリーブ黒色（5Y2/2）粘土質細砂。

第5層 暗灰色（N3/0）細砂混じり粘土。土師器・須恵器・瓦器含む遺物包含層。



第2図 調査トレンチ位置図



1. 黒褐色（2.5Y3/1）細礫混じり粘土質シルト
2. 暗オリーブ色（2.5Y 3/3）中～細礫混じり砂質シルト
3. 黒褐色（2.5Y3/2）細～中礫混じり砂質シルト
4. (上) オリーブ黒色（5Y3/1）粗～中砂 5cm～10cm 大の礫混じり
4. (下) オリーブ黒色（5Y2/2）粘土質細砂 10cm～15cm 大の礫混じり
5. 暗灰色（N3/0）細砂混じり粘土 上灰器・須恵器・瓦器含む遺物包含層

第3図 調査トレンチ北壁断面図

第1層から第3層は、出土遺物より近現代の整地層である。

第4層はオリーブ黒色砂に5cmから15cm程度の礫が混じる層で、遺物は検出されなかった。また、第4層は上層と下層の2層に分層できたが、トレンチ壁面が崩落したため分層のラインは破線で表している。4層上層は東から西へと下がることから、旧地形に沿った土石流又は扇状地堆積物と考えた。上・下層とも礫を多く含む地山（無遺物）層かと思われたが、念のため第4層下層をさらに掘削したところ、暗灰色粘土層を検出し、同層内から須恵器・土師器・瓦器が出土した。これを第5層とした。

第5層は暗灰色粘土層で、土師器・須恵器・瓦器を多く含んでいた。トレンチ範囲の制限があるとはいえ、第4層に比べ東から西への傾斜が見られないことや出土した遺物に磨滅が見られないことから、人為的な堆積と考えた。また、出土した遺物のうち口縁部等時期を特定できるものは少なかったものの、概ね12世紀代を下るものではないと考えた。

#### 4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は磨滅した状態ではないものの、口縁部を欠損したものばかりで、國化できるものはなかった。第5層から出土した遺物は、12世紀代の瓦器梶を含んでいたため、同層の堆積時期は鎌倉時代と推定した。

#### 5まとめ

既往の調査では、河内寺第5次調査で、本調査地より東側で中世に起きた客坊谷の土石流に伴う礫層堆積等の痕跡を確認している。また、史跡河内寺廃寺跡内の内容確認調査においても建物基壇周辺に人頭大の礫を含む土石流状の痕跡を確認し、その中に含まれる遺物から14世紀初頭に廃絶したと報告されている。

今回の調査で検出した第4層は、遅くとも平安時代後期～鎌倉時代以降に堆積したと考えられるため、これら周辺の調査によって検出された土石流状の堆積との関連も考えられる。

#### 【参考文献】

財團法人東大阪市文化財協会1999『埋蔵文化財発掘調査概報集－1998年度(2)－』  
東大阪市教育委員会2007『河内寺廃寺跡発掘調査報告書』

図版 1 盆池遺跡第12次発掘調査  
遺構



1. 調査前風景  
(南東より)



2. 調査トレンチ  
掘削状況  
(南東より)



3. 留め戻し状況  
(南より)

報告書抄録（その1）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう -へいせい26ねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成26年度－
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	仲林篤史・奈良拓弥
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	調査期間	調査 面積	調査原因
若江遺跡 (第87・89～91次)	(87次) 東大阪市若江南町二丁目43番2ほか (89次) 東大阪市若江南町二丁目482番4 (90次) 東大阪市若江本町四丁目956番ほか (91次) 東大阪市若江南町二丁目79番5	27227	98	(87次) 平成24年12月21日～ 平成25年1月26日 (89次) 平成25年12月5日 12月19日 (90次) 平成25年12月6日 ～12月9日 (91次) 平成26年7月3日 ～7月18日	(87次) 90m <sup>2</sup> (89次) 48m <sup>2</sup> (90次) 6.8m <sup>2</sup> (91次) 19m <sup>2</sup>	(87次) 共同住宅建設 (89次) 共同住宅建設 (90次) 個人住宅建設 (91次) 事務所建設
山畠古墳群	東大阪市上四条町2045番	27227	66	平成25年1月21日～1月31日	22.1m <sup>2</sup>	保存目的
鬼塚遺跡	東大阪市南莊町1796番1の一部	27227	50	平成25年10月4日～10月11日	30m <sup>2</sup>	高齢者向け住宅建設
弥刀遺跡	東大阪市友井三丁目340番13の一部	27227	106	平成25年12月3日 12月4日	21.7m <sup>2</sup>	個人住宅建設
五合田遺跡	(6次) 東大阪市御幸町638番78 (7次) 東大阪市御幸町638番79	27227	116	(6次) 平成26年3月8日 ～3月10日 (7次) 平成26年3月11日 ～3月14日	(6次) 15m <sup>2</sup> (7次) 13.5m <sup>2</sup>	個人住宅建設
皿池遺跡	東大阪市河内町670番11	27227	62	平成26年6月10日	4 m <sup>2</sup>	個人住宅建設

報告書抄録（その2）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若江遺跡 (第87次調査)	集落 官衙跡 城館跡 寺社跡	弥生時代 ～近世	堀・溝・井戸・ ピット・落ち込み・ 水田畦畔	土師器・ 瓦器 瓦 陶磁器 石製品 木製品	
若江遺跡 (第89次調査)	集落 官衙跡 城館跡 寺社跡	鎌倉時代 ～近世	礎石立建物・ 溝・畦畔	陶磁器 瓦器 瓦質土器 瓦 銭	
若江遺跡 (第90・91次調査)	集落 官衙跡 城館跡 寺社跡	鎌倉時代 ～近世	堀・溝・井戸	土師器 瓦器 瓦	
山畠古墳群 (第33次調査)	古墳	古墳時代	土坑状遺構・葺石	土師器	
鬼塚遺跡 (第30次調査)	集落跡 その他の墓	古墳時代 ～奈良時代	土坑・落ち込み	土師器 須恵器	
弥刀遺跡 (第10次調査)	集落跡	鎌倉時代	段差・溝	土師器 瓦器 須恵器	
五合田遺跡 (第6・7次調査)	集落跡	古墳時代	井戸・土坑・ 柱穴・溝	土師器 須恵器 木製品	
皿池遺跡 (第12次調査)	集落跡 官衙跡	鎌倉時代	(遺物包含層)	土師器 須恵器 瓦器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－平成26年度－

発行日 平成27年3月31日  
 編集・発行 東大阪市教育委員会  
 ☎577-8521  
 東大阪市荒本北一丁目1番1号  
 TEL.06-4309-3283  
 印刷所 株式会社 ミラテック

